

慶應2年(1866)

〔表紙〕

忠義公史料

市來四郎編
慶應二年九月

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事鞅掌史料」の記載あり
(紙数九六枚)〕

目録

安井息軒ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

伊地知壮之丞ヨリ大久保一蔵へ書翰

〔道島家記抄〕

諸侯御召ノ書状

梅澤孫太郎下臈

江戸ヨリ九州へ来書ノ略

〔道島家記抄〕

水野溪雲齋ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

大久保一蔵ヨリ西郷吉之助へ書翰

神奈川滞在市來十郎ヨリ新納嘉藤次へ照会

道島家記抄鹿兒島風説雅俗混淆

〔伊地知壮之丞ヨリ大久保利通へ書翰〕

〔伊地知壮之丞ヨリ大久保利通へ書翰〕

〔伊地知壮之丞ヨリ大久保利通へ書翰〕

〔伊地知壮之丞ヨリ大久保利通へ書翰〕

〔道島家記抄〕

西郷吉之助ヨリ大久保一蔵へ書翰撰海へ夷舶渡来

〔伊地知壮之丞ヨリ大久保利通へ書翰〕

大久保一蔵ヨリ西郷吉之助へ書翰各藩御召其他重要

〔伊地知壮之丞ヨリ大久保利通へ書翰〕

道島家記鈔

農政改良意見建白書扣市来正右衛門

二六九 安井息軒ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

(悦之助君ノ為人)

東京府御詰

黒田嘉右衛門様

安井息軒〔衛、妖肥藩備者〕

秋涼愈御清適、大賀此事ニ御座候、然ハ御藩之〔高津入封〕悦之

助様ト申公子、被為入御賢明之由風聞ニテ承候、少々

諷有之、御志行才学等委細承知仕度、不苦候ハ詳細御

書取、稲津便ニテ御投下被下度奉願候、頓首、

九月初三日

安井息軒

黒田嘉右衛門様

二七〇 伊地知壯之丞ヨリ大久保一蔵へ書翰

高牘御投与被下、忝拜見仕候、御病氣も日々御平快之

由、芽出度奉祝候、小子ニも無異致滞坂居候間、乍憚

御安意可被下候、大原卿初御奮発御参〔重徳〕

内、御議論之向被仰聞、大愉快感佩之次第、天下之正

氣未墜地、挽回之機も追々相生可申候、其後御参

内御決議之御模様何様ニ御座候哉、奉案事ニ御座候、

市橋も今夕御発途、明五日上京之由、其上ハ御様子

相分可申候、平戸・大村藩屢相見得、色々議論ヲ受て、

十万両御金談一件も今日迄ハ御受不申出、再ひ致催促

置候、内々承り候得は、御受はいたす賦ノ由ニ御座候、

岩〔分立〕下家も御帰国ニ決候由、御下坂之程奉待上候、大風

雨後下々別て困苦、御施米有之度旨被示聞、世上之人

氣ヲ取ハ此上より之事ニて、至極御同意申上候、併来

月来々月比ニ至り候ハ、増可及困窮、此節御施米有

之候上ハ、今一層下々差迫り候折ハ、其俟見置も難出

来、且ハ当分之地御困米ヲ以相弁し、跡立て補米い

たし候ては、若哉急ニ御上京等之事件有之候ハ、外

ニ御備之道も無之由故、当分より致都合、下々十分困

窮之機ニ乘し、御施行有之如何可有之哉と、木場〔清生〕・税

所致内評為御内答申上候、其通ニて宜御座候ハ、施

米之員數為御知被下度、左候ハ、只今より馬關又ハ肥

筑辺江掛致都合度、可成過分ニ御施行有之度候得共、

御存之通当分御金支之砌、殊ニ米価騰貴之極故、十分

ニハ相備り間敷哉、御内評之上被仰聞可被下候、先は

御酬且時候御伺旁得貴意候、追々可得貴意候、頓首拜

具、

寅九月四日

伊地知壯之丞

大久保一蔵様

左右

追て、原市之進大目附江転進之由、水之手ヲ以専ら

致処置度、向々仕掛候哉ニ大村人申居候、仰願ハ先
日御参

内之公卿方之御議論通、

朝廷より此節ハ断然と確命相下り度、左候ハ、御尽
力之道も相開ケ可申候、何分ニも近々ノ内ニハ、天
下之形勢も帰向相分り可申候、天下之御為内々之御
尽力奉希候、以上、
〔大久保利謙氏所蔵本にて校訂〕

二七一 〔道島家記抄〕

二七一ノ一
將軍薨去ノ事ハ慥ニテ、一橋將軍ニ被召建候哉ニ相聞
得候、此事ハ仰渡ニテモハヤ参居候由候得共、何様ニ
押隠シ被居候ヤ、人心疑悪ヲ生シ居候、

九月三日ニ承候間、五日記ス

二七一ノ二
寅九月三日夕方蒸気船帰帆越前ノ家老差越候由、是ハ
交易ノ一条ニテ候由、

但今日承候得トモ、家老ニテハ無之、内実ハ春嶽殿
ニテ候ヨシ〔卷〕「(由利公正專任ナリ)」

九月六日記ス

二七二 諸侯御召

〔包紙〕

「勅書」

嶋津〔欠〕大隅守

徳川中納言言上之趣も有之、諸藩衆議可被

聞食候間、速ニ上京致し、決議之趣は中納言を以可有

奏聞旨、被

仰出候事、

九月

追て、修理大夫可被

召之処、御用筋御都合も有之ニ付、

上京可有之候、

〔徳川慶喜、前尾州藩主〕
尾張前大納言

〔徳川茂承、和州藩主〕
紀伊中納言

〔前田慶寧、加州藩主〕
松平加賀守

右自分上京候様、

〔鍋島齊正、前佐賀藩主〕
松平閑叟

〔山内豊信、前土州藩主〕
松平容堂

〔伊達宗城、前宇和島藩主〕
伊達伊豫守

島津大隅守

右銘々当主可被召之処、御用筋御都合モ有之二付、当主代リトシテ上京候様、

細川越中守〔慶順、熊本藩主〕

右御用筋御都合モ有之二付、長岡良之助モ一同

上京候様、

松平阿波守〔篠須賀齊裕、阿州藩主〕

同 淡路守〔茂韶、阿州藩世子〕

松平美濃守〔黒田春澤、筑前藩主〕

同 下野守〔長知、筑前藩世子〕

松平安藝守〔淺野長朝、芸州藩主〕

同 紀伊守〔長勲、芸州藩世子〕

藤堂和泉守〔高敬、津藩主〕

同 大學頭〔高深、津藩世子〕

松平隠岐守〔久松勝成、伊予松山藩主〕

同 式部大輔〔定昭、伊予松山藩世子〕

右父子之内上京候様、

松平陸奥守〔伊達慶邦、仙台藩主〕

松平因幡守〔池田慶徳、因州藩主〕

松平出羽守〔定安、松江藩主〕

松平三河守〔慶倫、津山藩主〕

有馬中務大輔〔慶頼、久留米藩主〕

松平備前守〔池田茂政、岡山藩主〕

立花飛驒守〔鑑寛、柳河藩主〕

右ノ面々上京候様、自然病氣等差支候ハ、御

用筋請答出来候重臣之内差出候様、

松平大藏大輔〔慶永、前福井藩主〕

松平肥後守〔容保、会津藩主〕

松平越中守〔定敬、桑名藩主〕

上杉式部大輔〔茂徳、米沢藩世子〕

右当分上京之面々

右慶應二年丙寅九月七日、

朝廷ヨリ諸侯御召之書付也、

二七三 梅澤孫太郎下臈

一橋公用人梅澤孫太郎〔卷〕、為御使候肥後〔若乙〕並佐賀〔若乙〕松平肥

御国へ被罷下候由、右ハ一橋ヨリ御上京有之候様、被

仰越候御使卜内々御沙汰候事、

但昨九月六日、蒸氣船ヨリ着、全七日於二丸中將様〔卷〕「久光」

御逢之賦、

寅九月七日記

二七四 江戸ヨリ九州へ来書ノ略(当時ノ巷説)

九月七日

(忠職、敦實藩主)

酒井飛驒守応援ノ節、夷人申立候ハ、大樹公御滞坂ノ
事故、必ス大坂へ廻船、体ニ寄り、(二条斉敬)関白殿下へモ拜謁相
願度トノ事、

一 兵糧都合三十日支度ト申事、右願筋不相叶候ハ、兵
端ヲモ開決心ノ由、英夷謀主ニテ、イツモノ通暴論相発
候得共、佛夷中ニ立、日本ノ為尽力トノ事、

一 長人英船へ乗組居候由、且堂々タル大諸侯ノ内、陰ニ
御促相成トノ事、右実説ナル時ハ、如何ノ功有之候ヤ、
聊難安勢ニテ、諸藩深ク苦心罷在候事、

一 長征ノ

勅諭御申請ノ為御上洛前、肥後ヨリノ建議、長州御呼
出ノ期日相過候逆、直ニ御打入ト申儀ハ、余リ御迫切
ニハ有之間敷ヤ、期日迄不罷出候ハ、一先閣老監察
等ニテ、山口迄モ御出張ニテ御糺問有之、其上ニテ不

遜暴戻ノ儀御座候ハ、其節御征戰可然ト奉存候旨、
及建議候処、閣老答ニ至極尤ノ儀、勿論此度御進発ト
申候テモ、暴卒ニ御攻撃ト申訳ニハ無之、先彼ノ近地
迄兵馬ヲ被進候上、彼等御呼出ニテ罪状御糺被為在、
其上ニモ不服候ハ、初テ干戈ヲ御用ノ思召候間、其
段ハ安心有之候様トノ事ニテ、肥後モ承服ノ由、

一 薩藩ノ風評、

薩・長人英船へ乗組、幕吏横濱ニテ見留候トノ事、
一 薩、外ハ洋人ヲ誘引シ、内ハ征長ノ事ニ付、

一 薩幕ヲ騷擾スルトノ事、

一 西郷等帰国ノ義、賀陽宮ヨリ御留ノ処、皆々引去候由、
仮令宮ノ命無之共、此大事件ニ居留モ可仕候、意外ノ
儀、是モ征長一件ニ付テノ建議不被行ヲ憤リ候テノ義
カ、又此面々帰藩ノ義、近年來隅州侯事ヲ御用以來、
追々諸名士御拔擢有之候処、旧來ノ愚輩失意ノ者共、
君側ノ士ノ小間隙ニ乗シ、少壯輩ヲ鼓動シ内乱ノ機ヲ
発シ候付、急ニ帰藩滞留難出来勢歟、

一 大久保一蔵

朝家へ建言ノ趣、猶又聞合可申上候、

二七五 〔道島家記抄〕

二七五ノ一

長人小倉ヲ拝領セシカトモ、段々土着之士ニテモ候ヤ、

逃ヲ打毎日程一兩人ツ、殺伐無之事ハ無之程ニテ候

ヨシ、

九月六日承候、

但小倉領ノ内ニ、川原別庄トイフ所アリ、相成要

害之地ニテ、是ニ皆々一所ニ被居候テ、夫ヨリ三

里計モ踏出シ、夫ヨリ長門ヲ襲ヒ討候由ニテ、尤

一筋道トヤラニテ、堅固成地ニシテ〔采〕〔世説〕〔久カ]

九月七日承候、

二七五ノ二

一橋ノ用人梅澤源太郎トイフモノニテ、夕部着帆ニテ

今日登城、御両殿様御逢被成候由、尤筑前・肥前・肥

後抔モ寄、御内使者相動候テ、此御方ヘモ被差越候由、

尤肥後侯ハ則上京被成候ヨシ、且又二三日ノ説ニハ、

土州侯・肥前侯・越前侯・肥後侯ヘハ、御上京之事被

仰出候得共、此御方ヘハ為何事モ無之トノ風説ニ候得

共、云々ニテ疑惑モ相晴レ候半欵、

但小松殿・西郷吉殿、先達テヨリ霧島・日當山等ヘ

湯治ヘ被差越居候処、一昨日兩度モ急キ被遣ヨシ、

尤御内使者ノ事ハ前以ヨリ相知レ居候、此兩人被

相加候ヤニ風説モ有之候、是等御承知ハ決テ斷モ

可有之ニテ候事、

九月八日朝記ス

但小松抔昨夕ニ相帰候ヤ、今日出殿相見得候、

九月八日記ス

二七六 水野溪雲齋ヨリ黒田嘉右衛門ヘ書翰

〔番号一八ノ三と同文により削除〕

二七七 大久保一蔵ヨリ西郷吉之助ヘ書翰

〔大英断ヲ促ス〕

御両殿様益御機嫌能被為遊御座、御同慶奉存候、次ニ

貴兄弥以御安祥被成御精務奉恐悦候、尔后御当地之形

行不思議之憂態ト罷成、大原卿始列公群参之方ニテ、

二條殿下・尹宮御辭職被仰立候時宜ニ相成候得共、段

々内輪混雜之次第ニテ、夫故諸藩御召之事モ御延引相

成、漸々今日

御沙汰相成候テ、岩下家御出立ノ都合相成候、旁巨細之事情ハ、御直ニ御承知相成故ト、態略文仕候、此上御進退之事ハ、

御趣意モ被為 在、且御熟評之上御決可相成候得共、何分御大事ノ時節ニ、御傍觀ハ難被為出来、勿論来年十一月兵庫開港之期日モ差迫、今般英夷へ御談判之趣モ有之、内外夷ニ難差置御場合ト奉存候、併即今御出馬被為 在、万々 御成功之見据ハ更ニ相付兼、殊ニ橋議詐百端之心術、至平ヲ以賢侯之公論ヲ容レ候儀モ無覺東、内夷ハ今般諸藩御召之事モ、断然

朝命之処ハ色々御拒ミ申上候次第ニテ、其底意モ推計セラレ、大蔵大輔様ニモ、内夷ハ御憤懣之御様子ニ被聞申候、右旁之形行ニテ、夷ニ此間ノ御尽力ハ不容易御場合ニ御座候得ハ、十分(卷)「統再夢紀事参照」

御決断被為 在候上ナラテハ、中々其詮有御座間敷奉存候、幸ニシテ將軍職御辞退固ク申上候テ、此議ハ諸藩来会迄ハ相動申間敷候付、誠不可失機会ト存候間、共和之大策ヲ施シ、征夷府之権ヲ破(卷)「長州ト共和大策ヲ施スノ意」

皇威興張之大綱相立候様、御尽力奉伏冀候、成否ニ拘

ラス可竭ハ此時ト愚考仕候、何分宜敷御周旋之程伏テ御頼申上候、決論之次第等、岩下家御直ニ御演説可成事故、何モ相省、大意迄アラ〜申上候、尚近々豊瑞丸ヨリ可申上候、拜首、

九月八日

大久保一藏

西郷吉之助様

侍史

追テ御決議之形行ハ早々御往復被下候様、万々奉願候、諸藩上京モ、大形御国ヲ目的ニイタシ候半ト被察申候、御決断ノ上ハ固ヨリ、諸藩ヲタノミ候事ハ出来申間鋪候得共、一応ハ公論ヲ以テ、御使者ニテモ被差立候様有御座度、頃日承ル処ニテハ、隣肥余(卷)「熊本ヲ云」程模様相変候由、尤長岡監物議論相用ラレ候向之由、断然タル事ハ出来間敷候得共、薩・肥合従イタシ候得ハ、風聞計ニテモ愕然タル模様ニハ相違無御座候、小藩ニテハ御座候得共、柳藩ト大ニ結合候筋ニ相見得申候、真実御国へモ依頼イタス嘶振ニ御座候、御召之 御沙汰書、徳川中納言ヨリ言上候様云々之趣ハ、原市之進(卷)「忠感」ヲ以余程周旋為致候由、是ヲ以幕威ヲ張候心底顯然タル次第ニ御座候、

朝廷ヨリ長防之儀ニ付、大樹之喪ニ依リ、兵事見合
候様ト之御書付、一向条理不相立者ニテ、是ヲ以橋
ヨリ御調文申上候由ニ御座候、長モ止ント欲シテモ、
不能訳ニ御座候、幾重ニモ右辺之次第ニテ六ヶ敷形
勢御座候故、大決策ニアラサレハ、尋常之事ニテハ、
御勤座ナキニ如サル事ト奉存候、

二七八 神奈川滞在市來次十郎ヨリ新納嘉藤次へ

照会

夷船攝海へ相廻候哉之由相聞得候ニ付、清水卯三郎ヲ
以テ為聞合(ト)候処、佛船ハ明後十一日出帆、英・蘭ノ
船ハ来ル十二日出帆之筈ニテ、英・佛・蘭三ヶ国之軍
艦都合十一艘、愈攝海へ相廻由ニ相聞得、何等之趣意
ニテ差越哉ハ相分リ不申候得共、兵庫開港願之儀共ニ
ハ有之間敷哉、関白殿下へ拜謁致シ、常時幕府之制令
行ハレ兼候ニ付、大諸侯ハ思ヒくニ相成リ、外国へ
モ替ケ間敷事ノミ申出候ニ付、関白殿下へ直談判致ス
ヘシト、夷人トモ申居候得共、委シキ趣意相分不申候
由、卯三郎ヨリ申出候、乍併幕役追々右船へ差越、酒

(忠職、教習藩主)
井飛驒守様ニモ、昨日迄ハ御応接為有之由、水野和泉
(山形藩主)
守様ニモ、今日当地へ御越之由ニ付、御談判有之筈之
由、依テ時宜ニ依テハ、攝海へ向キ候事ハ、猶予致候
歟モ難計候得共、卯三郎承ル趣ニテハ、夷人共承服不
致、愈出帆可致旨申出候、其地ニテ南部彌八郎ニモ、
精々致探索候様申談置候、爰許ニテモ折角手ヲ付置候
間、相分候儀ハ早々可申上越候得共、只今迄之形行ハ
極急之町便ヲ以テ、京師迄注進相成候方可然申談候、
左候テ猶又相分候趣モ有之候ハ、又ハ明後弥出帆致候
ハ、一左右ハ飛脚ヲ以テ不被相違候テハ相濟間敷、於
御同意ハ町便御差立相成度、此段申越候、以上、

神奈河滞在

丑九月九日

市來次十郎

新納嘉藤次殿

二七九 道嶋家記抄(當時鹿兒島風說雅俗混淆)

九月九日帰帆ノ由、
(志(橋次郎太助)
一橋ノ用人ハ去ル九日ノ朝出帆イタシ候由、

但此節拾ヶ国ノ大名被召呼筈ノ由、肥後・肥前・筑

前・筑後・土州・阿州・伊豫松山・此御方等ニテ、

〔卷一(久光公)〕

二丸御受被成候得共、此節ハ御内使者ニテ差向、

開運丸ヨリ申来筈ノ由、尤小松・西郷モ直ニ罷帰

候、西郷カ説ニ、會津ヲ被退候儀、何様ノ御所置

ニ候ヤ、會津程先祖ヨリ勤王ノ志ヲ相立候家柄ハ

無之、夫ヲ被退候儀、何分公義カ正シク無之、公

義ヲ御失ヒ被成候テハ、難相濟段屢々演説イタシ

候処、夫ニハ一言ノイラヘモ不致候由、此モノモ

大体ノ者ニテ無之、殊ノ外弁舌者ニテ候由、

二八〇 〔伊地知壯之丞ヨリ大久保利通へ書翰〕

巻封

大久保一蔵様

伊地知壯之丞

重陽之佳祥芽出度奉賀候、昨夜ハ参上、乍毎長座御退

屈奉察候、

御着 一折

半切 五折

右は甚輕少之至御座候得共、御立ヲ奉祝印迄致進上候

間、御笑留可被下候、以上、

重陽

〔大久保利謙氏所蔵本にて校訂〕

二八一 〔伊地知壯之丞ヨリ大久保利通へ書翰〕

包紙 慶応二年三月廿七日

大久保一蔵殿

伊地知壯之丞

大和錦并蒔絵物等、於其元御買入之上差下相成候様、御

出立之節及御示談、就ては此節蒸氣船三邦丸上坂ニ付、

右帰帆便ニは、是非御買入差下相成候様、御取扱給度、

客人も来月廿日比之賦候付、右之間ニ逢候様、御都合御

取計可給候、此旨尚又御掛合申越候、以上、

寅三月廿七日

伊地知壯之丞

大久保一蔵殿

〔大久保利謙氏所蔵本にて校訂〕

二八二 〔伊地知壯之丞ヨリ大久保利通へ書翰〕

包紙

大久保一蔵殿

伊地知壯之丞

急キ

京

從浪華

九月十日

清爽之時氣最早御平快御起居、増御清穆御座候半、恐賀不斜奉壽候、随て小生無異致滞坂候間、乍余事御休慮可被下候、岩下家御着御地形勢等承知いたし候、御同人君も、今朝未明御乗船御出船相成申候、其后之御地御様子如何ニ御座候哉、市橋上着已来、参

内御議論等も可有之、此地幕人数追々引払候向ニ被伺

申候、偕大和交易方石川確太郎取起候得共、其成にて、

于今全ク御手不相付、廢不廢之間にて、於御国（小松清麿）元帶刀

殿・右衛門殿（程久武）よりは是非御取起相成度致承知候得共、流

説紛々信疑難決定て御留被置候、然処小子（税所篤）・長藏上

坂ニ相成否篤と聞糾致決着、罷下り候様致承知候間、

拾万両御請ノ都合も両三日ハ相延模様にて、豊瑞丸出

船も廿日比ニ可相成奉存候付、木場傳内（傳内）・税所長藏・

小生三人、三四日之間右様差入、現実相糾ス所ニ致内

評、明日より差越申候間、左様御含可被下候、前件拾

万両御金談ハ、無疑仕忒候賦ニ御座候間、御安心可被下候、

此一事不相調節ハ、第一

御上京之御都合ニ相拘儀ニ御座候、施米一件猶又岩下

家よりも致承知候、依之御同人江奉托、商人林徳左衛門ヲ馬關・肥前呼子辺江、今朝出船之翔鳳丸より差遣候、右は大和船數艘借入致廻米、此利得ヲ以御地施米ニ被振向賦ニ取究候ハ、可成他所相調候様、都合いたし候様可取計候、先は氣候御見舞、且前条為御含申上置度如此御座候、頓首敬白、

九月十日

伊地知壯之丞

大久保一藏様

人々御中

〔大久保利謙氏所藏本にて校訂〕

二八三 〔伊地知壯之丞ヨリ大久保利通へ書翰〕

別啓

豊瑞丸出船之儀ハ、御地御都合次第之事にて、強て難願上候得共、小子ニも拾万両之御金談御請不申出内は、逆も殆足相調不申候、其故交易方一条も有之、明日より大和江出掛申候、来ル十六日・七日ニ掛候ては無相違罷帰可申候、依之相成申事候ハ、豊瑞丸出船廿日後ニ相成候ハ、於小子は無此上仕合ニ奉存候、旁御含可然様願上候、此旨内々貴所様迄御願申上候、御銀

主御請不致内、蒸気船致出船候得は、相応之金子も持
越事故、小倉船より引取も如何ニ有之、いつ引取と申
心組も無之様罷成、心配之儀ニ御座候間、宜御合被下
候様偏ニ願上候、以上、

重陽後一日

壯之丞

一藏様

〔天久保利謙氏所蔵本にて校訂〕

二八四 〔道島家記抄〕

二八四ノ一

九月十五日記ス、

〔采〕〔金艦戦争〕〔采〕〔島津主殿久壽〕

亥年戦争後、鑄銭方永吉屋敷へ相建居候処、此節安田

徹三受負ニテ、大門口ニ相直リ、天保銭六拾四文ニテ

売上、其余銭ヲ以テ諸給分可相払ノ由、永吉屋シキへ

八老万兩被下候由、寅九月初方ヨリ鑄銭方相始リ候、

但安田ハ賃銭払ヲセリ詰候ニ付、人氣甚不相進候由、

夫故天保銭モ思フヨフニ宜不出来模様ニ候、是モ

決テ他領へハ向兼候半〔采〕〔事実〕

二八四ノ二

金相場御物九貫文直成、市中相場ハ凡二十貫文内外ノ

ヨシ、去月末方表方へ金千兩位無之候テ不叶儀有之候

得共無之、イツレ市中へ御借入不被成候テハ不叶トノ
取沙汰モ有之候得共、其後ハ何様共不承候、夫程ノ事
ニ付、此節札出来方ニ付テモ、猶更金・銀・銭払底可
被成候半、已後ヲ見ルヘシ〔采〕〔果シテ記スルカ如シ〕

九月十六日記ス

二八五 西郷吉之助ヨリ大久保一藏へ書翰

〔攝海へ夷舶渡来〕

両度之御問合之趣致承知候、愈昨日夷船来着、早ク情

実ヲ得可申合ニテ、百方手ヲ尽候処、未細事相分リ不

申、今朝小蝶丸乗頭へ相達、異船へ為乗込、動静為相

同候様相達候処、只今別紙之通申出候、来着之時分ヨ

リ坂本並中路兩人ハ、兵庫へ相廻シ置候得共、未一左

右モ無之、表通黒田彦左衛門探索方トシテ、兵庫へ御

留守居方ヨリ差出候、吉井幸輔ニハ越前邸へ参候得共、

委敷不相分、木脇權兵衛ハ幕吏へ聞繕方為致候処、今

日天保山沖へ碇泊之船一艘有之候故、右船へ両町奉行

並御目附乗込候趣ニ候間、来着之趣意相尋候処、日本

語ヲ以、御方ナトへ難相咄、頭役ナラテハ談判難出来、

乍氣之毒ト挨拶致候故、閣老小笠原〔整〕為差越由候得共、

未夕何事モ相分不申、明朝ニ相越候由候得共、其趣未
夕模様相知不申、今通之向ニテハ、幕奸ヨリ相進メトモ

不被窺候得共、油断ハ不相成候、夷船ハ都合九艘ニテ、
英船五艘・佛船三艘・蘭船一艘ニテ候、其内佛船一艘

ハ天保山沖へ懸居候、外八艘ハ兵庫へ相廻居候、皆蒸
氣船ニテ御座候由、只今迄之形勢相分候而已申上候、

明日ニ相成候ハ、何分相分リ可申、速ニ申上候様可仕
候、今日参内之儀御延引ニ及候儀承及候、如何之訳ニ

テ相延候哉、不審之事ニ御座候、何レ幕手ヲ相離レ、
朝廷約定之御願申上候ハ、何レ各国之諸侯被召呼、天

下之公論ヲ以テ、至当之御処置不相成候テハ不相濟、
只幕府ヨリ申出候計ニテ、兵庫開港

勅許共相成候様之事ニ陥リ候テハ、
皇国之御辱此上モ無之、事ニ寄り堂上方之例ノ恐怖心

ニテ、義理モ分別モ有之間敷欵、不堪歎息儀ニ御座候、
此段早々形行迄申上候、以上、

〔慶応元年〕

九月十七日夜

西郷吉之助

大久保一蔵様

二八六 〔伊地知壯之丞ヨリ大久保利通へ書翰〕

高札相届隨〔松所傳〕ニ拜見仕候、時氣無御痛、益御多祥珍重奉

存候、随〔采場傳〕て傳内・長藏并ニ小子儀、一昨十六日午後大

和より罷帰、無異罷在申候間、乍憚御放念可被下候、除

服出仕之周旋、内々原取計候段被仰聞、原之奸曲、橋之

心術可惡之至ニ御座候、此一条ニ就て之、内府公〔近衛忠房〕山

階〔親王〕御尽力奉感佩次第、実以人は不可捨者ニ御座候、来

論之趣一々御尤ニ御座候、如命此機ヲ打過候ハ、又

々如何成都合ニ立到も難計、何分早速御上京被為、在

度御儀と奉存候、幸新古銀主方共、御頼談通御請申出

候、少し上納金之月割相延候間、押返シ申入、引縮迄

ニ御座候、依之小子も、来ル廿四日方ニは乗船相調可申

奉存候、当分船も乗頭も兵庫故、早々廻坂相成候様申

越ニ相成居候、十九日・廿日ニ守衛方被差立候ハ、

荷積船仕舞等も有之、自分廿四日方ニ可相成、尤長崎

も一日滞船いたし候ハ、宜敷御座候、於其 御元御

吟味有之、日割ニ守衛方御差立被下度、乍不及罷帰リ

候上は 御上京ヲ奉願、奉促候様可仕、小倉も残徒所

々割拠、于今小戦争は御座候由、是一小倉之聊恥ヲ知ル者群集、長人数江押寄候向ニ御座候、御答迄早々如此御座候、勿々百拜、

九月十八日

伊地知壯之丞

大久保一蔵様

追て大和交易も山と計ハ難見受、現ニ致目撃申候処、南都高田・長尾諸所大家主人出迎、如何様共致御世話可申と申居、彼等より出金でもいたし候程ノ事ニて、殊ニ南北相開ケ、東西屹立、地形も宜敷、他日緩急之日は、兵ヲ屯営いたし候場ニも可罷成、左候ハ、南都辺之大家ヲ詰置候ハ、糧食之憂も無之、商法之利潤ハ扱置、後日之為ニ可相成欵と、長蔵と致談合候、大和出迎之者六人有之、此人数ハ傳内も山と計ハ不申候、致延歴候地綿ハ無類之不作ニ候得共、米ハ稍中年ニ御座候、近日当地も米相場日々引下ケ、追々トハ五百匁位ニ可相成と申候人氣ニ御座候、早々以上、

(大久保利謙氏所蔵本にて校訂)

二八七 大久保一蔵ヨリ西郷吉之助へ書翰

(各藩御召其他重要)

御而殿様益御機嫌克被為遊御座、恐悅御同慶奉存候、扱爰元形勢岩下家より委曲御承達之筈、其后格別相変候義も無御座候得共、何分先月十六日、橋府参

内ニて、公論ヲ以、開兵等之義言上之趣意、今日二いたり候てハ、益表裏之事共有之候、第一ニハ去ル十日比より、原市之進より除服出仕、且前將軍同様之御取扱之義、

御沙汰相成度、 殿下へハ勿論、処々奔走等いたし候

事件も有之、実ニ可惡之次第御座候、

一 〔公平慶永、前福井藩主〕

大蔵大輔様ニハ、頃日愈以御不平ニて候由、勿論何も

御相談と申様なる事ハ、鳥渡も無之、去ル十四日ニ御招之故、橋亭江御出、内実ハ御書取を以、幕府ヲ以本体を御改、其事跡ヲ顕シ、諸藩来会を御待受相成度と之大意ニて、御差出被成候得共、尤と返詞有之位之由、近来除服出仕等之事、内々周旋いたし候次第も有之、愈御憤懣之御様子、青山内話ニて候、一向中将公

御上京のミを御待之由〔朱〕(続再夢紀事参照)

一 〔二条春敏〕尹宮、朝彦親王

殿・尹御辞職、其后

御沙汰なしニて、御引入ニ御座候、山階宮等より、頻

ニ当職

〔光親王〕

御參之事御進相成候処、尹宮と共に 御出職ならハ、御請可被成候得共、 尹宮を置キ、御一人御請相成候得は、何共於義も難被為濟、是迄同腹同論にて、御尽力被為 在候事にて、 尹宮江罪有て 殿下ニ罪なしと申訳無之候間、一時ハ宮も 御參之上、改て御引入之処ハ、如何様共可然と之御論にて、 山階宮 内府近衛忠房公御談合にて、諸藩来会、関白出職迄ハ国事無大小御止と申処歟、亦 殿・尹共一時御參にて改て、 尹宮ハ御引入相成、可然之御論にて御相談も拝承いたし候付、既ニ原等前条之周旋も有之事候得は、 殿・尹御出職被為在候得は、必御迫り申上、亦此上ニ如何様之御失体被為在候も難凶、左候へハ諸藩も弥動キ不申、尤一時と申ても、 尹宮 御參被為在候てハ、天下人心ニ大關係仕、旁利害判然たる事故、諸藩来会迄何事も不被聞食と申処ニ、御治定相居候得は、万全之御良策ニ御座候段申上置、終ニ御別紙之通、御連署にて 御建白被為在、尚御參之上御直奏相成候処、殊之外克御都合にて、言上之通被為

聞食と之御事候由、尚除服出仕等之事も、御決議不相成筋御治定にて、議伝へも

内府公 山階宮より、幕府より如何様御迫り申上候共、取次不致様此通

叡慮も御居り被為在候得は、別て難有義、屹度御動揺無之処專要之旨、再三御きめ置相成候由、然処同十八日別紙之通、而役より回達之御書面相廻、 内府公 山階宮御存知不被為在事故、直様而役御召呼、御尋問被為在候処、 殿下より而役御召呼、

小御止にてハ、廢朝同様にて、仮令ハ諸藩四ヶ月交代、或ハ諸藩家老

天氣何等之事難被差置訳候間、小事ハ被聞食候様無之候ては相済ましく、しかし小事も大事ニ

關係いたし候事柄も有之候得は、左様之事件ハ、来会之上御決議可相成と之趣にて、

御沙汰相成可然と之御趣意故、御尤之御儀と相心得、則奏聞ニ及候処、成程尤之義と被聞食候次第にて、早速

内府公なと江不申上事ハ、如何ニも恐入候得共、前条通之形行にて取扱候次第と、御返詞申上候由、原なと

矢張二條家江ハ、參 殿周旋いたし候筋ニ相見得、油断相成不申候得共、前条通御治定ニ付ては、大事之事件ハ決て動キ申間舗と奉存候、原など内策を以、將軍御推任之事を諸藩を説込、諸藩より尽力為致候賦と相見得申候、既二十藩計會議いたし、段々議論も有之、川越藩之者推任之説ヲ主張いたしたる由候得共、因門脇及説破、其策も被行兼候姿ニ御座候、畢竟原より根拠いたしたる訳と被察申候、委曲ハ武二江申合置候、(粘紙あり)一良公子上京、如何様之事件申立候や、橋府江も一兩度御出相成候由、趣意柄尤分兼申候、御召ニ就て之上京に無之、直様出立相成、重て上京と申事之由、柳川十時攝津咄ニハ、自国之一件も有之、且形勢一覽旁之趣意にて、上京相成候由承申候、將軍職之義、頻ニ引進め相成候と申説も有之、(近衛家)陽明家江參 殿之節も、一橋之処旁案居候処、只今にてはよほと御振はまりも出来、大慶之次第と藤井江咄有之由、此節御帰国懸宇和島御国など江御出相成御合ニ候間、序も有之候ハ、申越異候様、御伝言も承申候、定て扶幕之説にハ相違有御座(朱)間舗被察申候、十時より長岡監物之人体承候得は、よほと器量も有之筋ニ被聞、全一人之力ヲ以国論も一定

いたし候由、別て 御国江依頼之由ニ御座候間、此節上京にハ、監物随從にて上京相成候ハ、至極宜鋪候半と奉存候間、御賢考可被下候、(貼紙)本文良公子帰国懸、宇和島并ニ御国元江御立寄之事、序も有之候ハ、御国元江申越異候様御伝言、藤井より承居候処、其后承候へハ、取止相成たる由一説も承申候、右通御伝言迄有之たる事候得ハ、御取止相成候ハ、其段引合も可有之事と心得候へ共、何たる義も無御座候、追て承候まゝ此段申上候、(朱)一岩下家御着にも相成、最早御進退も御決定之筈奉察候、(上京ヲ云)前条之次第相成居、殊ニ来会迄国事も不被為議、諸藩を御待受と申御治定相成候得は、早々国元江も蒸艦を以、申越候趣をも申上置候、日数を経候得は、弥相変候事無疑、尤橋着服も来月十日迄ニ可有之、自ら參内いたし候得は、殿・尹之出仕尽力いたし候にハ、相違無御座候、殿・尹之出仕相連候得は、將軍推任ハ愈被相行、左候得は、何も水泡と相成候事ニ御座候、御上京御決定被為在候ハ、一日ニても速ニ御上京之処、万々奉伏冀候、就右不容易事候得共、此節

御召之御書面ニては、決議之趣中納言より言上いたし候様と之御事ニ候得は、甚諸藩氣受ニも相拘候事ハ差知、尤御召之詮も無之事と奉存候、於国元も

御召之御趣意柄ニ基キ、尽力之賦ニては、決て上京は仕間錦、しかし何分危急切迫之今日ニ相当り、不堪傍觀上京仕候訳ニ可相成、就ては依時宜ては御振はまりを以、御奏聞被成下候義可被為調や之趣、

内府公 山階宮江極内々御伺申上候処、其節ニ相成候ては、如何様共無御愛心御周旋可被成と之趣拝承仕候、為御心得此段も申上候、

右概略之形行申上候、尚委曲は武(海江田信義)二より御聞取可被下候、以上、

九月廿三日

大久保一藏

西郷吉之助様

(島津忠承氏所蔵本にて校訂)

二八八 〔伊地知壯之丞ヨリ大久保利通へ書翰〕

慶応二年九月廿四日

尊牘被下忝拜見仕候、増御清福御話恐賀不斜奉存候、随て小子儀も昨夜五時分乗船仕候、上 京滯坂中色々

御丁寧被仰聞奉多謝候、楮被仰聞趣一々佩承、御同意奉存候、帰着之上ハ

御前江奉申上、神速

御上京之処可奉願上候、実以此機ヲ失候得は、再ひ挽回之期も無覚束、

本朝興亡之機傍觀不可致時節と奉存候、長崎御注文品ハ最速差送候様可致都合候、乍筆末岩下家御通坂之折ハ、金子内々被成下、以御蔭首尾能乗船相調申候、定めて御都合被成下候儀と御礼申上候、乗船前ニ御礼状、且御金談一条も可申上含ニ罷在候処、朝より来客引続、酒筵と相成、其儀不相調背本懐候、既ニ出船前船中在合之禿筆ヲ以、匆卒御請御答申上候、恐々謹言、

九月廿四日

伊地知壯之丞

夜七時

大久保一藏様

人々御中

追(赤)て(正色)い(赤)ち(正色)、氏より一札致到来候得共、多忙ニ取紛貴酬不相調候間、宜敷御伝へ置可被下、自分御国元より返酬可致候、内田氏江も可然奉願上候、以上、

(大久保利謙氏所蔵本にて校訂)

二八九 道島家記鈔

二八九ノ一
慶應二年九月廿八日記ス

諸侯方ノ建白ヲ当理ス(當時藩内ノ人情)

(幕須彌姿松)
阿州侯其外諸侯方ノ建白ヲ視ルニ、成程文面ハ面白、

一通リハ道理尤ニ見ユレトモ、内心ハ長州同盟ノ姿顯

然ト相見得、長州何事ノ道理カアリテ、二国ニ割拠シ、

幕府ニ楯ヲ突、日本国ヲ動揺為致候ヤ、幕府將軍ノ職

ヲ失シ、上

天朝ヲ蔑如シ、下万民ヲ苦シメ、暴威ヲ振フノ惡失ナラ(實)

ハ、諸侯諸共ニ鼓躁シテ、天下国家ノ為人失ヲ撰ヒ、

人臣ノ任ヲ尽スヘキ事、是故人ノ所謂社稷ヲ重スルノ

道理ニ当ルヘシ、今其將軍ノ過チハ糾スシテ、己カ志

ノ伸サルヲ怨ミ、奸邪ヲ誅戮スルヲ名トシ、于戈ヲ動

スハ、暴虎馮河ノ譏リヲ本マ不願者トイフヘシ、各藩夫

ニ党シテ幕府ノ夷狄ニ親ミ、開港スルヲ惡ンテ、幕府

ヲシテ奸邪ノ徒トスルハ、敢テ至当ノ論トモイフヘカ

ラス、日本國中ノ諸侯、一人トシテ勤王ノ志ナク、致

身テ国恩ニ報スルノ志シナク、浮浪士ニ欺惑セラレ、

阿侯ヲ初メ長尾ニ屬テ、幕役ヲ難シ至誠ヲ不尽、大ニ

天下ノ惑ヒヲ生スルモノナリ、願クハ諸侯諸共ニ長州

暫時ノ難ヲ談シ、義理ノ大道ヲ糾正シ、其惑ヘルヲ解

テ其罪何レニカ帰セン、其時ニ臨ンテ大義ノ大義ヲ樹

テ、日本國中ヲシテ万世不易ノ治ニ至ラシメ、上

天朝ヲ敬畏シ、下万民ヲ安カラシムルノ至理ヲ尽シタキ

コトナリ、

子九月十八日記廿カ

二八九ノ二

惑問

或人予カ当理ノ論ヲ視テ、笑テ曰ク、汝諸侯ノ建白ヲ

刺議ス、今幕府夷狄ニ欺惑セラレ、攘夷ノ命アリト

イヘトモ、將軍ノ職ヲ失シ、

勅命ヲ用ル事不能、故ニ止事ヲ得玉ハス、諸侯ニ命セ

ラレテ、大義ヲ起セト玉フ、長府本マ

欽命ノ重キヲ感シ、英夷ヲ討ツトイヘトモ、一国ノ力

足ラス、幕府ハ勿論、諸侯ヘ援兵ヲ乞ヘトモ、皆不聞

カ如ク、不見カ如ク、一人トシテ義旗ヲ荷フテ、長府

ヲ救フモノナシ、故ニ長州一国憤激シテ、割居スルニ鶴

アラスヤ、左候ヘバ長州何ソ無道トイハン、一旦京師

ニ於テ幕威ヲ振フトイヘトモ、其機會長州ヲ拒ンテ、

一人モ京師ニ不被入、朝敵同前ノ罪ヲ蒙リ、諸侯故
ナク長府ヲ悪シテ、交リヲ絶ニヨリ、無余儀此時宜ニ
及ヘリ、何ソ長州ヨリ事ヲ好ムニアラス、左候得バ長
州勤 王ノ志シ深ク、

欽命ノ重ヲ荷イ、大義ヲ尽ストイフヘシ、然ハ強チ將
軍長州ヲ征討スル恨ノ道理アルヘカラス、却テ幕府無
道ノ軍ヲ起ストイフヘシ、夫故諸侯一人將軍ノ命ヲ受
ケテ、長府ヲ討ツノ志シナク、汝是等ノ義ヲ何トカ弁
セン、予曰汝カイフ通りナラハ、長府ヲ君トシテ幕府
ヲ悪シトスルカ、答テ曰、当世然ニオイテハ、幕・長
共ニ悪シ、然レトモ長州モ

勅命ニ応シ、一旦攘夷ノ道ヲ守レリ、シカレハ幕府何
ソ征討スルノ理アラン、夫故諸侯兵ヲ出ス事ヲ不肯、
阿州其外建白スルモ、又尤ニアラズヤ、予曰、夫モ一
理アルニ似タレトモ全ク不然、如何トナレハ、上王候
ヨリ下庶人ニ至ル迄、コノ大義トイフモノニクラシ、
就中此中建白ノ文面其至理不尽、文ヲ飾リ躬ノ行ヒナ
ク、今長府ノ事ノ起リヲ能ク糾シテ視ルヘシ、其本ハ
攘夷拒絶ノ道ヨリ事起ルトイヘトモ、外夷ノ勢イ強大
ナルニ僻易イタシ、去々戊戌年攘夷拒絶ニ義旗ヲ翻シ、

幕府ヲ奸邪ノ徒ト移シ、西夷ニ詔謀スルニアラスヤ、夫
故諸侯ノ建白一ツトシテ義ニ不当トイフハ無事ナリ、
汝能々大義ノ大義タルノ大道ハ、イカ成モノトイフ事
ヲ弁ヘ視ルヘシ、

二八九ノ三

丙寅九月二十日、西郷吉兵衛大番頭ニテ
御側役勤 大目付ニテ、勤

方は迄ノ通被仰付、御両殿様へ御礼ニ罷出候迄ニテ、
祝ヒモ不致直ニ引込候由、叔父ノ椎原與右衛門杯大込
リニテ、外ヨリモ段々教訓イタシ候得共、我等何ノ功
モ無之者ニ、ケ様ニ御取持モ可有之、何トモ恐入御受
ハ致シ候得共、可相勤儀ニテモ無之、イツレ隠居ニテ
モイタシ候半トノ由ニテ、病氣ニテ引込入候由、内夷
ハ西ノ谷ノヤシキヘ差越、谷山山田辺ニテ兎狩杯イタ
シ居候由、

但表立テハ夷ニ潔白ニテ、人々ケ様ノ儀出来兼候ト
申程有之、成程尤ノ様ニ聞候得共、全ク忠トモイ
フヘキカ、義トモイフヘキカ、何トモ解シ難キ事
ニテ、窃ニ案スレハ、忠トモ義トモイフヘカラス、
君ノ明ヲ背キ忠トイフヘカラス、長州ノ戦ニ緩々
出ラレ、義トイフヘカラス、尚後事ヲ觀ルヘシ

一ワタ 相場ナシ

一大根一本 百文内外

又ノ相場

一米一貫五百文

一白米一升一貫文

一金百三十四匁ヨリ五匁迄

一錢十五匁八九分

一炭四十匁内外

一并同八百文

一綿高直相場不相立

右ノ外押テシルベシ、

右吹田善藏方へ申来候ヲ請取、寅十月三日写之、

二八九ノ六

異国米下町人

(マ、マ)

トイフ所ヨリ売出相成、一升一

貫百文、随分宜候得トモ、此方野米又ハ蒸米同様

ニテ暇カ、リ、粥ニハ不相成、甚タ臭ク候テ、上品ノ

人ノ食ニハ不相成候由、手伝杯沢山召仕候モノハ、此

米ニテハ不統ト申モノ沢山有之由、左候へハ能キ米ニ

テ無之候(米)「(外国米輸入ノ初トス)」

二八九ノ七

寅九月朔日比、筑後表ヨリ山口金之進外一人罷帰候、

此度之嘶ニ、

八月廿日比ニモ候也、藝州口ニテ六日之接戦有之、在

手・井伊・榊原等ノ勢ニテ、五日迄(五日市九)ハ六日ノ夜、長人間道

ノ嶮地ヲ乗越、井伊・榊原カ山手ノ方へ陣取候也、其

夜雨風ニテ油断イタシ候ヤ、大砲ヲ打込大敗ニ相成、

死人等モ過分ニ為有之候(由脱カ)、夫限りニテ双方戦モ相止候

ヤニ説有之候、

但我々共カ愚考ニ、最初ヨリ打候榊原等カ勢、始終

相戦ヒ候様相聞候付、度々敗北相見得候得トモ、

是迄幾度モ井伊・榊原ニテ相濟候得ハ、格別人モ

有之間敷、多人數打死等モイタシ候得ハ、マタ繰

替之儀モ可有之候得共、ケ様之訳合モ無之候ニ付、

格別之苦戦ニテモ有之マシク候、評判イタシ候事

也、

二八九ノ八

寅八月末方細川侯并筑後久留米・柳川、豊前ノ岡等ヨ

リ使者差越居候由申候得共、子細一向不相分、定テ長

州一件之事ナラント申事ニ候得共、不相洩候、

九月五日記ス

二八九ノ九

昨晚山川湊へ小蝶丸着帆ニテ、一橋ノ用人差渡候由、去ル三日ニ着イタシ候蒸気船ヨリ、一左右相知居ヨシ〔巻〕「梅澤孫太郎」

二八九ノ一〇

將軍薨去ニ付、將軍職ノ事三段ニ説相分レ候由、議奏等ハ將軍一橋ナルヘシ、徳川ノ方ハ紀州、此御方杯ハ尾張侯トノ建白ニテ候半、専ラ其風説ナル事、

但当分一橋トハグハイ不宜候ヨシニ付、一入尾張ノ方ニ建白被致候半〔巻〕「世説ト相反ス」

二八九ノ一一

長州表解兵相成候由、諸侯上京相成候上、長州御召ニ相成、上京之上猶御所置振可有之賦之由、尤一橋最初ハ是非長州ヲ攻禿サルヘキノ考ニテ候処、小倉表等落城ニ相成、長州ノ勢ヒ強キヲ聞カレ、一橋恐懼イタサレ、直ニ解兵ノ御願ヒニ相成候由、是ハ京都ニテ専ラ申事ニテ、慥成事之由、是ヨリ一橋ノ勇情相顕レ勢ヒ又ケ候半、

但予是ヲ聞、長州上京可致ヤ、縦令国兵ハ廻ルトモ、浪士過分屯集イタシ居候ニ付、直様上京、原之儀

ハ埒明間敷、何卒一橋之人トナリモ、此一事ニテ天下ノ武將トナル器ハ、露程モ無之候、家康ノ若手ノ時ノ氣象ヲ視ルヘシ、義ニヨリテ死ヲ輕ニスル事、毫毛ノ如シ、能ク此処ヲ嘶聞スヘシ、

二九〇 農政改良意見建白書扣

去ル申西頃ヨリ天下紊擾、物議喧々、人心懷疑、米価諸色日ニ月ニ高直成立、加之長防之攘夷・京師之暴挙、或前之濱戦争等ヨリシテ、益人情紛紜、物価弥増騰貴、昨今年ニ至テハ、前代未聞之高直、貴賤共甚困苦ニ迫リ、就中御国ハ元来米穀或綿・絹等、日用闕ヘカラサル品々出産乏敷、殊ニ米穀ハ別テ不足之由ニテ、年々隣国ヨリ輸入イタシ、不足ヲ補ヒ候次第故、夏分ニ至リ末々之輩、漸露命ヲ繋キ候位之事ニテ、実ニケ様之世態今形難相濟ハ、此事ニ御座候半、尤時勢ハ日々壞乱ニ趣キ、防長之割拠ヲ初トシテ、諸侯伯モ稍分裂、其封境ヲ閉守スル之勢成立、此上如何ナル變動、今日隣邦ニ可差起難量趣ニモ相聞得候付、御上ニモ御憂慮百方御手ヲ被為懸、種々富国済民之御趣法被為建候

段、伝聞仕事ニ御座候、然テ恐多クモ聊愚考仕候ニ、
当今片時モ御忽ニ難被成置ハ、專一足食之法ニ可有之、
今通年々他邦ヨリ輸入シテ、救急不足ヲ被補候様ニテ
ハ、万一隣邦不虞之變乱差起候時ハ、恐ナカラ如何ン
トモ可為様無之時機ニ可立至モ難計、然其職掌ニモア
ラス、勿論廟議ニモ不預身トシテ、妄ニ其事ヲ議シ僭
踰之言ハ、素ヨリ忌諱ニ触候儀トハ飽迄相考候得共、
四五年前ヨリ、度々真幸表或小林方限之諸郷廻歴イタ
シ、漠々タル広野或山谷ヲ跋涉シ、種々勘考ニ涉リ、
如何ニモシテ人烟ヲ増シ、古田畑等之耕耘行届、或開
拓之困益ニ相成候様致度存、土性之善悪、水利之弁不
弁、戸口之多少、且ハ人情風習等ヲモ探索イタシ、去秋
亦ハ当春モ彼表ヘ差越、当秋モ真幸表第一、吉松之内
澤原江移人之御所置振ヲモ親敷觀察致度、彼地ヘ滞在
モイタシ、人氣旁開拓撫育之次第共見分イタシ、夫ヨ
リ小林表野尻(宮崎県西諸郡)・高原(同北諸郡)・高崎辺之山野モ経廻シ、田地ニ
可開所之地形・水利等廻見致候処、彼辺ハ元来人少ニ
テ、右田畠之耕耘モ別テ不行届、況哉困窮之衆中、百姓
等、開墾手ニ及候丈ケニ無之、適々良地モ無用ニ捨テ
居、牧場同然ニテ残多キ次第、当分之世振夫形ニ可被

捨置ニハ有之マシク、右郷々之内ニモ、大・中・小田
地ニ可開場所ハ余多有之、私廻見致候分ニテモ、彼是
三四千石程モ可開軟ト相考申候、然此此一兩年之間
米価騰貴セルニ、頑愚之野民共ニモ耕耘ニ利ヲ知り、
土地之尊キヲ唱追々開墾、或畑地ヲ田地ニ為シ候類モ
不少、此後ハ水利宜敷、入費無之場所ハ、自力ニ開拓
モ可相励人氣ニ趣候得トモ、株立・水利等六ヶ敷、入
用多キ場所ハ、衆中・百姓等自力ニ及丈ニ無之、右郷
々之内ニモ拾石・貳拾石以上、或四五拾石程モ可開所
ハ幾千モ有之、或大溝筋半里、亦ハ壹貳里程モ御上ヨ
リ御取建被下候ハ、枝溝又ハ開拓ハ、作人共自力ニ相
叶可申ト見受候処モ四五ヶ所ハ有之、即チ飯野之内本
陣原、小林之内南西方村或二王ヶ原、高崎之内露ヶ原(宮崎県西諸郡)
等之所々、此三四ヶ所ハ大溝筋文御物ヨリ御取建被下
候ハ、開拓ハ誰人ニテモ自力ニ相叶ヒ可申、乍然人少
之郷々ニ御座候間、新拓ハ届兼可申候、別ニ一法ヲ被
開、速ニ開闢相整候様有之度、其法ハ不熟之愚者ニ候
得共、寄合・小番・新番・御小姓組等、普ク望之人々
ヘ抱地又ハ永作地ニ被下置、開拓或作人仕付方等ハ自
力ニ致、ケ様有之候者各見込ヲ以尽力イタシ、不年ニシ

テ御国潤之端相見可申哉、右三四ヶ所ニテ大凡七八千石程ハ必定、田地相開可申、水利モ御物之御計ニテ候ヘハ、格別難渋之場所ニモ有之間敷、右外郷々ニモ大溝或溜池等、御物ニテ御出来被下ニヲイテハ、大山野地ハ素ヨリ、畠地ヲ田地ニ為シ候処余多有之候、乍然甚難渋ナルハ、開拓地之多キ地ハ必人少ニ御座候間、開闢ト並ンテ手ヲ可被付事ハ、移人ニ御座候、彼過ハ古田畑之格護サヘ届兼候ニ付、新地ヘ開方ハ、第一移人之趣法先立不申候テハ、不相濟候付、聊愚考之形行、亦ハ地利・人情觀察之次第御断之覚ニ筆記イタシ入御覽申候、

一無用之大地ヲ開拓シ、田畠ト為ニ、前書之通最モ容易キ場所ハ、飯野之内本陣原又本嶺原トモテ流凡拾七八町余、横凡五六町程之平坦ニテ、当分全ク無用之荒野、牧場同然ニ御座候、此所ヲ田地ニ為スニハ、同郷狗留孫山中ヨリ流出候大河平支配地内、石床ト申大河筋之古田用水井手ヨリ水ヲ掛込候手段、相調候場所ニ御座候、此用水溝ハ能クハ取覚不申候得共、正徳之比取建相成候哉ニ御座候、此溝筋ヲ今三四尺程モ相弘メ、溝末ハ当分一里半程モ流居候付、本陣原迄掘続キ、中途大鼓橋一ヶ

所ヲ架シ、谷合ヲ越シ、溝ニ仕建此橋凡長十四五間位候得ハ、本陣原之方ヘハ地形モ低ク、水ハ容易ニ掛リ来リ可申、尤格別難渋之場所ニモ無之候、其通ニ致候得ハ、本陣原ハ一円ニ田地ト相成、凡千四百石程ハ相開可申候、古田用水溝ハ水勢ヲ増候事ノミノ事ニテ、何モ差支之廉ハ有之間敷、併当分麓辺之用水ハ、小林之内南西方村之芹江ト申出水ヲ、飯野之方ニ曳取候付、右石床井手ヨリノ溝筋ヲ、飯野新古田之用水ニ相用ヒ、芹江水ハ小林之方ヘ引取り候ハ、式千石程之田地、南西方村之内大山野地ニ相開ケ可申、当分ハ小林之内江其水ヲ全ク取候ハス、飯野之用水ニイタシ候故、小林之士人共ニハ無致方、田地之開拓モ不相叶、無用之広野或少々畠開迄ニテ、甚残多カリ居申候、右通本陣原之用水溝ハ、御取弘或掘続ニ相成候得ハ、双方ナカラ無用之地、田地ニ相開ケ可申、此両所ハ御物計ニテ、溝筋丈ケハ御取建被下度趣、小林役々共内話モ致居候処、当春、海老原宗之丞彼地廻勤之節、於小林面会及其談候処、同人ヨリモ疾クニ承及居候由ニテ、現事内見可致呉趣頼談有之、亦其意尙ニ見置候儀モ有之候、別テ良所ト相見得候ヘ共、飯野ニテハ右通ニ、芹江水ヲ小林

之方ノミニ曳取ラレ候テハ、御前米田地之作式差支候
トテ、相沮候事情モ有之、右ハ石床井手ヨリ掛込候用水
ハ、川内川之水源ニテ、至テ沢山之清水ト相見得候へ
共、田地ニハ水性惡敷坏ト、飯野役ニ申張り居候由御
座候間、如斯之陋説ハ断然相破リ、若モ其通御前米作
式差支候ハ、過分御入用之事ニモ無之候間、真幸表其
他何方ニテモ、土性・水性相撰ミ、作式為致候儀ハ、
如何様ニモ可有之候、ケ様ニ得手勝手之固陋説ハ、急
度相糾度事ニ御座候、右両所之溝筋、御物ヨリ御取建
相成候ハ、本陣原亦ハ南西方村之荒野ハ、却テ誰人ニ
テモ望ニ被任、御城下ヨリハ、寄合以下小番・新番・
御小姓組迄抱地ニ被下置度、尤人少之場所ニ御座候間、
抱地主之見込ヲ以移人イタシ、開拓ハ勿論、其主人土
着モ好ニマカセ被相許候ハ、幾何之田疇不年ニシテ相
開、御国益之一端ニ可相成哉、亦本陣原ヨリ川越霧島
山下、或田原陣跡之近辺ヨリ西之方ニモ、ミノ木原或田
代原ト申所ハ、享保之比新田開ニ相成候処、当分荒地
ニ相成居、溝等ハ于今依然ト相殘居候、此所モ凡七八
百石程モ相開ケ可申哉、水利モ宜候間、前書同様ニ、
御手相付度場所ニ御座候、

(給良部)えびの世

一 吉松・馬關田之両郷ニ跨リ候場所ニテモ御座候半、上
澤原ト申移入場、澤原ヨリ東南之方ニ引続之地、流八
九町余、横幅六七町余ト相見得候山野地、此所ハ元來
湿地ニテ、霖雨之時分ハ水氣多ク、今形ニテハ無致方
様相見得候トモ、馬關田之方ニ低ク相見得候間、縦・
横式三ヶ所程モ水拔溝ヲ堀リ、水氣ヲ引キ候ハ、畠地
ニモ相成可申ト、士人共ニ申居候、尤飯森岳ヨリ水ヲ
引キ候欵、或山下ニ溜池出来候ハ、凡八九百石程之
田地相開可申哉、

一 小林真方村仁ハラカ原ト申所ハ、当分畠地相開ケ居、
其畑中ニ、当春比ヨリ織物方計ヲ以、桑植付ニ相成候、
此所ハ水利モ宜敷、溝筋サヘ御物御取建相成候ハ、
凡千石程ハ可開ト、士人共ニモ殘多ガリ居候、殊ニ良
畠地ニテ、ケ様之地ニ桑植付候ハ、憚ナカラ上策トハ
存セラレス、桑ハ如何様之処ニテモ、畑之端々隅々等
ニ拾本・式三拾本位ツ、モ植付、可然モノニ候、当分
之仕掛ハ、甚不勤之事ニ御座候、別ニ引直之其跡ハ、
都テ田地ニ相開キ度場所ニ御座候、尤右様桑木畑中へ
植付ニ付、作人共甚苦情申立、刺愚民共桑ヲ伐捨、或
ハ生長セサルヤウニ取扱候趣ニモ相聞ヘ申候間、早々

御引直ニ相成度事ニ御座候、

一高崎・高原之両郷ニ跨リ候霞ヶ原モ田地開闢、相応之良地ニ御座候、此所ハ高原神徳院之上、霧島勢多尾山中ヨリ用水ヲ曳キ候場所ニテ、高崎新田之溝筋ヲ、今四五尺程モ相弘メ、霞ヶ原ヘ掛入候得ハ、過分之田地相開ケ可申、其残水ハ、高崎之内後河内ト申辺ヘ掛行キ可申、此溝筋ハ弘化之初頃御取建相成、至当分追々田開相成申候、霞ヶ原其外ニテ大凡三千石程ハ必定相開ケ可申哉、

一右諸所之外ニモ、三四石亦ハ拾石・貳拾石蒔、或ハ五六拾石蒔以上、壹貳百石蒔程之開場ハ、真幸五ヶ郷又ハ小林・野尻・須木・高原・高崎辺ニハ余多可有之、又鹿倉内等ニハ猶更多有之候、右四五ヶ所之地、其他之所モ夫々望之人々ヘ抱地・永作場等ニ被相許、溝筋又ハ溜池等自力ニ不叶、難渋之所四五拾石以上モ可開場所ニハ、御上ヨリ御取建被下、開闢移人等ハ自力ニ為致、溝・池等取建等之入費ハ、往々拾年孰其上ニ相成、年賦返上等、如何様ニモ御趣法ハ可有之哉、前文之件々、大概八九千石以上、壹万石程ハ決テ相開ケ可申哉、如斯簡易之法ヲ以、開拓之道被相許候ハ、当今五穀其他

高価之折カラ、人々争フテ開拓ニ心ヲ用ヒ、不年ニシテ相応之御国潤可相成ハ無疑、当時之機会、実以失ベカラサル時欤ト相考申候、一日モ不被差置御手相付度事ニ御座候、

一右郷々之外、〔始良郡〕園分屯、〔始良郡〕同上、〔曾於郡〕鹿屋市、〔肝屬郡〕隔・首於郡・溝邊・横川亦ハ百引、高隈、〔肝屬郡〕鹿屋、〔鹿屋市〕大始良、〔肝屬郡〕同上、〔同上〕大・小根占辺ニモ、相応之開場有之由ニモ承及居候得共、親數見聞不致候間、相記不申候、且前文田畠共可開場所ハ、其所々之旧習ニテ、新ニ抱地等ニ出シ候事、無故嫌疑風習御座候間、其弊ヲ一洗イタシ、普ク望之人々ヘ抱地・永作等ニ被相許候ハ、御領國中彼是五六万石以上、七八万石程ハ必定相開可申、畑地迄モ相開ケ候様相成候ハ、拾万石位ハ可有之哉、タトヒ急々御物之御益ハ無之候トモ、御国潤ハ莫大之事ニテ、御実益欤ト相考申候、当今之世態五穀程尊キモノハ無御座候間、早々断然之御処置被開度、爰ニテ一年之後ハ、先ニハ四五年之後ニ相成可申候間、一粒ニテモ出来重、他邦之輸入ヲ減候様相成度、万一モ拾万石以上モ出来増候ハ、輸入ハ後々全ク相止ミ、輸出スル様ニ相成候ハ、御国基充実ト申モノニ可有之哉、一小家之世帯ヲ以論シ候ニ、食料足リ

候家ハ、日用之仕ヒ錢等差支候テモ、格別困苦ニハ不至、食不足之家ハ、日々如何程之入錢等有之候テモ、余計ハ尤出来候モノニハ無御座候、国家之事モ大小之差別有ル迄ニテ、相替儀ニハ有之間敷、尤農ハ国之本、忽セニスヘカラサルハ申ニ不及、和漢ハ勿論、世界一般同様ニ可有之、兎角ニ農ヲ先ンシ、国之太平立テ、然シテ後工商之業ニ涉リ、第一産之貿易旁海内勿論、今ニ至テハ遠ク海外ヘモ輸出シ、互市之術ヲモ弘ク被相開、有余・不足ヲ補ヒ候事、天地間普通之道ニテ、余論ハ有之間敷哉、御国ハ他邦ニ比較イタシ候ニ、奥羽ハ論之外ニテ、未山野之荒地多ク、耕耘モ不行届、畢竟ハ西目下瀉ハ人多ク、土地不足、東目諸郷ハ土地多ク、人民少キ訳ニハ候得共、又人力ヲ不竭之訳モ有之、ケ様切迫之世ニ赴候間、如何ニモ御趣法相付、不毛之山野相開候様、且人力ヲ竭シ、第一国ニ不織不耕之民少ク、五穀ハ勿論、輸出之産物モ相増、国力充実、不虞之憂ニモ動揺セサル御仕向不相立候テハ、不相濟儀ニテ、当今之御急務是ヨリ大ナルハ有之間敷、尤時勢ハ日ニ月ニ危殆ニ陥リ、迫モ治泰ニ挽回ハ無覚束、人情モ乱ヲ好ンテ治ヲ不好様成立、和漢古昔之時歴ヲ以

テ勘考致候ニモ、兎角一大乱ニ相成、人情乱ヲ压フノ時ニ不至ラハ、鎮勢定一ハアルマシク、然ルニ万々一隣国閉鎖之事共到来致候テモ、食サヘ国中ニ充滿イタシ候得ハ、今日之憂苦先ツハ相少キ訳ニ御座候間、厚ク廟議ヲ被為尽、勸業ハ勿論、田畠開闢方一新之良法相立度時節ト相考申候、尤御政体何事モ、享保以来安永・天明比ヨリノ御規格ニテ、極盛至治之時被相定候モノニ可有御座、即今之混乱ハ、本邦開闢以来、未曾有之壞乱ニ御座候間、時勢ニ準シ取捨折衷(マダ)一或改革シ、御施行無之候テハ、決テ相濟間敷候処、郡方之儀ハ未旧法ニ則リ候テ、時勢不相当之次第不少候ニ付、早く御一洗有之度、素ヨリ農政ハ時勢ニ適合之人情ニ基キ、令ヲ下シ、或土地之精粗、時季之寒暖、田畠之多少(マダ)、山海之弁不弁、人員之多寡、旁用捨斟酌イタシ、頑愚之農民共ヘ教諭之儀、專一ニ御座候、其外制度之建方簡易ニシテ、次ニ農時ヲ不妨、糞培之用意、農具之脩造、牛馬之養方彼是迄モ宜敷ニ誘導イタシ候様有之度、左スレハ甚以多端之事件ニ候得ハ、教諭ニ付テモ、易簡ニイタシ候事専用ニ御座候、且新地開拓之処ハ、旧来之御作法御変革有之、熟地之上御竿入等之期限ヲ寬

ニセラレ、八九年・十年程之作り取ニテ、竿入之後モ輕緩之掛リニイタシ、農人共活計行立候へハ、ヲノツカラ古田畑之耕耘モ行届キ、追々ハ開拓モ相増可申、又右通ニテハ御上之益相少キ様御座候得共、前論之通国益ヲ御目的ニテ御処置有之度候、開拓ハ前二相記候向ヲ以、望之人々へ抱地・永作場ニ被下置、可成丈ケ其主人其地ニ現住イタシ、移人之撫育(マユ)親敷指揮シ、耕耘収採之時ヲ失ハス、殊ニ移人ハ其土地人情モ不弁之訳候間、其情俗ヲ汲ミ、寛猛両様之処置イタシ候ハ、御上之計ヨリハ遙ニ行届可申哉、其訳ハ御物之計ハ、第一役場転遷交代等ニテ、処置之精粗、或死活之差別大ニ有之、初発之法連続致兼、終ニ廢弛ニ至リ候儀、往々不少候ニ付、右通普ク望之人々へ抱地・永作地等ニ被下置、移人モ各見込ヲ以、小口切りニ家之子等ニ召抱、七八家以上三四拾家程、其上ニモ御許ニ相成、撫育イタシ、家内同然寢食ヲ俱ニシ、子孫マテモ永続手ヲ付候ハ、アリ付モ可宜候、左候ハ費用モ多カラスシテ成功可相成哉、随テ茶・漆・楮等之産物モ、年ヲ追ヒ出増シ、国基モ丈夫ニ相成、外国交際モ手弘ニ可相成哉ト相考申候、

一御国之農人ハ甚頑愚ニシテ、種芸耕耘之道別テ不行届、旧來之法ニ拘泥イタシ居、人力ヲ尽シ、生育採収之良法如何程教示致候トモ、更ニ信用不致、誠ニ処置シ苦キモノ勝御座候、仮令植木ハ海辺ナクテハ全ク生長不致モノト固着イタシ、霧島山中杯ニ山樞多ク繁茂イタス事ハ、現在存ナカラモ、接木実生ニテモイタシ様之事モ承服不致、五穀之作式モ右ニ類シ候儀不少、亦耕作ト云ヘハ、米・粟・麦・豆ニ限り、其他植木高二益アルハ、心付ナカラモ手ヲ不付、是ヲ教諭示説致候ハ不容易、却テ人氣ヲ破リ可申候間、前論通普ク望之人々へ抱地ニ被下、其主人現住イタシ候欤、或親敷経験イタシ、万事実効ヲ示シ候ハ、人皆利ニ赴キ易キモノニ御座候間、不被令シテ相開ケ可申哉、即当今茶園亦ハ養蚕等、分テ御手ヲ被為付候得ハ、末々ノ習染ニテ、御物仕事ト申セハ、出精不致ノミナラス、愚民共之習ヒ、終ニハ御取揚ニテモ可相成事之様聞キ恐テノ向モ有之、彼是人氣不競争モ可有之、然テ兎角実効ヲ示シ不申候テハ、何事モ行ハレ申間敷哉、殊ニ御国ハ耕耘之道他邦ニ比候得ハ、別テ手荒ニ有之、分限ニ応シ候丈植付、手入旁ヲ叮嚀ニシテ、取箇多キヲ心付ナカラ

モ、山野ヲ手弘ニ耕シ、手入草取サヘ耽々不行届、其習弊誠ニ歎ケ敷次第ニ候、此習染ヲ一洗不致シテハ、不相濟事ニ候、右通実驗ヲ示シ候ハ、自然風靡一新之場ニモ可相成哉、將又往古ヨリノ御作法ニ、御城下ヨリ十里以外之諸無用之山野地ハ、抱地・永作等ニ御免之御法モ有之由候得共、第一所役々等へ内談相遂、無差支申出候分被相許候御規定ニテ、其次別テ六ヶ敷、所役々共ニモ全ク差障無之地ヲ抱地等ニ出シ候ハ、他邦異国之人ニ被掠奪候様ニモ相考へ、種々様々故障ヲ拵申立相拒候惡弊不少、或適水利宜敷、土性旁弁利ニシテ、田地相応之場所ヲ馬草刈敷、或カシキ取場、或東目諸郷ニオイテハ、茅立場・馬放チ場杯ト申立、大ニ相拒候、右ハ水利等不宜欵、又ハ現事古田用水ニ差支、亦ハ崩損等懸念之場所ニヲヒテハ、尤之事候得共、曾テ何之差障モナキ所ヲモ、惣テ右等之故障ヲ以、堅ク相拒候儀不少、百姓共ヨリ右様申立候得ハ、郡奉行辺之処ニテ、其実否又ハ踏込見分ニテモ、虚実相定候様之儀モ、無之哉ニ相見得候間、申立之趣ヲ押へ、ケ様之世振御国潤之一端ニモ相成事ヲ、弁解説得之道モ（官廳東西諸集郡）無之、就中真幸表・小林・須木或踊・曾於郡辺ニテハ、

二三月比ヨリ四月中旬過迄、四五拾日之間飼牛馬ヲ原野ニ放置候風習之由、夫故畠地ハ周圍堤ヲ築キ、或垣ヲ結ヒ扨イタシ、防禦之手ヲ尽シ候得共、折フシ犯入り、表作等喰荒シ候モ有之、誠ニ愚昧之致方ニ候得共、古來之仕来ニテ、俄ニ制止モ被成難ク、此習風西目下瀉辺之諸郷更ニ無之、畢竟ハ無用之原野多キ所ヨリノ風習ニ候半、適田畑ニ可開之良地モ開拓不相許、全ク水利モ不宜所ハ夫形ニテ、牛馬之飼方弁利ニ可相成筈候得共、邂逅良田ニ可相成場所ヲ、野人共得手勝手之陋説ニマカセ置候ハ、誠ニ歎ケ敷次第、ケ様之世態其俛ニ捨置候ハ、決テ不相濟事ニテ、御國中イツ方ニテモ、田畠ニ宜キ所ハ少々ナリトモ、開拓イタシ候様、故障不為申立、一粒ナリトモ五穀出来重候様、屹度御沙汰ニ被及度事ニ候、兎角ニ旧弊一新無之候テハ、開拓或移人之道モ行ハレ兼候、是当今之御急務第一、他邦輸入之數ヲ被減之法ト相考申候、

一 菱刈・真幸表等へ移人之儀ハ、寛政・享和之比ヨリ近代文化・文政之比迄、僧人方又ハ宗門犯罪者移リ人杯、様々御手モ為相付由候へ共、于今アリ付居候ハ、僅ニ十分之一ニモ至り兼、当分澤原之移人、是又今形ニテ

ハ永統無覺束、最早稍離散之氣嚮モ差起候哉ニ相聞ヘ、
 誠ニ残多キ次第ニ候、因テ此後御処置之趣、乍憚愚考
 之成行左ニ相記申候、扱移人ハ先ツ上・下甌島・長島、
 阿久根、川内方限又ハ市來、串木野、伊集院、伊作、
 阿多、田布施、加世田、川邊或帖佐、國府、敷根等之
 如キ人体多ク、田島少キ郷々ヨリ、衆中・百姓ニ不限
 町・浜人等作式取馴タルモノ、望ニマカセ真幸五ヶ郷
 並小林方限何方ニテモ、土着・移転勝手ニ被相許、町・
 浜人等ハ転住之所衆中抱モノ等、又ハ前ニ論述イタシ
 候通、寄合・小番・新番・御小姓組等、開拓致候人々
 ノ望ニマカセ、家之子郎徒(寛九)ニ召抱方等被相許候様有之
 度候、其通ニ相成候ハ、追々土地・人員平均之一端ニ
 モ相成リ、且開拓付テハ、自然不被令シテ開ケ立可申、
 開墾ハ第一移人之道先キ立不申候テハ、旧住之衆中・
 百姓共、古田島之格護サヘ存分届兼候場所柄ユヘ、開
 闢不相調ハ勿論ニ御座候、尤右通家之子等ニ召抱之儀
 於被許テハ、開拓ハ素ヨリ撫育ニ付テモ、憂苦先ツハ
 其主人ヘ訴ヘ、救急ノタヨリモ有之、自然アリ付可申
 哉、今通西目下瀉辺ヨリ、日雇奉公人等府内ヘ屯聚イ
 タシ候様ニテハ、終ニハ不耕・不織之遊民ト相成リ、

大ニ国中之妨ニ可相成ハ勿論ニ候得共、其原因ヲ尋ヌ
 ルニ、畢竟ハ西目下瀉ハ人員多ク、田島不足ニテ生計
 調兼候処ヨリ、不得已事旧里ヲ立出候モノ共勝ニ可有
 之、右通抱地等被相許、開墾致付、其主人各見込ヲ以、
 其地ニ現住為致、撫育之筋モ見込次第第二処置為致候ハ、
 無用之山野モ開ケ立、往々国益之大ナルニモ可成行哉、
 尤国ニ不織・不耕之民多キハ、政事之妨ナル事ハ、和
 漢古今之通論無申迄事ニ候得ハ、ケ様之世態ニ成行候
 上ハ、速ニ断然之御処置被為在、各産業相競ヒ、遊民
 減少之御世話專一ト相考申候、

但菱刈・真幸表等ヘモ、天草人ニテモ、屬性旁慥ナ
 ルモノハ如何程モ被召入候様、易簡之法被建置度
 事ト相考申候、

一吉松之内澤原ヘ移人之次第ハ、先達テ彼地ヘ差越、人
 情旁觀察致候ニ、移住之輩過半ハ上・下町等之遊民、
 無頼之族ニテ、耕耘之道ハ素ヨリ不取馴之モノ共、殊
 ニ澤原ハ土性モ不宜、田地開拓之場モ少ク、然ニ全之
 原野ニ、俄ニ縦横ニ町家ヲ取建、移転為致候テ、生計
 之道可相立道理モ無之、亦他邦往來、或近郷通路等ニ
 テ、弁利之場所ニモ候ハ、工商之道ニテモ可有之候得

共、真幸表等ニテ辺鄙之原野、麓辺ヨリ霧島山下ニ向ヒ、一里余モ坂路ヲ越シ、水利モ不宜場所、実ニ不弁之所ト相見候、尤吉松・馬關田ハ、元來勞郷ニテ、旧來之町家モ有之事ナカラ、工商之融通モ耽々無之、耕作之ミニテ渡世之場所ニ候処へ、遊民無頼之輩ヲ移住爲致候テ、稼業可有之訳ニ無之、乍憚愚考ニハ、当分ノ御仕向ハ速ニ御改革有之度、左候テ是迄移居之モノ共ハ、此涯都テ真幸表之五ヶ郷、又ハ小林・高原・高崎・栗野・横川辺之郷町ニ、備屋如キ之家ヲ御出來被下、其郷々大小ニ随ヒ、拾家・式拾家ツ、モ程ニ応シ転居爲致、差当リ饑寒之患丈御救被下、以來撫育之法ハ、旧來之郷町人共之由、生計兎哉角イタシ居候モノヲ扱ヒ、其モノ共へ郷役共取締之道ヲ付ケ、人々所長所好之稼業ニ随ヒ、本手金分限ニ応シ御借渡相成候ハ、ヲノツカラ其本手ヲ以生業取弘可申、移人之輩ハ右町人共之蔭ニヨリ、日雇稼等之事自然可有之、即夫ガ移人生業之一端ニ相成可申哉、右拝借金等イタシタルモノ共へハ、移人式三家又ハ四五家程ツ、モ、身上ニ準シ御預リト申様之名目ニテ引受、世話イタシ爲愛付候向ニ御座候ハ、救急撫育之法モ細々行届可申哉、其上

ニ地頭・郡奉行等取締差引モイタシ候ハ、乍憚当分ノ御仕向ヨリ遙ニ行届可申哉、今形之御趣法ニテ、余多之移人共へ時々饑寒之御取扱モナクテ相叶マシク、夫ハ益ナキノミナラス、御際限モ有之間敷、追々御入費幾千駄、実ニ見止モ付兼可申、加之人氣稍崩壞ニ赴候由ニモ相聞へ、弥増御入用相高候事ニモ可成立哉、ケ様紛擾ニ赴キタル氣嚮ヲ、此俣相円候ハ、容易之事ニハ有之間敷、又其内西目方等ヨリ引移り候モノハ、可也耕作之心得有之モ、式拾余株ハ罷居候由御座候間、其モノ共之分ハ当分通ニ被召置、住家モ作人風ニ出來替被下、畑作ニ爲取付、此上ニモ地面ニ応候丈ハ移住致、第一櫛・楮・漆・茶園等、或養蚕ヲ勤メ、相応之場所ト相考へ申候、是以御上之計ニテハ連続イタシ兼候半、前論之通望之人々へ抱地ニ被下可然哉、其主人現住イタシ、開墾撫恤見込ヲ以尽力致候ハ、行届可申哉、サリナカラ田地開之場所ハ、相分様見請申候間、都テ昌開之仕向ニテ、專植木ヲ目当ニ相応之地形ト相考申候、

一一所持ニテ、現ニ一所之地或持切在等処持不被致面々、又ハ寄合・小番・新番・御小姓組等望之人々へ、家格

分限ニ応シ、御府内ヨリ十里以外之諸郷、無用之山野地各見込次第、何方ニテモ抱地・永作地ニ被下、其身モ好ニマカセ土着イタシ、前論通田畠ヲ開拓シ、或移人撫恤存慮次第ニ手ヲ付候ハ、不年ニシテ幾多之田疇相開ケ、穀類出来増御国潤被成、少シニテモ輸入ヲ減シ、往々ニハ一方ナラサル御益ニ可有之候、然テ第一寄合以上・一所持又持切在等所持不被致衆ハ、後々持切在ニテモ可相成程之手弘之山野地等被下置、追々開拓ハ基ヨリ、移人モ好次第ニ召抱候様被相許、旧来下人等モ往々現住被為致候趣法相建候ハ、自然開拓モ行届、身上モ立直リ、軍備モ相届、実相叶可申哉、今形ニ泰平因循之法ニテ、府内ニ屯集被致、纔ニ二三反位之屋敷ニ居住有之、平士同様困苦ニ迫リ、実用ニ可用户家来等モ、耽々養育不被致次第ニテハ、適家名御取持之詮モ無之ノミナラス、ケ様之世態ニ赴、祖先之志モ継述被致候儀モ不相叶、嘸残念ニ被存候ニ可有之筈、歎ケ敷事ニ相考候、因テ古土着農兵之御制度ニ被復、大身之衆ハ是非ニ其地ニ土着被致、家来・家之子撫育旁操練等親敷勉強有之候ハ、ヲノツカラ華侈之風モ一洗シ、俊厚直実ニ赴キ、時世相当国家之益無此上、小

番・新番・御小姓与モ右ニ準シ、抱地等被下、自力ニ開発イタシ候ハ、身上モ往々立行、其身之筋骸モ健ニ相成リ、軍事ニ取テハ当時華麗柔弱之モノヨリ御用立可申、士ハ容貌・言語・動作如何見苦候トモ、朴直・清廉ニシテ、勇壯ニサヘ有之候ヘハ、今時之利口・浮薄之モノヨリ御頼母敷有之ハ勿論ニ御座候、今通府下ニ屯聚聚居シテ、僅四五畦之地ニ屈居シテ、俸禄ヲ貪リ輕薄・柔惰之士ハ、実用ニ向兼可申哉、尤少々ニテモ右通土着致、ミツカラ筋骸ヲ勞シ、不耕・不織ノモノ減候様相成候ハ、別テ御為ニ相成可申哉、就テハ前書之通、無用山野等ヲ其所之田夫共、無故不相拒様ニ申論シ、抱地又ハ移人召抱方之御処置被為在候ハ、差当リ無此上御良策欵ト相考申候、何卒断然之御趣法被召建度事ニ御座候、且抱地之儀ハ、何ツ方郷ニテモ、各見込次第大小望ニマカセ、カノヲヨヒ候丈ケハ、如何程ニテモ被下置候様有之度、尤無用之大山野地ニ御望候間、限量ヲ被定候様ニテハ宜間敷、此段ハ御処置之要目ニ御座候間、望通被下置候様有御座度候、尤移人召抱方之儀ハ、寄合以上ハ家来・下人、其以下ハ家之子ト申名目ニテ、一刀ヲモ為帶、家之子ハ軍役ニ付

テハ、衆中并家来之末ニ列リ、平生之公役奉公ハ、其郷々之法ニ準シ、衆中・百姓同様被召仕候様、有之度候、但抱地内田島共自力開闢イタシ、往々地面立候ハ、ヲノツカラ御法通ニ御竿入相成、地位等ニ準シ相当之儀盛相定、抱地高据被仰付候儀、当然之事ニ候得共、享保已来之御規則通ニテハ、当分諸色并日用貨錢等高直之事ニ候間、御法則モ昇平之御規ハ、兎角御取捨無之候テハ難相濟候ニ付、三ヶ年作取等之御作法ハ被相緩、八九ヶ年・拾ヶ年程モ作取ニテ、高究之儀モ寛輕之御取扱專一ト奉存候、是又時世御斟酌被為在候テハ、適之良法モ詮立申間敷候間、至当今テハ專御困益ヲ御目当ニテ、一時急成之御益ハ、乍恐御良策ニハ有之間敷候、将又乍序相考候趣論述仕候、前書通現一所持之衆ハ、成丈領分内ニ居住被致、府内屋敷ハ仮屋ト相唱、家作モ取細メ、春秋一兩度モ出府、御礼事等被申上候様御座候ハ、自然風俗モ、儉素朴直復シ可申哉、今通府下ニ大家ヲ建營シ、尊大之舉動ニテハ、人才モ出来不申、御頼母敷人物モ乏敷、実ニ中古以来、昇平ニ因循之、華麗浮薄・虚飾之関東風ヲ

被擬候様之次第ニ相見得、当今之世態ニハ、第一ニ此風習ヲ御一洗無之テハ不相濟事ト相考申候、今形ニテハ家来ニモ定府過分ニ出来、支度屋敷杯ト唱、都テ家来等居住イタシ、遊民同然之輩、遠方輸入之米穀ヲ徒食イタシ、夫故夏分ニハ府内米穀・油醬等^{本マ}拵、上下困苦ニ迫ル次第モ有之、且ハ交替之家来・下人等一所持之衆ニテモ如何程ニ可有之哉、或拾老家ニイタシ、一家五十人ニ平均之詰人数ニ致シ、千人余ニヲヨヒ可申哉、食用ハ定限モ有之候得共、魚・塩・酒・醬ヲ米穀ニ直シテ、一人米貳石ニ算テ貳千石ニ余リ可申、是ヲ府内ニ輸入シテ、人馬之費耗如何計ニ可有之哉、又交替之輩、過半ハ耕耘ヲ業トイタシ居候モノ共ニ可有之、輪直之間ハ自然其業モ怠リ、其損耗如何程ニ可有之哉、実ニ府内之居住ハ、損多クシテ益ハ無之、速ニ領地ニ被引取、政令親敷指揮被致候様、御沙汰有之度事ニ御座候、

一右通寄合以上一所持ニテ、一所之地或持切在等モ所持不致面々、并小番・新番・御小姓与等、抱地内ハ現住イタシ度モノハ、望通被仰付、左候テ家格旁初テノ、

御目見、亦ハ諸御式事等、或軍賦ニ付テハ、都テ是迄之通ニテ、小番・新番・御小姓与之儀ハ、当分中宿土同様之御取扱ハ宜間敷候、寄合以上之儀ハ、府内へ仮屋一ヶ所、或是迄之居屋敷ニテモ家作等取細、小番・新番・御小姓与之儀ハ当分通ニテ、屋番人ニテモ召置候歟、又ハ父母幼少之子弟等召置候様之儀ハ不苦、且ハ文武教誘ニ付、屋敷所持無之モノハ、造士館・演武館・海陸軍所等へ入塾ニテモ被仰付候様有之度、其辺之事ハ人氣不相抽様之御沙汰有之度候、且其身又ハ子弟等、当今通御奉公向懇望之人ハ被懸其意、俸禄ハ持高之多少、勤方之高下ニヨリ被下候テ可然哉、尤追々開拓地等高据之上ハ、タトへハ五拾石以上之人ハ、家督一人俸禄不被成下、七拾石以上ハ嫡子モ俸禄不被成下、百石以上ハ二男マテモ不被下様之向ニテ、夫々分限勤柄ニ準シ、御規則相建可然事ト相考申候、

一寄合以上又ハ小番・新番・御小姓与共、開拓地之畦・反等、広狭ハ夫々家格・分限ニ応シ被下置度事候得共、寄合以上ハ前書之通、領分同然持切在ト相唱、家来現居為致候様無之候テハ、開拓モ不行届ノミナラス、矢張当分之給地高同様ニテ、実用ニハ相叶マシク候間、

持切在ト相唱、領地被致候様有之度、尤移人其地ニ召置付テハ、田畠迄ニテモ不相濟、竹木類モ人体相応ニ不仕立置候テハ、不叶事御座候間、其辺ヲモ見計、手弘ニ被下置、後々ハ一村ニ取建候位之地ハ、不被借被下置度候、小番・新番・御小姓与之儀モ、右ニ準シ其身其地ニ土着イタシ、開拓撫育イタシ候ニ付テハ、飯野居住大河平孫八郎同様之向ヲ以テ、随分望ニ被任可然哉、無用之山野多キハ、必ス府下ヨリ十里以外之遠郷ニ可有之候間、近在抱地同様僅計之地ニテハ其詮有之間敷、是又分限ニ応シ、相当ニ被下置度候、且此三等ハ当今之御軍賦ヲ相考候ニ、給地高之分限ハ被定置候得共、過半ハ一僕一身之出役ニ御座候、然ハ高之分限ハ、軍役ニ不拘全ク治世迄之事之様有之、名実不相当御座候間、以来此三等ハ、給地高モ同様被下置候儀、当然歟ト相考申候、尤以来開拓之地ハ、抱地高据之上ハ給地高ト取合セ、式百石程之分限ニ被充置、開拓高ト都合イタシ過上ニ及候ハ、給地高ト開拓高ト、定限之員數ニ相減候様有之度候、且寄合以上ハ家名之御取持ハ、別段ニ御座候得共、知行高ハ小番・新番杯ヨリモ少高之方モ有之、御取持通ニ相当之軍役モ、不被相調

方モ間々有之、殘多キ次第ニ御座候、右通開拓ニテモ被致、家来モ其地ニ扶助被致候様御座候ハ、後ニハ家名通、相当之軍役モ被相勤場ニ可相成哉ト、相考申候、但御一門方并現一所持、或寄合以上等、当分知行被

致候領地内開拓ハ、別段之事ニ候得共、前書通抱地高等、領分外新ニ抱地等被下候事ハ不相成筋ニ有之度候、乍然領分外之場所ニ散高所持有之方モ可有御座候間、其散高丈ヲ被売払、現実分明ニ候ハ何ツ方ナリトモ、其払高ニ応シ候丈ケノ抱地、被下置候様有之度候、将又寄合以上并小番・新番・御小姓与之家来・下人等、上・下町其外府内諸所へ中宿イタシ、遊民同然不織・不耕之モノ不少候付、右体之モノハ、追々抱地内江現住為致候様有之度、併急速ニハ可被行事ニ無之候間、十年孰其余期限ヲ定移転被仰付度候、又新ニ召抱候モノハ、家来・下人ニ不限、日雇之名目逆テモ、府下へ中宿為致候事ハ、屹ト禁絶之法相建度、今形諸郷等ヨリ、無故遊民体之モノ屯聚イタシテハ、大ニ御政体ニ妨可有之、如何ニモシテ嚴重之規則相立度候、又現一所持之家来ニテ、府内へ中宿イタシ、工商之

産業致居候モノ不少候付、右ハ領内へ早々引取候様御沙汰有之、若引取難キ事情実ニ有之モノハ、工人ハ御作事方附、商人ハ町人ニ被召成、夫々其産業ニ依テ御処置有之候欤、又ハ領地無之寄合・小番・新番・御小姓与等之家来・下人ニ、主人替イタシ候様御沙汰有之度候、

一新田開之儀ハ、以来御物計ハ御不益ナルノミナラス、何ツ方郷ニテモ、御物計之普請事等有之候得ハ、諸役人余多入込、自然公役奉公等相重ミ、農人共耕稼之妨、鄉村之疲勞相成、御実益ハ決テ有之間敷、既ニ國府小村之新田ハ、天保之末比ヨリ弘化之初迄ニ御成功相成、早忒拾余年程モ及候得共、冲手之方三分一位ハ、近年中共ニ田立候向ニモ不相見得、此処モ開初之時分ヨリ、誰人欽引請我モノニイタシ、手ヲ入候ハ塩浜ニテモ相開キ、或水草・蘭杯之類ニテモ植付候ハ、少々ハ益モ可有之候へトモ、未御入用補之場ニハ至リ兼可申候、御物之仕事ハ何ニヨラス、初之御趣法連続致兼候モノニ御座候、其訳ハ役人之転遷交替等ニテ、終ニハ死法ニ流レ候事不少候付、開拓又ハ移人ハ都テ生モノ、処置ニ御座候間、急成ハ難相成、前文通ニ望ノ人々へ抱地

ニ被成下、各見込次第ニ手ヲ付候ハ、小口切りニ行届可申哉、タトヒ抱地ニ被出候共、御上之御益ハ内外之差別有之ノミニテ、相替事無之、第一御国益ニテ当世態專一之事歟ト相考申候、

一諸郷イツ方ニテモ、勸農之妨ハ諸役人郷内ニ多ク入込之事ニ御座候間、可成丈ケハ締方等之諸役人、勤方之筋地頭・郡奉行等之手ニテ為相濟候道ハ有之間敷哉、宗門方廻勤モ、同様地頭之計ニテ随分取締様ハ可有之、犯罪之モノ糺明方等ニテ農時ヲ妨候様ニテ、頑愚之輩一旦之迷、邪道ニ陥リタルモノ、終ニ御高格護モ不行届、所帯差禿候ニモ至リ、且又官売品買円方ニ付、向々ヨリ廻勤之役場モ不少、就中真幸表・小林方限ハ、養蚕法・人参植付方、或茶方等ヨリ時々差入、或定詰等之向モ有之、夫仕付テハ賃錢払等ニテ迷惑ニハ不相成姿ニ候得共、往来道人馬日々水夫彼是其外、謂レサル夫仕等モ間々可有之哉、郷役共ニハ過半ハ自身農業イタシ候モノニテ、間隙ヲ不得、旁耕耘ヲ妨候廉不少、農人ハ一日耕セハ十日之食ヲ得、一人耕セハ十人之食ヲ得ルト申事モ有之候間、寸隙モ惜ミ耕耘ニノミ差ハマリ候様、処置有之度事ニ候、因テ可成丈ケハ夫仕・

公役等減少之法嚴重ニ相立度、追々其段ハ御手モ付候事ナカラ、其源ヲ断候御取扱無之、取締之申渡迄ニテハ、詮立申マシク候、就テハ第一官売方之廻勤ハ都テ引取、地頭・郡奉行之計ヲ以相円、府下へ差送候様相成可然哉、諸仕建ノモノ逆モ同様ニテ、差支ハ有之間敷、如何様トモ早ク改革有之度、是当今勸農之第一ニ可有之候、尤五穀之外諸産物ハ、何程利有ルモノニテモ、穀類作式之妨不相成様無之テハ、相濟マシク候間、人々心掛ヲ以、農人ハ農暇、商人ハ商暇之業ニイタシ、其本業ヲ不妨、間隙ニ出精、余沢ニ相成候様為致、タトヘハ農人ニ養蚕ヲ勸、商人ニ農業ヲ勸候類之事ハ、其本職ヲ妨候付、人々望ニマカセ、出精イタシ候モノヘハ、宜敷運ヒヲ付呉候歟、或本手金等貸渡候歟、人氣ニ随ヒ被相勤度候、タトヘハ養蚕方之仕向ニシテ申セハ、一ケ年ニ何程ノ桑ヲ植付、何程之糸ヲ出シ何年目ニハ何程之出産ト、其所々之分限氣嚮ニ準シ、大凡之賦ヲ立、年ヲ追ヒ殖立候様仕向相立候ハ、無差障産物モ相増可申哉、其他楮・漆・茶園等之品ニモ、土地人情ニ基可相増趣法ヲ簡易ニ立候ハ、各利アルヲ知テ、令セラレスシテ、ヲノツカラ出精可致哉、甚氣長キ仕

方之様御座候へ共、無役之身ニテ田舎へ参り、情実探
索イタシ候ニ、兎角ケ様之法ニアラサレハ、何事モ人
氣振立申マシク、尤工商之業ト違ヒ、土地ニ生シ候モ
ノハ、日月ヲ積ミ、生熟之候モ自然有之候付、趣法モ
夫ニ循シ不申候テハ、行ハレ申マシク候、

一前条之通望之人々へハ、イツ方ニテモ抱地被下、土着
イタシ、田畠之開拓ヲ初トシテ移人ヲ撫育シ、或諸産
物何品ニヨラス生育イタシ候様之仕向、新ニ相建度品
ハ、茶・漆・楮杯ニテ候、植木高ハ何ニヨラス、一度
植付置候得ハ、年々聊之手入迄ニテ、永年之産物ニ相
成、就中楮・漆之二品ハ手入モ格別難カラス、採収ハ
農暇ノモノニテ、耕耘之妨ニハ不相成候間、菱刈・真
幸或ハ踊・曾於郡・横川辺或向潟等、山野或畑地多キ郷
々、前文通諸人へ抱地ニ被下、各見込ヲ以テ仕建候ハ、
令セスシテ相増可申候哉、中ニモ楮ハ別テ国産ニ相成
可申、就テハ今ヨリ四五年之後ニ至リ、西洋ヨリ紙漉
蒸氣器械取寄、御取建場所ハ國府、敷根辺、海陸共何ツ
方ヨリモ弁利宜敷所へ被召建、其館へ為売上、漉調之
上他國へモ売出相成候ハ、産物之一端トモ可相成哉、
西洋ヨリ諸器械追々御取寄之内ニ、御国ニ相応弁利之

モノハ、差当リ此器械ニ限り可申哉ト相考申候、

一古ヨリ日本之農法ハ水田ヲ專ニシテ、畠地麦作等ハ次
ニイタシ候習風ニ候、當時ニ相成リ其旧習ニ拘泥致居
候テハ、無用之山野地等相開ケ、諸穀出来重候期ハ有
之間敷、前文通望之人へ抱地等被下置、其地へ居住モ
イタシ、田畠共ニ耕耘收採之道モ、和漢蛮彼是斟酌イ
タシ、畠作之仕付方或産物之生育製法モ精フシ、植木
高ニモ利アルヲ、愚昧之野人共ニモ知ラシメ候ハ、追々
ハ産物モ相増、国益之端ニモ可相成、御国之農業ハ他
國ニ比較イタシ候ニ、甚手荒ニ有之、随テ取実モ少ク、
畢竟ハ地面余リ有テ、人民少キ故ニモ候半、尤御國中
人民之數平均不致、西目下潟之諸郷ハ人体多ク土地不
足、東目并向潟諸郷ハ、土地多ク人体不足ニ候間、当
分物価沸騰中へ、土地不足之郷々ハ困究ニ迫リ、土地
多キ所へ移転イタシ度人氣ニ赴候間、土地・人体平均
之御趣法、此機會ニ御手ヲ被付度事ト相考申候、

一前件通當時困究ニ迫リ、開拓或移転之氣嚮ニ赴キ候間、
此機會ヲ不失、御趣法相立候ハ、人々競争シテ抱地或
ハ移人召抱方等可願出哉、就テハ郷村之旧弊ヲ押へ、
少々之故障迄ハ、押シテ田畠ニ可開場所之分ハ開拓被

許度候、爰ニテ一年之後ハ、先十年之後ニ相成、一日モ此機会不失様ニ有之度候、尤初ヨリ御上之利ヲ不被爲見、全ク御国益ヲ目当ニテ、一粒ナリトモ出来重候テ、輸入ヲ減候様有之度候、因テ万端セリ詰タル取扱向ハ不宜候間、至極簡易之御趣法專一ニ御座候、

一右ニ付肝要ナル事ハ、タトヘハ何ツ方ニテモ、現地之古田壱石之地有之、其近辺ニ三石程モ不開場所所有之、用水ハ心ヲ用ヒ候ヘハ、其新拓三石程ハ十分ニ養ハレ、古田之壱石ニハ不足ト申様之場所間ニハ有之候、夫等之処ハ郡方又ハ鄉村ヨリ、其壱石之差支ヲ以、新拓之三石程ハ決テ不相許候、右ハ一ト通り尤之様御座候得共、当今之世振ニハ甚因循固陋之事欵ト相考申候、タトヒ古田之壱石ハ全ク廢シ候テモ、新二三石程開ケ候得ハ、御国益ニ御座候、併現地之壱石潰候テハ、御高減少イタシ候付、其補ニハ右新拓之内壱石丈ヲ、抱地内ニテモ御蔵入ニ被成候欵、亦ハ矢張抱地高ニテ出米ヲ相重候ハ、如何様ニモ御蔵收納本サヘ不足不致候ハ、名目ハ何様ニモ差支有之間敷哉、又其三石程可開地ヲ用水丈見計、忒石程之新拓被相許候テモ可然哉、此仕向モ被相開候ハ、諸所ニテ相応開ケ高ニ可及候、則一ヲ捨テ

三ヲ取ルノ訳ニ御座候、又畠地ヲ都テ粟・麦・大豆納之御規則ニテ、其納分至テ輕キ規ニ御座候間、現畠亦ハ山野畑ニテモ、田地成リ被許度候、山野畑ハ猶更之事ニ御座候間、是又水利宜敷場所ハ時世ニ準シ、御国益ニ相成筋ヲ以、田地ナリ被相許、定代納分等ヲ元畠地之掛ヨリ少々相重候御法相建候ハ、人々争フテ、畑田ナリ願出候様可相成ハ必定、左候得ハ御領國中過分之出来増可相成候、

一杉・松其他諸木部一山仕建之儀ハ、右之抱地同様、人々望之通何方ニテモ願通仕建方被相許度候、当分モ年々御仕建ハ勿論、部一山之御免モ有之事候得ハ、御物仕事ハ何ニヨラス手入見締届兼、下草払或ハ野燒旁之取締行届兼候付、抱地同様ニ相成候ハ、後々御為可相成哉、是以地面曳渡方等、鄉村ニヲヒテ面動無之、簡易之御所置有之度候、

但飛州・紀州ハ、材木ヲ第一之産物トイタシ候有名之困柄ニ御座候、然ルニ兩國共如何ナル大山ニテモ、都テ官之林ハ無之、人々仕建山之趣法ニテ伐出候節、相当之税ヲ官ニ納候由、右通人々手入見締行届候付、山林繁茂之由、是ハ至極之良法ト相

考申候、

一右通望之人々へ開拓、亦移人召抱方等於被許テハ、全ク自分之取計迄ニテハ運ヒ兼候儀モ可有之、殊ニ僻遠之諸郷ニ至テハ、御趣意貫徹致シ兼可申候ニ付、右之掛ニテ四五ヶ郷程ツ、モ曳請、御役場被遣度候、尤地頭・郡奉行申談、過不及之処置無之様、且ハ因循固陋之説ニ陥ラス、時世相当之取扱被命度事ニ候、又開拓場水利六ヶ舗候歟、或溜池ニテモ出来イタシ候ハ、相應ニ相開ケ候所ニテ、自力難叶所ハ其役筋へ申出候ハ、見分之上奉伺、御手ヲ被付被下候様有之、且ハ移人之事ハ、旧里へ懸引、旁是以引請ニテ取計候様有之度、尤澤原移人方へ別段役場被掛置候向ヲ以被遣置、可然哉ト相考申候、

但右通役場被差出置候所ハ、無用之山野多ク、或ハ畠地モ過分有之、開拓之場有之分ハ、諸郷へ此涯四五年程モ被成置可然哉、

一諸郷々何ツ方ニテモ旧來之習風ニテ無用之隙取、又ハ冗費ニヲヨヒ候儀共不少候、右ハ地頭・郡奉行成丈氣ヲ付、相省候様有之度、就中愚昧之輩葬祭向ニ付、余計之經費有之候間、是以程克為相省度、此等之儀八百

姓御厭之第一ト相考申候、併ナカラ愚蒙之野人・衆中・百姓ニ不限、余リセリ詰瑣細之制度相立候テハ、外ニ欲楽之道モ無之輩、明暮耕耘ニ消光イタシ、風寒暑濕之苦モ不少候付、一ケ年ニ兩三度程ハ、神社之祭礼或狂言戲舞之類ニテモ、其所々ノ習風ニマカセ為相催、耳目之衆ニテモ為致候様有之度、一体愚民ハ易簡之法ヲ以維持シ、曾テ究屈ニ不至様、分テ地頭・郡奉行心ヲ用ヒ、寛大之処置ヲ以、農耕為相励度、是勸農之要目ニ可有御座候、

一右諸件之通、簡易之法被相開、人々望ニマカセ田畠開拓、或移人撫育モ致候ハ、不年ニシテ相應ニ相開可申哉、何分ニモ多端之制度相立、面動付候儀ハ不宜候、扱又前書通真幸五ヶ郷、亦ハ小林・高原・高崎・野尻・須木・高城辺等之拾余ヶ郷之内ニ、四五万石程モ新ニ相開ケ候ハ、御蔵入ハ十分之一ニ候トモ、御国益ハ莫大之事ニ御座候、當時之相庭ニイタシ、拾万兩程ハ定額之国益ニ相成、左候へハ輸入モ夫丈相減シ候賦、其余郷々無用之山野地多キ所ニモ、五六万石程モ相開ケ候ハ、猶更一統之潤助ニ可相成、タトへ急々夫丈之開ニ不至トモ、爰ニテ右諸件之向ヲ以御手付候ハ、十年

程之後ニハ相応之事ニ可有之、当今其機会ニ御座候間、此時ヲ不失御手付度事ニ候、余リ重論ニ御座候ヘトモ、開拓移人之両事ハ、郷役共因循之陋習ヲ御一新專一ニ候間、田島ニ可開場所之分ハ、野民共不相沮様嚴敷御沙汰有之度候、

一御国ハ全体耕耘別テ不行届、他国ニ比較致候ヘハ、甚手荒ニ有之、就中菱刈・真幸・祁答院或向潟等之諸郷ハ、無用之原野夥、人体相少ク、見苦敷不頓着ニ有之、如何ニモシテ綿密ニ行届、山野開キ立候様無之候テハ不相濟、申ニモ不及事ナカラ、農ハ国之本ニテ、制度之建方、風俗之厚薄、天度之冷熱、時世之變遷、治乱之差別、各国異同アリトイヘトモ、人民穀食セサルハ有之間敷、御国ハ人体不相応五穀之産少ク、御蔵入又ハ給地作得米等、現米年々四拾万石内外之出来高ニテ、人体之惣計ハ八十万人ニ下ラス、其人体ヲ以考候ニ、三拾万人之食料ニモ足ラス、其余ハ都テ雜穀・唐芋類ニテ取続候訳ニ御座候、誠ニ歎ケ敷次第、ケ様之世態実ニ可恐可憂事ニ御座候、夫故年々他国ヨリ輸入シテ、夏分ニハ高直ハ扱置及払底、貴賤共甚困難ニ迫リ候事ハ、三四年前之通ニテ、万々此後隣領等閉鎖之變到来

候ハ、如何シテ救急之道可有之哉、因テ前件ニ反復重論致候通、十里以外之諸郷、無用之大山野地ハ、抱地開拓或移人召抱方等、至極簡易之法被相建、人々競テ開拓イタシ、一粒ナリトモ出来重候様、御処置有之度、尤四五年程ニテハ、全ク輸入ヲ不待様ニハ相成間敷候ヘトモ、永年不朽之法ニ候ヘハ、急成ヲ不被好、可被捨置事ニハ有之間敷候、食サヘ足り候ヘハ、当難ハ凌カレ可申、情勤考致候ニ、防長之閉鎖ハ早五六年ニヨヨヒ、其内攘夷或京師之暴挙、又ハ此度国難旁、内外百端之費用幾千軟難量程之事ニ可有之、然ルニ至只今国体格別疲勞之模様ニモ不相聞ヘ、是元來食足り、産物多キ訳ニテ、第一ハ五穀過分ニ産シ候処ヨリ、至爰兵力モ熾ニ可有之哉、云フヘカラサル事ニ候ヘ共、国体之立方ハ其通ニ有之度事ニ御座候、願クハ御国モ速ニ旧習御一洗、開拓移人或古田島之耕耘行届、或産物モ出増候様御沙汰ニ被及度候、今形因循固着之旧法ニ拘泥イタシ、閑等之作式ニテハ決テ不相濟、且ハ新田開ヨリ、古田ヲ荒サ、ル様ニトノ説ハ、百余年前極盛至治、物価下直之時可云事ニシテ、当今ハ愚夫・愚婦モ農耕ニ利アルヲ弁識イタシ候砌ニハ、其古説ヲ確守シ、可

被捨置事ニ無之、尤御国ニテ諸御規ト申セハ、都テ享保以來安永・天明之比、至平之世ニ御定為成儀ニテ、至今日テハ

皇国開闢以來、未曾有之混乱ナル世ニ御座候間、第一ニ農政ヲ改革シ、諸事時世相当之御処置ニ被變度、尤大島其他七島・屋久島等モ、無用之山野過分有之由御座候間、嶋々之分ハ町・浜人ニテモ、見込次第開拓被相許、大坂辺豪富之モノ、如ク、永代作場ニ被下置度候、左候ハ追々ハ御下シ米モ相減シ候場ニモ可罷成哉、旁以當時ハ耕耘ニ人氣相趣候間、此機会ヲ不被失、御手ヲ可被付之時節ト相考申候、

丙寅九月 日

市來〔四郎広書〕正右衛門頓首

此書ハ慶応二年丙寅九月、御家老桂右衛門殿へ出ス、

〔表紙〕

忠義公史料

市來四郎編
慶應二年十月

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事執筆史料」
(紙数二三枚)の記載あり〕

目録

- 別府壮右衛門小倉戦争探聞ノ報告
- 道島家記抄
- 五代才助ヨリ桂右衛門へ書翰
- 米田虎之助ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰
- 五代才助ヨリ桂右衛門へ書翰紡績器械建設云々其他数件
- 相原治人・野村靖之助ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰
- 田中顯輔ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

島津中将所勞上京御猶予願

道島家記抄小松・西郷上京

徳川中納言殿参内事件

島津父子連名建言

二九一 別府壮右衛門小倉戦争探聞ノ報告

去月九日夜明時分、河原屯集之小倉勢凡三百人位、小倉・筑前口相堅メ居候長州陣屋江押寄、及砲発候処、同所之儀、長州方は人数も相少ク、其上不意之儀ニテ、俄ニ軍配出来兼、小倉東之方川口迄引退キ、同所橋を中ニして疊等積立、右を楯ニ取、川越ニテ朝六ツ時分より五ツ時分迄、小銃を以打合、然折柄長州方は安達其外諸所陣屋より人数繰出シ、且又相図之烽火打揚候処、頓て下之關よりも追々人数押渡、小倉勢之後を取切手筈ニテ、浜辺より人数差廻シ候処、小倉勢は則筑前口之方江引取、同所門江火を掛、夫形筑前境清水江出、同所より山路江掛、河原之方江立去り候由、右ニ付長州方は、翌十日より河原迄責入賦ニテ、人数差向ケ候処、河原よりも(北九州也)城野又は(同上)蒲生と申所迄人数差出、

去ル廿日比迄之間、追々及戰爭たる由候得共、何分河原之人数は要害之地ニ寄り、長州方は不知案内之場所ニテ、深相進ミ候ては、却て味方相損シ候処より、博々敷接戦も不相調、容易ニ責入かたく向ニテ、小倉江引取候由、尤同所之儀は、諸所在々迄も陣屋を建、嚴重相堅メ居、左候て城野并蒲生或は徳力と申所迄迄は、式三拾人位ツ、始終行廻り、河原よりも同様人数差廻シ、間ニは双方より出逢及戰爭候由、乍然遠方より小銃を以打合候迄ニテ、格別烈敷戦と申程之儀は無之候由、且又小倉之儀、焼残り居候武士家之分は、下之關辺より町人共召呼、入札払いたし候由ニテ、追々解毀チ、材木等は下之關江差廻シ、其外小倉より田之浦辺迄は、当分長州預地之儀ニ付、年貢可致旨庄屋・百姓共江申渡、上納為致候由、且河原江は大坂より上使下向ニテ、暫戰爭は相止居候様申渡相成候旨、取沙汰有之由候得共、実否之程は不相分候由、尤肥後・肥前其外、筑後・筑前等江は河原より追々使者差立、援兵之相談いたしたる由候得共、何方も断相成候由、乍然肥後之儀は、鉄砲・玉薬其外金子等も、追々河原江差統ケ相成候向ニ相聞得申候、

右通承得候間、此段申上候、以上、

筑前蘆屋滞在

唐物締横目

寅十月朔日

別府壯右衛門

御国許

奥掛并

御家老座

書役衆

〔島津忠家氏所蔵本にて校訂〕

二九二 道島家記抄

〔卷「上文」〕

右船ヨリ御側役ノ場、黒田〔蒲〕嘉右衛門・御小納戸東郷源

四郎筑前辺へ御用ニ付被遣候、内実ハ長州へ解兵御喜

ヒトシテ被遣候由、御刀白サヤ入・鎧二本被遣候由、

此節ハ御内分トハ乍申、押出テ御側役・御小納戸トイ

フ訳ニテ被遣候由、

但此事ハ窃ニ憂心スル人々モ有之ヤニ相聞得候、

勅定ヲ受ケタル將軍征討ニ候へハ、賊トモ申モノ

ナラント、假令解兵アルトモ、喜ヒノ使者ニテ行

ワタルヘカラサランカ、

前条ノ事跡ヲ以承候得ハ、此節一橋ノ策カ解兵相成候得共、御所置カ不相分候付、黒田長州へ差越演談イタシ、上京ノ儀相企候、黒田・東郷(ヲゴ)ヨリ京都へ差越候、小松・西郷ト申談モ有之由、

但二九へ召シ、此涯ノ所置ニテ長州モ承服ハイタシ間敷、勿論一橋迪モ合点イタシ間敷、拙者ニハ存遣候事、

十月二日記ス

二九三 五代才助ヨリ桂右衛門へ書翰

(折田要蔵帰国及ヒ五代辞職云々)

御親披

一筆啓上仕候、追日秋冷相催申候処、愈御壮栄可被遊御座、欣喜奉雀躍候、然は先月十二日御仕出之御尊礼帰崎之上拜承、不相替御高志実ニ奉謝様無御座、白山(モ)一条ニ付ても紛々之次第、岩大夫・伊地知・市來帰府仕候付、疾事情御聞取被下候半欵、歎慨之外無御座、細情御直ならては難申上候、扱天下の形勢只今こそ切迫之次第追々伝承、乍不及も苦心罷在申候、乍恐幕府

列藩之興廢、予め不可論候得共、只其緩急之区別有之候而已ニ御座候半、今更遠大之着眼ハ三四年以前之機会にして、則今之勢不得止事之時機、此上は不及なからも人事相尽申度、聊愚存之次第、今日出立折田要蔵(年志)江申含奉伺候付、得と御賢考奉願候、要蔵儀も此内より整財策相立、段々取組も仕居候由御座候処、此節急々引取候様被仰付候由、殆当惑之由、今更廢候ては所置無之向ニ御座候間、同人之議論策略御聞取被下、此涯御まかせ被置候方ニも可有御座哉、同人儀私同様人望無之、又余り堂々過ぎたる所置も御座候得共、私在崎ならば、右等之不都合は、為致不申含ニ御座候、勿論此節京師之一挙相開候へハ、四方塞国、第一御金繰愈御差迫之御儀にて、平生之事を以不可論事と、乍恐奉存候付、至当之御所置私よりも奉願上候、次ニ私儀も兼て奉申上候通、此節白山一条も殆相片付可申候付、是非辞職被仰付度、勿論譬へ辞職仕候ても、似合之儀ハ如何様とも相尽申度、今形にては不可謂事情も現実御座候付、此段要蔵より御聞取被下度、此段御願旁奉得尊意候、恐惶謹言、

(慶応三年乙)
十月七日

桂 右衛門様

五代才助

侍史中へ

式白、乍末毫天下国家之為御自愛被遊被下度奉專念候、

〔桂久春氏所藏本にて校訂〕

二九四 米田虎之助ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

尚々折角御自愛、為國家奉深祈候、末筆ナカラ当夏得御示教候伊地知君御初、其外之諸君子ニハ、呈書御礼得貴意候筈ニ御座候処、此節迄ハ何分屈兼申候間、乍憚宜敷御伝達被成下候様奉希候、西郷先生ニモ當時ハ御在郷之由、何卒得尊顔申度、数年之深願ニ御座候得共、何分不得暇残念之至ニ奉存候、乍憚御序モ御座候ハ、宜敷御鶴声被成置被下候様奉願候、以上、

一輪拜啓仕候、寒霜相催候処、弥御清健被成御奉務奉拜賀候、先以当夏 尊藩へ罷出候処、無存懸 両君公拜謁被仰付、殊ニ御懇篤之御意ヲモ蒙リ、誠ニ以難有仕合奉感銘候、其後ハ書中ヲ以テモ御礼可申上筈ニ御

座候処、便宜ヲ得不申、是迄遅延罷過候段、失敬奉恐縮候、其節ハ 賢兄ニハ別テ御懇情、万般御示教御周旋被成下、深ク忝ク次第奉感謝候、何分御礼申上度、乍憚 賢兄ヨリ宜敷御執啓被成下候様奉伏希候、其後尊藩ニハ、益御日新之御運歩側聞、奉欽羨候事ニテ、弊藩ニモ御示教之趣モ有之、小弟ニモ小弟丈ケ之存念モ有之候得共、纔一步々々之尽力迄ニテ、賢聽ニ達候程之速ヒニ至リ兼候段、実ニ汗顔之至ニ御座候、羅縷得御高諭申度儀ニ御座候得共、紙中ニ難述尽、先ハ乍遅延先度之御礼申上度、余ハ期後雁候、謹言、

十月七日

米田虎之助

黒田嘉右衛門様

二九五 五代才助ヨリ桂右衛門へ書翰

〔紡績器械建設云々其他数件〕

從長崎

五代才助

桂 右衛門様

侍史

猶々乍恐帯刀様へ、御序を以宜御鶴声奉願上候、左候て此紙面同席中へ御廻之程奉願候、

一筆啓上仕候、追日寒冷相催申候処、弥以御壮栄御運勤可被遊御座、欣喜奉雀躍候、然は開聞丸米穀運送之儀は、此便汾陽次郎右衛門より同席中へ相付申上候通にて、少々機会相後れ申候得共、第二策之処かなりの都合ニ押付置申候間、上坂之上、京・攝之地事情次第ニは前後熟考、御国難不相成様之所置を以、手を下し申度、御承知之通馬關さへ上下共ニ相鎖候へハ、如何様共所置可有御座、勿論私式決談難仕事件も御座候ハ、急々奉伺候歎、又は開聞丸乗帰り、御直ニ奉伺候様仕度奉存候間、左様思召被下度奉願候、

一木綿紡織機関御取立ニ付、金策播州阿形松尾七兵衛方江談判之儀、馬關江廻着仕候処、宇和島蒸気船ニも同夜入碇、勝手方御用人之田手次郎大夫と申仁乗合、直ニ面会仕り、松尾七兵衛之咄承合候処、至極都合好キ模様にて、同人よりも伝書相付申候付、大概は就成可仕候哉奉存候間、乍恐御見当ニ御待被下度、左候て追々機関来着可仕候付、夫迄之処ハ、外御金筋より御取替ニても被成下、可成速ニ御取立相成候様、御所置奉

願候、尤員數之儀は、承知仕候節も、可成相重候処ニ申上置候付、精々尽力仕候含御座候間、御序之節、同席中ニも御咄置奉願候、

一長・防形勢之儀は、追々御承知之通りにて、小倉ハボチ／＼相戦ひ候由之処、比日幸府より三雲藤一郎出掛和議周旋取掛候由、藝州口は今ニ守兵是迄之通相備置有之候、石州口は都て平靜、此内勝房州藝州廣島迄相下、長より井上文太・廣澤藤右衛門外老人出掛、談話ニ及候処、只管薩・長を賞美いたし、幕府之失態を歎し、頻ニ開兵之策を相立候由御座候得共、高杉等ハ至極不同意にて、三名応接之次第不宜杯と、余程異論も相立候由、併山口政府之内ニは、勝之周旋を甘し候説も有之候由、勝ニも再度三田尻刃迄出掛、承接いたし度趣意も可有之候付、帰坂之上再会を約置候由御座候得共、当分勝論も不相立、軍艦修覆ニ関係、浪花辺江碌々進退を見合居申候由(海舟日記・続再夢紀事参照)

一高杉ニも此内より病氣にて、至極難症ニ相見得、同人相欠候ハ、馬關ニも外ニ人物全無之、当地之内情相探候処、近来長府、本藩と内実ハ至極之不平ニ相見得、長府政府之三四名ニ面会仕候処、右様之事情ニ付、偏

ニ此御方之御援助を相願、長府生子^世之御内室、御似合之御方も御座候ハ、御素生ハ如何様とも不苦候付、申受候儀は相叶申間敷哉之歎願ニ御座候間、程能相答置申候、乍恐長府之儀ハ、機密相懷置候へハ、時變に応し離間の一助にも相成可申哉、〔先〕〔秋藩ヲ云〕本藩は馬關之地を奪ひ度赤心ニて、種々策略相醸候由、又小倉之戦ひより奇兵隊・報国隊の隔意甚様相聞得申候、

一今般列藩之諸侯方 御上京之儀、御国論之処ハ如何御座候哉、京師ニては頻ニ 御上京を奉促候哉ニて、当所ニも京師より大山彌助^{〔采〕〔殿門名〕}參居申候、筑藩ハ 御上京之議論速ニ相立、老公既ニ今日馬關御通船之由、宇和島・土藩は、此 御方之御動靜を奉伺候趣ニて、先達は細川良之助殿宇和島江被參、細情ハ不相分由御座候得共、良之助の議論、陽ニは 御上京も促候得共、内心は左様ニも不相見得との由、良之助之説ニは国許へ引取、直ニ崎陽ニ趣との咄有之候由、〔采〕〔細川護美親話記參看〕」朝命を捨置何故ニ出崎あるやと、豫州公御問詰相成候処、崎陽ニ軍艦式艘相詔置候処、俗夫共減少いたし候付、自ら出崎、三四艘を買取申度との返答之由、肥後は於浪花金三拾五万兩借入候由、必竟軍艦代等ニ差向

候半、承候へハ只々憤発ニ堪不申候、長・防も近頃は余程疲弊いたし候由ニて、桂杯も大苦心之由御座候、一御使節も近日中御出立之筈、横濱表之御模様最早知れ来候半、御都合如何と奉存候、崎陽出船之節ハ、来ル廿日頃ニは帰崎、使節御出航之間ニ逢候合御座候処、未馬關辺江罷在候位ニて、残慨仕申候、開聞丸運送之儀も、此節順序相定候へハ、此節之様遲滞ニは罷成申間敷、其内都合次第罷歸り、御直ニ万件奉伺度、此段不願乱筆奉得尊意候、恐惶謹言、

寅十月十七日

五代才助

桂 右衛門様

侍史中へ

〔桂久春氏所蔵本にて校訂〕

二九六 梶原治人・野村靖之助ヨリ黒田嘉右衛門へ

書翰

尚々艦中之儀ハ、最早支度等相済セ居候事ニ候得ハ、御都合次第早々御来艦奉待候、已上、

昨日ハ空布懸御苦勞奉恐入候、今朝之天氣相都合穩カニモ有之候事ニ付テハ、兼テ御約定通り、崎陽へ向ケ

出帆仕候心得ニ御座候間、御用濟次第御來艦奉待候、
右申上候迄草々拜啓仕候、頓首、

十月廿日

梶原治人(信幹)

野村靖之助(篤)

黒田嘉右衛門様

侍史

二九七 田中顯輔ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

黒田嘉右衛門様

御密拆

田中顯輔(光顯)

一 翰拜啓仕候、其後益御壯健可被為成御滞在、奉拝賀
候、過日は誠ニ失敬而已打過奉恐縮候、翌日御旅宿江罷
出候処、已ニ御発足後ニて、遺憾此事ニ奉存候、扱木
戸ニも両三日前帰關ニ相成申候、則御伝声之次第申述
候処、来ル廿七日ニハ、山口迄是非とも帰り候筈ニ決定
仕候間、甚以遅々之至御堪難く奉存候得共、相成事ニ
候得は、夫迄御退屈ニ可被思召候得共、御滞留相成申
間敷哉、木戸より此段御願申上吳候様申事ニ候故申上

候、素より蒸氣船ニて小郡辺迄参り候事ニ付、決て間
違ハ不仕、廿七日ニハ山口へ相達候訳御座候間、此段
不惠様御聞込之程奉祈上候、其上委細御談合被為成度
奉存候、縷々奉期後喜之時候、匆々右計、頓首百拜、

十月廿三日

黒田大人

座下

健助

二九八 島津中将所勞上京御猶予願

諸藩衆議可被 聞召候間、速ニ致上京、決議之趣可有
奏聞旨被 仰出候趣畏奉存候、直様上京不仕候テハ、
不叶義ニ奉存候得共、此程ヨリ所勞、別テ難渋仕候ニ
付、甚奉恐入候得共、急速上京難仕、無拠此程之処御
断申上候間、被 聞召被下候様御執奏奉願候、以上、

十月廿八日

嶋津中将

二九九 道嶋家記鈔(小松・西郷上京)

一 寅十月十五日蒸氣船三邦丸出帆、此便ヨリ小松・西郷
上京、伊地知壯之丞ハ長崎、山内賢助ハ先日大坂へ被

差越候由、

但小松・西郷ハ先達テ一橋ノ用人モ差越、何分京都ノ機会ノ上、御上京モ可有之ヤト申事ニテ候、又ノ説ニハ西郷大目付ニ成候トモ、イツレ此節御三役ノ内ヨリ上京不致候テハ、不相叶御用向ニテ、西郷ヲ大目付ニナサレ可被遣筋ニ被致候得ハ、西郷御受不致候ニ付、無是非小松ヲ被遣候由、勿論海軍方一手ニ被遣候儀ハ、小松カミニストルトイフ場ニ当リ候由、左候得ハ海軍方ハ小松へ被召附候者共ニ相成、些士分相劣リ候哉ノ評判モ有之候、(賢) (志) (紙幣ノ通称)堅助ハ礼会所一件ナラント申事ニテ候、安田徹三モ又々差越候由、

三〇〇 徳川中納言殿参内事件

去十月十六日、徳川中納言様御参 (慶喜) 内相济候得共、此

一儀一旦御催ニテ、御延行ニ相成候儀、七藩 (薩州・因州・筑州)

(備前) 申合、薩州ヨリ山階宮様へ申込、御支ニ相成候 (寛保)

儀、仄ニ相考付、夫ヨリ原市之進山階宮様へ罷出、何

卒中納言殿御参 内ノ儀御取扱相願度、右ハ何方ニテ

モ家督相続仕候得共、主人ニ目見致シ、但頭杯有之向ハ頭立ニ目見致候儀、世間一体ノ礼節規則有之、中納言殿此度御相続ニ相成候テ、尤御忌明ニモ相成候儀、右御目見ノ為参 内被相願候儀ニ付、其辺宜相願度ト申上候処、此方取扱ノ儀ハ六ヶ敷、迷惑ノ旨仰ニ付、再三右等ノ辺ヲ以申上候得共、同様ノ儀故、左候ハ、右相続ニ付、参 内ノ儀ハ、御同意ニ有之候哉之旨、御問詰申上候処、決テ御不同意杯ト申訳ニテ無之、只取扱迷惑ノ旨御答ニ付、左候ハ、従是議奏衆へ可願立候間、何レ御沙汰モ可有之、其節ハ宜相願候旨申上置、直様柳原殿へ罷出、委細ノ次第御直談申上候所、以ノ外成儀ニ付、直ニ陽明様へ参、御談可申上旨ニテ、陽明様へ参殿有之、内府様へ委細御申上ノ所、内府様ニモ御不審ニ思召、直ニ大久保市藏ヲ被召、内府様御前ニテ、柳原殿ヨリ右七藩申合、相支候子細ニ御問詰有之候処、一言ノ御答モ不申上、実ニ恐入候趣、右ニ付七藩申合ノ次第、且心得方ノ辺、篤ト取調可申上旨被仰付、市藏退出、其後右等ノ御返答屹度申上候事モ無之、何方ヨリ御催ニ相成候哉、右十六日御参内相济候 (本) 事、「統再夢紀事参照」

慶應2年(1866)

〔表紙〕

忠義公史料

市來四郎編
慶應二年十一月

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事鞅掌史料」
(紙数五〇枚)の記載あり〕

目録

- 田中顯輔ヨリ黒田・東郷へ書翰
- 道島家記抄仏国行ノ一列
- 西郷吉之助ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰
- 道島家記抄
- 小松帯刀ヨリ桂右衛門へ板倉閣老ト問答之趣ヲ報ス
- 小松帯刀ヨリ桂右衛門へ書翰英仏艦渡来ノ事情
- 伊地知壯之丞ヨリ大久保一蔵へ書翰

小田村素太郎ヨリ黒田及渡邊へ書翰

南大一郎ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

兵庫辺風説

佛国博覧会出伺

英国船難民救助ヲ謝ス

鹿兒島物価道島家記抄

道島家記抄廢寺ノ概況

〔道島家記抄〕

道島家記抄仏国博覧

〔道島家記抄〕

寺島宗則傳抄

薩藩五代ヨリ請取商社示談箇条書近衛家所蔵

三〇一 田中顯輔ヨリ黒田・東郷へ書翰

中ノ關宮本屋御旅宿

田中顯輔(光顯)

黒田嘉右衛門様

東郷源四郎様

座下

過日ハ參叩万々奉感佩候、其後 兩君御壯寧可被為在、
 恐賀此事ニ奉存候、然ハ昨日歸艦否艦將其外ハ相談仕
 候処、実ハ粗私ヨリ御談モ申上置候通、当節折柄手入
 中ニテ、元来今夏英人ヨリ受取候砌、是ヨリ二月ヲ不
 待船底之修覆致不申テハ、忽チ腐壞ニ及可申ト、懇々
 申遣候^{道心}マ、引続戰鬪ニ相成、不得止今日迄因循打過候
 故、昨日少々礮打落シ相試候処、実ニ存外之腐リニテ、
 一同驚愕仕候次第ニ御座候、因テ今日淺キ洲へ引揚、
 六七日之間手入致申候ニ相決シ、過日ヨリ已ニ石炭等
 モ尽ク陸へ揚サセ、諸品等モ不殘片付候儀ニテ、誠ニ
 船中一同、唯々遺憾之余リ切齒罷在候事ニ御座候、サ
 レトモ当月十四五日頃ニハ、決然運用出来仕候ニ付、
 今七八日之処サへ隙ヲ入候得ハ、一同御供仕度ト渴望
 罷在候、其中海門丸^{前編}ノ御左右モ可有御座欵、何分木戸
 ノ決着之処モ承リ、早速御引合可申上奉存候故、唯今
 ヲリ船將同道ニテ山口へ罷越候間、明夕ハ罷歸リ可申、
 何卒夫迄御待被下度、左候得ハ先生之御去留、且木戸
 之行否之処モ判然相分リ申候事ニ付、私等ニ於テモ安
 心仕可申、其上暫時御見合モ相成事ニ候得ハ、無此上
 艦中一同御供仕度、偏ニ奉願上候、委曲ハ帰着之節、

拜面上ニテ可申上奉存候、再拜稽首、

十一月四日

顯輔^勅

黒田 兩君

東郷

座右

三〇二 道島家記抄 (佛国行ノ一列)

三〇二ノ一 (方平)

岩下佐次右衛門殿・岩下清之丞・澁谷彦助・養田新平
 杯、英國^{卷一公田}へ市立ニ差越筈ニテ、十一月二十二日方ヨリ
 英船迎ニ差越居候処、一昨日長崎ヨリ飛脚差越、英國
 へ戰爭起リ候故、此市立不出来候由、

但英國ニモ古政・新政ノ人氣ニ派ニ相立、新政ノ者
 共勢ヒ強ク、夫故戰爭相及ヒ候由、左候へハ何方
 モ同様成ハ、世界中ノ流行ニテ候半ト、大笑ヒイ
 タシ候、

十一月五日記ス

三〇二ノ二
 一二 盆入一石 百八十五貫文^{實十月二十四日}
 十一月末迄イタシ
 一同 一石^{百七十二貫五百文}
 越候テ申入候事^{十一月九日本買差}

寅十一月五日方ノ相場

右十一月六日記ス

共、右金ハ不持帰候ヨシ、

三〇三 西郷吉之助ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

御安康奉賀候、陳ハ明日ヨリ大坂江被差越、事情探索
方可被成御内定相成居、明朝表通可被仰付候間、其含
ニテ御仕廻置被下度、細事ハ明日可申上候付、為御心
得奉得御意候、頓首、

(慶応元年九)
十一月七日

黒田嘉右衛門様

西郷吉之助

三〇五 小松帯刀ヨリ桂右衛門へ板倉閣老ト問答

之趣ヲ報ス

板倉候ヨリ御逢被成度儀有之、今朝罷出候様トノ
事ニテ罷出、御達御答左ニ相記、

三〇四 道島家記抄
一前条御宝藏金ハ、何ノ為ニ出ルワケ候ヤト、中山氏、
白石八左衛門へ被尋候処、此節ノ金ハ長崎ニテ一々見
アシク被差出、来ル十五日方ニハ、持帰筈也ト為申由
被相晰候間、夫ハウソナラント大物笑ヒイタシ候、
十一月十一日記ス、
一右ニ付十一月四日方、伊地知壮之丞長崎ヨリ罷帰候得

御前江罷出候処、一通御挨拶相済候テ被仰聞候ハ、今
朝其方ヲ呼出候モ、余ノ儀ニ無之、大隅守様御上京ノ
義、御所勞ニテ御断ト申事ニテ、無御抛御訳合トハ乍
申、方今ノ形勢不容易場合ニ立至リ、偏ニ御頼万事御相
談被遊度、其上兼テ御懇意中ノ事ニモ候間、押テモ
御上京被成度、上様ニモ余程御心配ニテ、折角御待被
遊候間、病氣如何ノ事カ、其方迄一先承候様、御沙
汰ノ趣ヲ以被仰候付、御答ニ何共恐入次第二御座候、
此節上京ノ儀ニ付テハ、
朝廷ヨリ御召之命モ蒙リ、其上中納言様ヨリ、梅澤ヲ
以テ御懇意ニ被仰下候付、上京可仕筈ニ御座候得共、
兼テ持病之腰痛(患)ニテ、無抛御断申上候儀ニ御座候間、
涯々押テモ上京ト申儀ハ、逆モ相調不申段申上候処、

板倉公、夫ハ誠ニ込入候次第、トヲソ今一先押テモ御

上京ニ相成候様、其方ヨリ申上越道ハ有之間敷哉、

又何ソ當時勢御見込ノ事ハ無之哉ト御尋、

我左程迄、再三押テ御沙汰ノ義ニ御座候ハ、随分右

之趣ハ申越モ可仕候得共、御召ノ上ハ、如何ノ儀御

相談ト申御事ニ御座候哉、是迄度々御達ニ依リ上京

モ仕、趣意ノ程モ建言等仕候得共、一ツトシテ、御

為ニ相成サル事ニ可有之、建言イタシ候得ハ、却テ

不都合ニ相成、御益筋ニモ不相成事ト奉存候間、自

然押テモ御達ニ相成候ハ、御前方御見込ノ処、

中納言様思召ノ処モ細々相伺、筋ニ依テハ申越候

様、私江申含置申候間、詳細思召ノ処相伺、至当ノ

事ニ御座候ハ、随分申越候様可仕候間致承知度申

上候、

板成程尤千万、此節ハ是非幕府ノ失礼ヲ改正イタシ、

真ニ腹藏ヲ明シ、天下ノ公論ニ従ヒ、御所置モ被成

度、実ニ上様ニモ深く思召ニ相成居候間、其辺ノ処

ハ深く汲受候様イタシ度、

我成程御尤ニ奉存候、乍併御召ニ付テハ、ケ様ノト御

定見ノ御論ヲ、細々拜承不仕候テハ国元江申越兼候、

板其通ノ事ニモ可有之候間、右ノ形行 上様江申上候

様可致、左候ハ、御直ニ御見込ノ処モ、御達ニテモ

相成候ハ、形行申越候儀出来候カ、

我夫ハ随分御見込ノ模様ニ依テハ、申越候様可仕候、

板兵庫開港ノ儀如何相心得候哉、

我兵庫開港ノ儀ハ、既ニ昨年夷船渡来ノ節、三港

勅許強テ御申受、兵庫ノ義ハ鎖港ト申御請被仰上

候事ニ御座候故、多分其通之御事ト奉存居候処、西

洋人ヨリ承候得ハ、兵庫之儀ハ、千八百六拾八年第

一月一日ヨリ開港之条約ニ相成候段承、誠ニ当惑仕

候、其節モ諸藩之見込被聞召度トノ事ニテ、留主居

ヨリ建言ノ趣モ有之候処、御採用無之而已ナラス、

諸候建言ヲ御採用被下候テハ不相濟様、段々被仰上

候テ、終ニ三港 勅許ノ御運ニ相成、兵庫ノ儀ハ鎖

港ノ御受、只今ニ相成見込ヲ申上候様ト被仰候テ

モ、

上天子テサヘ御偽レ被成候事ニテ、中々諸藩之見込

ヲ申上候テモ、万々御用立不申儀ハ、判然タル事ト

奉存候、

板成程其通ノ事モ有之候半、以前ノ事ニハ段々其辺ノ

御失礼モ有之候間、此前ノ事ハ総テ打捨、此節ヨリ改テ諸藩ノ衆議、天下ノ公論ニ御従ヒ御所置被成度思召ニ候間、実ニ御改心之処ヲ厚汲受候様、ソノ昨年夷船参リ候節之建言ニテ如何之事ニ候哉、

我其節ハ開港

勅許ノ儀ハ、誠ニ不容易事ニ候間、諸侯被召衆議被聞召候テ、御評決相成度趣意ニ御座候、其節ハ右之御都合ニテ、又此節見込被聞召度趣、何トモ承知難仕候、

板成程其通ノ事ニハ候得共、其辺ノ処此節ハ十分公論ニ御従ヒ被成候間、追々見込ノ処ハ無腹藏申上候様、我左様思召ナラハ余程御念御入被遊度、誠ニ御大事ノ御場合ト奉存候、

板長州所置ノ儀、如何相心得候ヤ、我長州ノ儀ハ初メ犯闕之砌、尾張公御出陣參謀首級モ差出、謝罪ノ道相建候事ト奉存候、其後御再伐ノ御趣意旁更ニ相分不申、又是ヨリ御再伐之御賦ニ御座候哉、

板中々御再伐出来候事ニハ無之、段々諸侯建白モ有之候得共、一ツトシテ再伐申出候者モ無之、迎モ出来

候事ニ無之、イツレ其辺ノ処諸侯江御談シ、至当ノ御所置被遊度賦ニ候、

我左様ナラハ、イツ迄モ諸侯之来会ヲ御待被成候事ニ御座候哉、

板其通ニ候、

我左様ナラハ余程御長引可申、板先剋ヨリ咄候事共ニ付、帯刀見込之次第モ有之候ハ、書付自分覚迄ニ遣戻候ハ、上様江差上候様可致、左スレハ旁御悦ヒニ可相成、

我私見込ト申ハ更ニ無御座候、此迄度々大隅守ヨリ建白モ仕、其上御前方ニハ、御直ニ御聞通ニモ相成候通ノ趣意ヲ、私共ハ貫通仕候迄ニテ、外ニ見込更ニ無之、

板左様ナラハ如何被遊候テ 上様ノ深キ御趣意、諸藩ニ行渡候ヤ、我夫ハ真実御依頼ト申訳ナラハ、深ク其之御趣意可相分様有之度、

板夫ハ何ソ不相分儀有之候哉、

我左様ニ御座候、夫ナラハ申上候、梅澤遙ニ国元江御使者、御懇書御懇ノ御伝言被下候得共、只表通同前

之事ニ御座候、実ニ御依頼ト申訳ナラハ、何トモ無御腹藏御談シモ可有之処、左ノ儀モ無之、是ヲ以テモ御真意無疑トモ難申上候、

板成程左様ノ事モ有之候哉、先刻モ申候通、尚勘考イタシ、見込ノ処書付ニイタシ貫度、無腹藏申入候ヤウ、

我尚勘考可仕候、

先々右ノ大意ニ御座候、本文ヨリ外多々御座候得共、格別ノ事ニモ無之、要用迄申上候、余程切迫ノ模様余リノ事ニテ、無理ナ様ニハ御座候得共、此節ハ十分丈夫ニ仕掛不申候テハ不相濟御場合故、右通りノ御答申上候事ニ御座候間、御申上ノ儀共可然様御取計可被下候、以上、

霜月十二日

帯刀小松

右衛門様桂

三〇六 小松帯刀ヨリ桂右衛門へ書翰

(英・佛艦渡来ノ事情)

御兩殿様御機嫌能被為入候半ト、恐悅御儀御同慶奉存

候、貴兄御勇健被成御奉職候事ト珍重奉賀候、楮京着涯之形行ハ、卷一(新納)刑部殿便ヨリ一書被差上候通、山階宮初別紙之御人数蟄居閉門等被仰出、何共心外之次第ニ御座候、究テ會刃ノ尽力トモニテハ有之間敷哉、併隨ニ相分不申候、右ニ付テハ、諸藩ニテモ段々説モ御座候得共、例之模様見合之議論勝ニ御座候、諸侯之見込ハ被聞召度、建言之堂上方ハ閉門平仄之合又事ニ御座候、前文之模様故、御上京御断書被差出候上ハ、何モ周旋ハ打捨、此節海軍隊人数被残置、交代ト申場合ニテ、外ハ総テ引払ノ方、却テ可宜ト評決イタシ居候処、夷船攝海江呼寄相成段相分、又夷情モ難計、横濱出火等之条モ有之、旁不容易場合ニ可立到ト、再及吟味、人数引払ノ義モ、先見合ニイタシ候都合ニ御座候、然処既ニ英船一艘・佛船三艘・兵庫江碇泊イタシ候段、小豆屋ヨリ申越候付、決テ前文之都合ニテ、出掛之事ト相考申候処、佛船ハ横濱ノ様出船、英船ハ不日横濱ヨリ廻船可相成候間、夫迄ハ滯船之段申居候趣、只今小豆屋ヨリ申参候付、弥不遠参候事ハ無疑事ト相考申候、決テ此節ハ、ミニストル等ヨリモ、何トカ申出ニテ可有之、左候得ハ、兵庫開港旁大事件モ可相決時宜

ニモ可成立候間、是ヨリ又、何トカ形勢モ相変シ可申トノ見込ニ御座候、追々形行相分次第、早々申上候可致候、

一横濱表先月廿九日大火、夷館モ焼失イタシ候段相聞、其上、此節攝海廻船之条モ有之候付、出火見廻トシテ差遣候方旁可宜、併御国元御聞通ノ上、御見舞ト相成候得ハ、旁御六ヶ敷場合モ可有之候間、此方拙者共ヨリト申処ニテ、可然吟味ノ上、吉井幸輔去ル六日当地出立、出府取計申候、尤錦式反、見舞ノ驗迄ニ差贈申候、

一先日ヨリ板倉候御逢被成度候間、罷出候様度々申參候得共、暫クハ所勞ト申処ニテ、御断申上置候得共、度々之御催促、且夷船廻船之事モ有之、罷出候方可宜ト相考、今朝罷出候形行応接、別紙ヲ以テ申上候(采)〔別紙前号参照〕

一ニ條様・尹宮様ニハ別段相替候儀モ無之、二條公ハ先日御參 内ニ相成迄ニ有之由、尹宮様ハ未御參ハ無之由御座候、先日山階宮御蟄居被仰出候節ハ、尹宮ヨリ兼々申諭方不行届之趣、御断被仰上候由、誠ニウルサキ事ニ御座候、

一表通御問合モ申越候通、中将公御上京御催促之御書付、十月廿八日御達相成申候、此方御断書ハ当月二日伝奏江被差出申候、御断書延曳ノ訳ハ、此方ニモ尚吟味ノ上ト、兩三日延曳イタシ候事ニ御座候、又々御所勞御快候ハ、早々御上京有之候様之御達御座候、右通度々御催促ハ御座候得共、何分只今之処ニテ御出掛ニ相成候テ、可宜トノ見込ハ無御座候間、自然御返答御尋共御座候ハ、程能申出候様可致候、

右之形行、三邦丸ニテモ差返可申上筈御座候得共、不日夷船廻着ニモ相成候ハ、其節ノ形行早々申上候テ不叶場合モ可有之ト相考申候、サリ迎御届不申上候テハ、御待遠被 思召候半ト奉存候付、御留守居付役田中清之進江極々急キ飛脚申付、同人ニモ爰元ノ形行申含差立申候間、御聞取違

貴聞候儀共ハ、宜敷御取計ノ程奉頼候、早々以上、

霜月十二日

小松帯刀

桂 右衛門様

再白、寒氣甚敷御座候間、折角御自愛為国家奉折候、爰元ハ寒氣甚敷、十日計ハ雪降ツ、キニ御座候、昨日ヨリ今朝ハ大雪ニテ、中々難凌寒氣ニ御座候、御

地如何ト奉存候、乍末筆海軍所等之儀ハ、万端宜敷
御頼申上候、(志)安田金策彦条モ殊ノ外都合宜敷、(末)山内
ヨリ細々可申越ト致筆略候、何モ差急キ乱筆御免可
被下候、御同席中様江モ別段書状モ得不差上候間、
可然御伝声可被下候、早々以上、

三〇七 伊地知壯之丞ヨリ大久保一藏へ書翰

包紙

大久保君

御親展

伊地知拜

日々寒氣相増候得共、益御清穆御詰ニ候半、珍重奉存
候、随テ劣弟ニも無異罷在申候間、乍憚御休慮可被下
候、小大夫・西郷氏御上京後之形勢未相分不申、如何
様之向欵ト奉案事ニ御座候、当分比は何篇御高配之御
事ニ御座候半、折角御保養御尽力有之度奉存候、御注
文之品翔鳳丸上坂便より差上候間、御受取被下度、右
は手印迄と劣弟より致進上候間、左様御含可被下候、
銃薬は纒計之品ハ壳払不申、西郷君江致約束候銃薬七
百五十斤御取入相成、翔鳳丸便より差送候間、右之内
より御申請被成度、小子ニも明朝翔鳳丸より串木野迄

廻着、引取之賦ニ御座候、先は前文之一条且時氣御伺
迄、勿々如此御座候、恐惶頓首、

寅十一月十五日

伊地知壯之丞

大久保一藏様

玉梧下

(大久保利謙氏所藏本にて校出)

三〇八 小田村素太郎ヨリ黒田及ヒ渡邊へ書翰

(稱取素彦志、長州藩志)

小田村素太郎

黒田嘉右衛門様

渡邊昇様

冬晴打続、愈御清寧可被為入珍重奉存候、一昨日ハ御
会晤相願候所、何ノ御風情モ無之、却テ御氣之毒ニ奉
存候、然テ此程ハ弊藩手船モ当港迄差回可申由ニ相聞
へ、右便船ニテ博多迄御同船仕候得ハ宜哉ト、相考居
候得共、向地之儀ニ付少々都合有之、今日渡海仕候義
ニ相決申候、幾重ニモ陪行不得仕段ハ御残多奉存候、
自然御駈違ニ相成候ハ、格別ニ御暇乞モ不得仕事ニ
可相成、随分時令御加愛奉專祈候、以上、

十一月十六日

二白、渡邊君へ相願候、宮原兄へモ宜敷御伝声可被下候、以上、

素太郎

嘉右衛門様

昇様

楢石

三〇九 南大一郎ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

〔番号一五と同文により削除〕

三一〇 兵庫辺風説(悉ナ巷説)

兵庫表諸交易相始り候由、細川侯北風庄右衛門所持大土蔵御所望、廿四戸前御買上ケ、且兵庫浜手東西九十八間・南北廿間計御買上地所、同蔵屋敷出来候由、薩州ニモ同所浜手東西百六十間・南北廿間右地御買上ケ、蔵屋敷出来、土州土蔵廿八戸前御買上ケ、筑前ニモ浜手土地買上ケ、東西七十九間・南北十九間計御買上ケ相成候、右之通屋敷出来候事、
一去ル九月比、加賀米大船ニテ三艘計兵庫へ入津、同所

米相場少々下落ノ由、

一薩州様御手船

異船造泰原丸、

但シ式本柱長サ式拾間、米千石計積入、

乗込支配頭

小松外記

并侍・水主共凡三十人乗り

阿蘭陀人

上官二人、下官三人

右泰原丸今般長崎表出帆、当月十日比、二軒茶村沖合碇泊ノ処、浪士船ト相唱、表向ハ、薩州屋敷ニテ交易為致呉候、尚又神戸浦ニテ同様為致候様、右引合濟相成候故、前同断ニテ滞船罷在候、右之趣神邊ヨリ申越候事、
十一月廿一日夕刻走り

三一一 佛国博覧会出伺

佛国江展観場相開候付、国産品差渡申度、先達テ井上(正徳)河内守様江奉伺候処、可為伺之通、尤差送候品物目錄書差出候様、御付札ヲ以被仰渡候付、早速国許江申越

候、然処既二期限差掛候間、涯々御届不申上候テハ、

ハ何モ無之、密柑迄ニテ候ヨシ、

御不都合之廉有之、催促申遣候様承知仕候付、猶又催促申越置候得共、国許之儀無双之遠国ニテ、海上都合

三二三 鹿兒島物価（道島家記抄）

ニ依テハ、間ニ逢兼候儀モ難計、甚以懸念仕居申候、就テハ自由ケ間敷儀ニテ奉恐入候得共、御取調之御役

一米少々直下リニテ、当分式盃入一石百六十五貫文位、

方御渡海之段承知仕候付、於彼地御届申上候様可仕候間、何卒御聞置被下度奉願候、尤其内品物目錄相達候

一塩一釜、当分十六貫文ニテ候ヨシ、

ハ、早速御届可申上候、此段申上候、以上、

一餅白米四升

松平修理大夫内

小餅百三十五ニナル

十一月廿四日

柴山良助（道魁）

一 卷升ニ付三十三、六合（六斗）ニナル

餅白米卷升付

代錢卷貫四十八文

三二二 英国船難民救助ヲ謝ス

小餅一ツニ付、式十四文ニ当ル

寅十一月廿五日方、

右後年見合ノ為記置也、

英舟卷艘入津、是ハ当節差越、段々御馳走被仰付候テ、

御礼且当春比佐多冲（肝属郡）ニテ難破舟纒カ三人上リ、余ハ惣

テ沈溺イタシ、其御礼トシテ差越候由、晦日朝出帆、

三二四 道島家記抄（廢寺ノ概況）

互ニ祝砲打方有之候、

一（鹿兒島市）大乘院坊中竿入、寅十一月三日四日ニ有之、十一月下

但廿九日晚六ツ過、不時（朱）ニ新納家（刑部）へセキ込、四ツ時

旬方諸人申受被仰付、卷畦四十貫文ニテ候、

分迄相断ニテ罷帰候ヨシ、定テ暇乞ナラン、取持

但家ハ住持自分作リナル候へトモ、祠堂銀并家共ニ

御取揚ノ由、

一二王ハ往古加治木〔船員部〕ヨリ御取寄相成、高三十石被召付置

候ニ付、殊ノ外錢持ニテ候ヘトモ、是以御取毀ニ相成、

高并錢共ニ御取揚、此節ハ加治木ノ岩屋ノ觀音トイフ

アリ、夫ニ被直候ヨシ、二王堂ヲクツシ候時ハ、段々

不思議モ有之風説ニ候得共、慥成儀不聞候間、追テ記

スベキ事、

三二五 〔道島家記抄〕

一寅十一月七日晩蒸氣船一艘入津、伊地知壯之丞・書役

白石八左衛門長崎ヨリ罷帰候、右ハ御宝蔵ヨリ金八万

兩余、当金ニ直シテ凡八万何千兩余ニ相成候ヲ取出、

十日五ツ時分出帆ニテ、長崎ヘ持越候事、

但先キ達テガラ〔Chart〕ハヨリ金三十万兩位借金ニテ、十

七万兩位ハ返弁不相成候テ不叶儀有之候処、此節

モ凡当金ニ直シテ七万兩位取出シ、大坂ニ持越、

大坂ヨリ十萬兩借入候得ハ、都合十七万兩位相成

ル算面ニテ、上坂イタシ候処、其後長崎ヘ不立寄、

直様罷下候付、決テ金都合モ不出来ヤト、皆々評

判イタシ候処、先達テ出崎イタシ、此節俄ニ蒸氣

舟ヨリ帰來候付、決テ其借金返弁ナラント噂イタ

シ候、

但又ノ説ニハ、夷人過分ニ線綿積送り候由、夫ヲ取

入ノ為ナランカトモ噂イタシ候得共、這災ノ為大

切ナル御上京藏金ヲ取出訳ハ無之ト、噺共吟味致

候、

三二六 道島家記抄 (佛國博覽)

寅十一月八日英船一艘入津、〔本「仏國ノ勝」〕是ハ英國市立ノ品々積送

リノ舟ニテ候、岩下佐次右衛門殿・市來六左衛門・岩

下清之丞・帖佐彦助・蓼田新兵衛、外ニ大工人數其外

町人三人差越候由、九日夜四ツ時分出帆イタシ候事、

三二七 道島家記抄

三一七ノ一

一寅十一月中旬方ヨリ、〔鹿兒島市〕磯龍洞院ノ跡ニ蘭館出来、当分

差越候夷人共ヨリ殊ノ外催促イタシ候由、千眼寺ノ本

堂可引直相成候由、凡式百枚數トノ評判ニ有之候、

但夷人三人、一人ハ礮ノ機械方〔采〕「集成館大小砲製造」・一人ハ開成所〔采〕「文字教師」・一人ハ白砂糖方トヤラ、木綿機械出来一日二十二本〔采〕「五凡大貫急」

計、打方ヨリ引方迄出来イタス機械ノヨシ、此夷人申ニハ、本ハ我カ国ト手ノウラ替シニテ候得ト

モ、当分ハ殊ノ外親ミ深ク、手ノハラヲ打合タル

様ニ候間、薩州ハ金カナク候付、木綿ヲ織儀テ、

兩三年ニハ過分ノ金ヲ取入テ差上ルトノ段、折々

申事ニテ候ヨシ、夫ヲ人々感心イタシ候モノモ有之、大ナル惑ヒナルヘシ、

三二七ノ二是より先き、薩藩大山格之介〔綱良〕、当時太宰府に出張し居

たり。長州と小倉との間を調停せんとして、黒田嘉右衛門

が山口に赴くを、時として其事を謀らしめ、小倉へも其

趣を告て、暫く戦争を見合はざるべしと申趣せしかとも、〔越カ〕

長州勢の斥候小倉勢の壘壁に迫りて、戦を挑みしかば、

小倉勢の斥候よりも発砲して、数人の敵兵を殺傷せしめ

たり、長州にては此事違勅なりとて兵を進め、十月の初

より再び戦を開きける、此時幕府は藝・石両道の兵を解

きたれば、此方面の兵も小倉に向ひ来り、鋭氣益々盛ん

にして当り難く、十月三日の戦に、島村が守れる蒲生〔北九州也〕・

〔同上〕徳力の二ヶ村をも乗取られければ、小倉勢は退きて金邊〔郡〕

峠と浦河内を守りたる所へ、同き十日肥後藩士秋山義右

衛門・薩州藩士三雲東一郎の兩人、呼野驛〔福岡県〕に來りて、和

議を謀りたり、長州にて金邊峠狸山の守備を解かば、和

睦すべしとの事なりしかば、小倉は其申条に従ひて兵を

退けたるに、長州勢は直に二ヶ所の要害を扼し、益々田

川・京都の二郡に迫り來りて、豊千代丸殿を質とせば、

和睦すべしと申入れたり、小倉は驚き且つ怒り、其違約

を責れども更に聞入れず、小笠原近江守〔貞正〕をも人質に出す

べしといふ、小倉にては斯る事は仮令尽く封土を失ふと

も、従ふこと能はずといへる議には、何れも一致したれ

ども、其進退に付議論二つに分れ、一は敗軍の後、金邊

峠狸山の要害をも失ひたる上は、一藩を挙て戦ふとも、

新勝の大敵に当り難し、寧ろ此地を棄てて、豊後に入り、

日田〔采分郡〕の幕領を請て、我が領地と為すべしといふ、一は君

辱めらるゝ時は、臣死すといへり、一日宗社を存すれば、

臣子一日の責を尽すべし、徒らに君父の地を棄てて、他

邦に赴くが如き事は、得こそ為すまじとて、死士を募り

て快く一戦せんと勇みたり、老臣輩は何は扱置き、先づ

老幼婦女を肥後に移し、然る上にて事を決すべしとて、

直に令を發して途に上らしめ、夫より議を定めて、和議遂に成るべからざれば、一同此地を去て、貴藩の為す所に任すべしと、長州へ申入れたり、壯士輩は斯る事々あるべき、此上は老臣の命を待たずして、一死を以て国家の恢復を図るべしとて、同志相集りて隊伍を編製（成）し、打て出んと誓めきたり、長州にては小倉の申入を聞き、又壯士輩が決心の状を見て、顧る所やありけん、小倉へ申入れけるは、貴藩の決議は意外の事に存し候へ、前日質を要したるは、貴藩に疑を置きたるが故なり、今は其疑も解けたれば復た質を要し申すまじ、唯だ企救の一郡は、我が国情の天朝及び幕府に貫徹するまで、仮に預け置かるべし、是をさへ承知あらば、和睦すべしとの事なりしかば、小倉にても左らばとて、使者を長州の陣に遣し、五ヶ条の約を結びて和議を為したるは、慶應三年丁卯正月廿二日の事なりき、其五ヶ条の第一は、若し再征の挙あらば、諫を天朝・幕府に進むべし、第二は、幕府若くは諸藩より戎馬啓行の挙あらば、速に通報すべし、第三は、天朝の命を以て戎馬を管内へ進められ、辞し難きの事情ある時には、其期に臨みて協議すべし、第四は、企救一郡は、長州の国情天朝・幕府に貫徹するの日まで、

姑くこれを托すべし、第五に、砲台陣營等を建築せんとする時は、期に臨みて協議すべし、但し地を選び藩士の家屋を建築するは、此限に在らずとの条々なりしとは聞えし、

三七七 扱又幕府は、諸侯の衆議に依て、長防の所置を定めんとて、尾州・加州・薩州を始め、衆諸侯を召したれども、

出京せざるもの多くして、未だ其評決に至らざる中に

（此頃岩倉殿が同志の公卿に謀りて、廟堂に於て一大議論を起されたる事あり、事は第二に岩倉殿の事を題する記事の中に詳かなり）、主上御不承の趣に聞へさせ玉へり、初は御吹出ものとも承はりたるに、十五日に至りて愈々御庖瘡との御事にて、日を経るに従て益々重らせ玉ひ、遂に十二月廿五日を以て崩御あらせ玉ひぬ、天下の歎き、万民の悲み、実に此事にて候ひき、依て長州の事も御困喪の爲めに、解兵の御沙汰に及ばせられたり、斯て慶應二年は、此の愁傷の間に暮れ行きて、明くれば慶應三年丁卯正月九日に、今上御踐祚あらせ玉ひ、同き廿七日に先帝を後月輪の東陵に葬り奉り、孝明天皇と諡し奉りぬ、

三七四
同き廿二日を以て、連署して左の書面を幕府に出された
り、

天下の大政は公明正大の至理を尽し、時世に適當し、
内外緩急の弁を明かに御施行無之候ては、相叶ひ難き
儀は勿論に御座候、全体不可救の今日に至る根由を推
窮仕り候へば、憚ながら幕府年来の御失体より釀出し
候内にも、殊に防・長再征の御一件より物議沸騰して、
天下離叛の姿に相及び候次第に御座候、依之明白至当
の筋を以て、防・長御所置急務たるべき段談合の上、
屢々建言仕度儀にて、篤と退考仕度候所、自ら兵庫開
港と防・長事件は、大に寛急先後の順序有之、大区別
を以て、曲直当否の御実跡顯はるゝと、顯はれざると
に相拘はる事に付、虚心を以て御反察あらせらるゝ様
奉願候、二件朝廷へ奏せらるゝ旨拝承仕候へども、皇
国の御安危にも關係仕候に付、是非至公至大の道を以
て、私権を抜かせられ、治久の大策あらせられ候様有
之度、重大の事柄黙止がたく、再考の趣言上仕候、
同き廿三日將軍家参内ある、大隅守殿にも大蔵大輔殿、
伊豫守殿と共に、参内あるべき旨の御沙汰ありしかども、
大隅守殿には病氣の旨を以て辞せられ、大蔵大輔殿・伊

豫守殿には参内あつて、徹夜の御評議に及び、翌日の晚
景に退出せられたり、右の御評議にて、防・長の所置及
び兵庫開港の事も定まりしと見えて、翌廿四日には左の
御沙汰をぞ下されける、

一長・防の儀、昨年上京の諸藩当年上京の四藩等、各
々寛大の所置御沙汰あるべき旨を言上し、大樹も寛
大の所置言上有之、朝廷にも同様に思召され候、寛
大の所置取計事、

一兵庫開港の事、元来容易ならず、先帝止め置かせら
れ候へども、大樹も余儀なき時世言上し、諸藩建言
の趣も有之、当節上京の四藩も同様申上候間、誠に
止を得させられず、御差許に相成候事、

然るに兵庫開港の事たる、元より此の四藩に於て同意を
表したりといふに非ざれば、何れも連名にて同き廿六日
に、左の建白をば朝廷に差出されたり、

兵庫開港・防長御所置の二件は、当時容易ならざる御
大事と奉存候、全体幕府は防・長再討の妄挙に、無名
の師を起し、兵威を以て庄倒いたすべき積心に候処、
全く奏聞に至らずして、天下の騒乱を引出し候次第ゆ
へ、各藩の人心離叛して、物議も相起り候時宜に御座

候、就ては即今国是を立てさせられ候急務は、公明至大の御所置を以て、天下に臨ませられず候ては、一円治り相付かず候間、防・長の儀は、大膳父子の官位を旧に復し、平常の御沙汰相成り、幕府反正の実跡相立候儀、第一と相心得申候間、判然明白実跡相頭れ候上、天下の人心も始めて安堵可仕候へば、第二兵庫開港も、相当の御所置順序を得可申と、兼て勘考仕り候、先般御下問を蒙り候へども、一同勅問に对答不仕内、前文二件順序区別を以て、幕府へ屢々申出置候、然る処一昨廿四日、防・長の儀は寛大の御所置可取計、兵庫開港の儀は、当節上京の四藩も同様申上候間、誠に止を得させられず御差許に相成候云々、御沙汰の御書付拝見仕り、実以て意外の次第、驚愕に堪へざる仕合に御座候、朝廷より御沙汰の儀容易に申上げ奉るべき筋に無之、恐懼の至に奉存候へども、皇国重大の事件事実相違の儀、黙止罷在候場合に無御座候間、不得止一応奉伺候、以上、

朝廷よりは此何に對して、兩件銘々の見込、遅速の異同は有之候へども、大樹并に大蔵大輔・伊豫守等参内の上、寛開の帰着は同様に付、御取捨の上仰出され候、尤も其

節の模様は委細大蔵大輔・伊豫守にも承知に有之べく、併し不参の面々は、大樹へ承合すべく候事と仰出されたり、蓋し去る廿三日参内の御評議にて、越前・宇和島の兩候には、遅速前後の異同はあれども、長州は寛大に所置すべし、兵庫は拠なく開港すべしと、所謂寛開の説に帰着したるもの歟、然れども此事は、大隅守殿初より兩件を一時に定むる事に同意なき上に、伊豫守殿も全く同説にては無かりしと見へて、八月六日に至り、連名の書面を捧げて、押返して朝廷に伺ひ奉られたりしかども、何たる仰出されもなく、兵庫開港は全く御差許とは相成りたり、斯る事情なれば、此際の在京其詮なしと思はれけん、何れも引続きて帰国せられたり、此時実は薩・長両藩の間に、討幕の密議あつて、藝州をも同意せしめ、共に兵を合せて大坂に押上り、幕府の罪を問ふべしと決して、安危の勢ひ既に眼前に迫りければ、容堂殿は天下の爲にも幕府の爲にも、大變の時勢なりと憂慮ありて、楮こそ政權返上の議を上られしなりと知らる、將軍家には此の建白に對して、初めには利害如何と惑はせ玉ひしと、板倉伊賀守殿(勝舟)より松平大蔵大輔殿に問合はされし、書面の如くなりと雖ども(上卷の初に見ゆ)、所詮幕府の

政權を維持すべきの時に非ざるを悟りて、今は朝廷に返し奉るべしと決し玉ひ、十月十三日を以て、政權返上の案文を示さんとて、列藩の重役を二條の御城へ召させられたり、其藩々は、加州・薩州・仙臺・尾州・紀州・肥後・筑前・藝州・肥前・因州・備前・津・越前・阿州・土佐・久留米・秋田・南部・彦根・米澤・雲州・郡山・姫路・松山・柳川・福山・二本松・中津・津山・宇和島・津軽・大垣・松代・新發田等四十藩の重強にて、何れも打揃へたる処へ、御老中より左の書面を添へ、政權返上の奏案を示されたり（其奏案は、上巻の初に掲げたる奏聞書と同様なれば略す）

今般上意の趣は、当今宇内の形勢を御洞察遊はされ候所、外国交通の道盛に開るに至り、御政權二途に相分れ候ては、皇国の御綱紀相立ち難きに付、永久の治安を謀らせられ候遠大の御深慮より被仰出儀にて、誠に以て奉感佩候、殊に従前の御過失を御一身に御引受け、御薄徳を表させられ、御政權を朝廷へ御政權遊ばされ候御文言等、臣子の身分より奉伺候へば、何共以て奉恐入、涕泣の至に候、就ては此上益々以、御武備充実相成不申候ては、決して相成らざる儀に付、各々に於

て聊か気弛これなく、前文御趣意相貫き、御武備相張り候様、一層奮発忠勤、精々申合はさるべく候、

とは達せられたり、偕此の御沙汰に至れるまでには、幕府にも種々の議論ありしなるべしと雖ども、微細の事は知らず、土州藩福岡藤次（今の枢密院顧問官福岡孝悌君）は、十一月九日の夜、松平大蔵大輔殿の邸に參て申しけるは、最初彼の政權返上の建白を、板倉伊賀守殿に捧げたるに、其趣意は至極尤なれども、重大の事件なれば急に御採用との御決議は、六つかしかるべしとの事に候ひき、因て尚追て伺ひたるに、御採用にも相成るべき模様ながら、曖昧にて判然せざる中に、俄に諸藩士を召され、政權返上の奏案を示させらるゝ事となりたるには、土州にても一驚を喫したりといひしといふに拠れば、將軍家が政權返上の事に御決定あらせたるは、極めて急速の事なりと知らる、左るにても朝廷には是程の大事を決せらるゝに、時日をも移し玉はずして御聞届あらせたるは如何と尋ぬれば、全く小松帯刀・後藤象次郎・福岡藤次等の尽力にて、斯くは速に御決定あらせたる者なり、當時の事を聞くに、將軍家には既に政權返上の事に御決定あつて、諸藩士に其奏案を示させらるゝに付ては、先以て重立ちた

る者共に、御直問あるべしとの事なりければ、小松・後藤・福岡の諸士は、十二月十二日に一同拜謁を願ひ、言上に及びけるは、政權御返上の儀は、無比の御盛拳に候へば、片時も早く朝野に貫徹せしめ玉ふべし、明日は早々御参内あつて、御奏聞あらせらるゝ様に願はしけれ、就ては是に先だちて諸藩士の建議をも聞召され、共に御奏聞あらせられなば、猶更の御事なるべしと申上たるに、將軍家には、奏聞は奏聞なり、下問は下問にて別段の事なり、早速参内の事も承知なれども、明後日ならでは叶はずと仰せらる、一同は併し尚ほ一刻も早く御実行あらせられたしと、言上したりければ、明後日には必ず実行すべし、此段は安心せよと仰せられたり、諸士は猶又板倉殿に面謁を請ひて、同様の事を申立て、押て明日御参内ありたき旨を迫りたるに、板倉殿申されけるは、明日の御参内とは難事なり、其故は御参内あるには、御所への御同等の手続を為さずしては相叶はず、殊に此度の事は朝廷には御聞怖なされて、容易すく御決定あるべしとも思はれざれば、明日は措置き、明後日にも覚束なし、既に先頃兵庫開港の義を御奏聞ありしさへ、幕府より強請せしとの世評もありし様の次第なり、別て此度の事は、

御身上にも係はる御義なれば、朝廷に迫らせらるゝ様にては尚更に相濟ず、旁以て急速の御所置は宜しからずと申さる、然らば先撰政殿下の御手元を、銘々共より内調仕るべくもやと伺ひたるに、然るべしとも決せられず、再三の応接にて、漸く明後日に御参内あるべしと定まりたり、其後永井玄蕃頭簡志より撰政殿下へは、方々の処にて宜く周旋あるべしとの内意ありければ、小松以下の諸士は二條殿へ参りて、將軍家並板倉殿へ申上げたる事ども委細に演述の上、朝廷に於せられても、断然御決議あらせられたき旨を言上及びたるに、容易に御許容なかりしかども、今般の事は実に一大機会にて、天下安危の經界なり、犯上の罪は一同に於て引受け申すべきに付、何卒速に將軍家の御奏聞を御聞届あつて、政權を朝廷に収めさせ玉ふべしとて、大乱既に眼前に在るの状を述て迫り奉りければ、撰政殿も漸く御納得あらせられたりといへり、其翌十三日、將軍家には前に記せし如く、諸藩士を召して政權返上の奏案を示させ、翌十四日に参内あつて奏聞に及ばせたるに、既に小松以下の諸士が内調を為せし後なりしかば、朝議速に御聞届あるべきに決して、翌十五日奏聞の通り聞召れたり、偕こそ數百年間、武家の

手に渡りたる政權一朝王室に歸したるなれ、抑も外交既に開けたる上は、政權は宜く一途に出でざるべからず、彼の実權は幕府に在るを以て、朝廷も廟議の如くに事を行はせ玉ふこと能はず、幕府も亦朝廷の為に牽制を受けて、幕議の俤に行ひ得ざる様の事にては、所詮一定の国是を立て、外國に相對すること能はざるに付、京都は幕府に内外の政を委ねて、干涉し玉はざるとか、幕府は政權を朝廷に返上して、諸侯の列に就くとか、何れにも政權を一途に歸せしむるの政体たらしめざるべからず、然るに日本の国体に取ても、外交以後の実勢に照しても、王政復古に歸せざれば、日本の統一を得へからざること明かなれば、大久保越中守(忠寛)(故元老院議員大久保一翁君)の如きは、大原殿が東下の時に於て、既に此説を為したりといへり、若し此場合に其事を決行したらんには、實に一世を震蕩する所置ともいふべかりしなれども、之を當時に行ひ得ざりしは是非なし、其後朝廷より頻に攘夷を責めさせたる時には、最早此に出るの外あらざるの場合なりしに、幕府にては一人として此に思ひ至る者なく、攘夷の行はれざるを知らながら、枉て其御請を為して、一日に姑息するといふが如き次第にてありたれば、一層困

難の地位に陥りたり、此の如く都て其時機を失ひ来たりたりと雖も、責ては此の年春、兵庫開港の事を議せし時に、政權返上と決したらんには、尚ほ機会に後れざるの処置にもありしなるべきに、此の場合にも一向に其意なかりしを以て、遂に諸侯に迫られて、已を得ざるにこれを行ふ事とはなれり、是と申すも外交以後、天下多事の世となりては、門閥政治にては、復た天下を制すること能はざるの時勢にてありたるに、幕府は依然たる門閥政治にて、人材事を用ふるの政府たらしむること能はず、これに反して薩州・長州の如きは、人材に由て事を為したるを以て、幕府は薩・長を制すること能はず、薩・長は幕府を制して、詰る所は政權を保つこと能はざるに至らしめしものともいふべき歎、

三一八 寺嶋宗則傳抄

慶應二年丙寅 齡卅五

薩ノ生徒村橋直衛及附屬ノ英人ホームノ弟、及他ノ一英人宗則ト四人ニテ、三月二十三日龍動ヲ発シ、(ロンドン)巴里ヲ経、マルセールヨリ三月二十八日發船、上海ニ至リ、

英人等ニ別レ、英ノ帆船ニ塔シテ帰航シ、長崎ニ入ラスシテ、五月二十四日薩領阿久根ヨリ上陸セリ、航路ノ日数五十五日ナリ、蓋シ幕命ヲ得タル官員ノ外ハ、外国ニ出ルヲ禁スルノ制ナルヲ以テ、去年発船ノ時モ薩領ヨリ秘ニ拔碇シ、今回モ長崎ニ入サルナリ、該船ニ陸奥宗光及薩人林多助在リ、何故乗船スト問ヘハ、帆船ノ使用ヲ学ハンカ為ナリト、阿久根海岸ニテ陸奥ニ別レ、林モ上陸シ三名帰鹿ス、阿久根市街ニ一泊ノ夜、白濱貫禮俗称勘兵衛ノ家ニ至リ、酒ヲ酌ム、勘兵衛ハ本ト鼎輔、次ニ六郎ト称ス、義母及宗貫ノ兄勸之丞ノ長男也、幼ヨリ先考宗保君長崎ニ在ル時ヨリ客遊シ、読書及医業ヲ学ヒ、先考鹿城ニ移ルノ後モ入塾セリ、余ヨリ十歳多シ、余幼ニシテ字ヲ知ラサル時ヨリ其訓育ヲ受タリ、且余初テ鹿城ヲ去テ江戸ニ遊学スル時モ、城外迄送レリ、此人世才アリ、書風磊落ニシテ、田舎間ノ有力者ト称セラレ、且鹿城ノ士ニ知己多ク、勤王周旋ニ用ヒラレ、明治ノ初松方正義ニ従ヒ大分県ノ参事ト為リ、後廣島県ノ参事ニ転シ、明治八九年ノ間同所ニテ卒ス、

鹿城下町林多助ノ家二十日泊スルノ後、鹿城ノ上ナル

坊中ニ一寺院アリ、官ヨリ之ヲ借りテ棲ム、余帰航中〔采〕〔福藏院〕作ル所ノ建議アリ、草シテ小松帯刀ニ出ス、其略ニ云フ、今吾国ノ諸藩戮力以テ政事ヲ議シ、相合シテ外国ニ対セサル可ラス、仮令ハ一片ノ材ハ折り易キモ、多ク之ヲ合スレハ、折り易カラサルカ如シ、故ニ諸藩ノ人物ヲ集テ国会ヲ開キ、其同論ノ多数ニ従ヒ、之ヲ以テ我国行政ノ方向トナスヲ、輿国第一ノ美事トナス云々、

余カ帰鹿ヨリ不日ニシテ、英公使其艦ニテ鹿海ニ来ルノ報アリ、宗則及数名ノ官吏饗応ノ準備員タリ、〔采〕〔倉屋ノ巻〕数寄屋ト称スル官邸ニ日勤ス、英艦滞泊七日接待甚厚シ、是レ薩人英ニ勤王ノ与カヲ求ムルカ為ナリ、既ニ上ニ記スルカ如ク、英ノ外務大臣カラレントンヨリ公使パークスニ達セル指令ハ、余カ帰鹿以前ニ到レルナラン、余江戸ヨリ家族ヲ卒ヒ帰ルヘシト命セラレ、七月十日汽船鹿城ヲ発シ、七月二十九日江戸高輪薩邸家族ノ所ニ在ニ達ス、此行ハ江戸ニ至リ、英公使ニ勤王ノ助力ヲ勸ムヘキ公命ヲ啣ミタレハ、松木ナル本姓ヲ唱フルハ、従来幕府ニ奉職セシ所ノ者ナルノ聞アルヲ以テ、之ヲ避ンカ為、発鹿前ニ寺島陶藏ト改名センコトヲ請テ許

可セラレタリ、英公使入鹿ノ時、小松帶刀ヨリ一藩士ヲ江戸ニ送ルコトアルヘント云ヒシニ、公使パークス一名刺ヲ送り、之ヲ携へ來ル者ニ見ヘント云ヘリ、宗則該名刺ヲ得テ、江戸及横濱ニテ數回パークスト面談ス、同氏ノ余ヲ遇スル幕吏ニ越ヘタル者ハ、外國奉行等來リテ面晤ヲ乞ヘトモ、之ヲ久シク待タシメタルコトアリ、或時余談終リ歸ラントスルニ、柴田日向守(附申)ニ逢ヘリ、此人ハ歐行使節ノ組頭ニテ、余ト同行シ、後ニ外國奉行ニ昇レリ、余頓首一語ヲ通シテ氣ノ毒ニ思ヘリ、

冬妻及女子・曾庸輔外ニ二僕ヲ率ヒ、十月十九日江戸ヲ發シ、陸路ニテ十一月三日京師ニ至リ、四日滞在、小松帶刀ノ指揮ニ從ヒ大坂ニ至リ、藩ノ別邸ニ一室ヲ得テ之ニ居リ、同氏ノ命スル所ヲ待ツ、

三一九 薩藩五代ヨリ請取商社示談箇条書

(近衛家所藏)

一商社盟誓之儀は、御互之國名を不顯、商家之名号相唱

可申事、

(下方に貼紙あり)

一同社中之印鑑は、互ニ取替置可申事、

一商社組合之上は、互ニ出入帳を以公明之算を顯し、損益は半折すへき事、

一荷方船三四艘相備、薩船之名号にして、国旗相立置可申事、

一馬關通船之儀は、何品を不論上下共ニ可成差止め、譬へ不差通候て不叶船と云へとも、改不相濟趣を以可成引止置候儀、此商社之最緊要たる眼目ニ候事、

一馬關通船相開候節は、日數式拾五日前、同社中江通信之事、

(貼紙)

本文ニ付、長防國産此内より相屯居候品々、此趣向を以売捌候付ては、兵庫・堺両所之内江薩州國産売弘所と相唱、弁利宜場所相拵、相應之銀主相頼、差掛金銀融通いたし候様仕度、左候て此節帰帆掛所置振談決之上は、本文取組之次第御國許より表向御引合置被下候様、桂・高杉等願候事、

右之通於馬關談判仕、所置振之儀は、帰帆之節於三田尻取極候筈御座候、尤此節之運送は、馬關之要港相鎖候儀故、おのつから上下之物価、格別相異候儀は勿論ニて、其機ニ乘し候得は、何事も如意相仲可申相考申

慶応2年(1866)

候事、

此紙首二

寅十一月於馬關相對候事ト、廣澤兵助ガ筆跡

有之、

〔島津忠承氏所藏本にて校訂〕

〔表紙〕

忠義公史料

市來四郎編

慶應二年十二月

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事執筆史料」の記載あり
(紙数四四枚)〕

目録

- 折田要蔵ヨリ大久保一蔵へ書翰
- 横村半九郎ヨリ水本保太郎へ書翰
- 佐々木寛蔵ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰
- 安田徹蔵建言楮幣発行
- 奈良原幸五郎ヨリ小松帯刀へ書翰京都風説
- 梅澤孫太郎小松帯刀へ面談セムトス
- 世良修蔵ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

伊地知壯之丞ヨリ大久保一蔵へ書翰

〔伊地知壯之丞ヨリ大久保利通へ書翰〕

〔大久保利通ヨリ伊地知壯之丞へ書翰〕

道島家記抄廢寺ノ變動概略

道島家記抄道路ノ説

別府壯右衛門奥掛書役へ照會長州戦況

岩下佐次右衛門ヨリ大久保一蔵へ書翰

蒸気船及軍艦乘廻リ云々ノ届書案

五藩連署五卿ノ帰洛請願書

道嶋家記抄

木場傳内ヨリ西郷・大久保へ書翰

小松帯刀同僚中へ照会書猩々緋内献ノ次第

村山下総報告主上崩御ノ詳報

小松帯刀ヨリ桂久武へ書翰

主上崩御藩内布告

酒井十之丞ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

准后立后御期年布告

桂小五郎来麿

寺院廢合掛ヲ命ス

言路洞開ノ布達

三三〇 折田要蔵ヨリ大久保一蔵へ書翰

尚々奉申上候、当時ハ雨漏塞きの勤場(本)ニテ、日雇人足之頭と罷成、寸暇無御座、始終御無沙汰至極ニ奉存申候、何卒御寛免被下置度奉願上候、

一筆啓上仕候、先以甚寒之砌ニ御座候処、弥以御機嫌能被遊御座恐悦至極奉存候、随て私ニも其後無異皆勤罷在申候間、乍憚御放念被下置度奉願上候、然は今般(本)岩下大監察御帰府ニテ、凡其御地之形勢も奉拜聴、まつ御無異之由、大幸之至とハ奉存候得共、何共黒白之分り難き世態、此末如何成行可申御見留ニ御座候哉、嘸旁御配慮之程、乍恐奉推察申候、將又今般桂大夫又々御上京、皆様御揃ニテ御在国不被為在、愚存ニテハ一向落着も難仕、扱又幕殿滞在永々之事ニテ、此以後定て墓々敷所行も有御座間敷、小笠原と申ても、内実は名高之骨高先生ニテ、一旦は書生も仕居候間、下情ニ通候様ニは候得共、断然タル意表之大策を建、四海之御復運を仰く英明之人物ニは決て無御座候間、差当て彼れ之機嫌を伺、尊恭位之権変術数ヲ用置候て、

可然事ニ奉存候、却て関東板倉こそ遙ニ増しと奉存候、何分関東ニ能御手を被入置度事ニ奉存候、京攝間之事件、一往は

朝廷旁之御不都も到来可仕候得共、是は一橋輩之党・會・熊・尹宮なと嫉妬之附ケ葉ニテ、衰世之習不遠して快晴仕、左迄可驚事ニも無御座哉ニ奉存候、何分會・熊なとへ御叮嚀御入懇過候てハ、猫之性を備候慧黠輩、急度頭勝ニ罷成可申候間、時々必死と赤面スル程御談破被為在度、夫ニても、彼等は恥とも不存風彩ニ御座候、先年来會・熊共ニ多人数同僚勉学仕、篤と情態も存し罷在申候、実ニ調儀之可恐もの共ニ御座候、左候て長州再討之出軍先陣之惣督も、追々御繰出之御様子、是又嘸と奉存申候、定て藝州嚴島見物位ニテ、意氣揚々として勝タル心持ニテ、凱陣ニ可能成奉存候、何分御左右追々承知奉度、右は寒中御機嫌伺旁如斯御座候、恐惶謹言、

折田要蔵(年秀)

十二月二日

大久保一蔵様

御侍衆

二白、奉申上候、寒氣中折角御厭御周旋被遊度、奉
禱上候、已上、

〔大久保利謙氏所藏本にて校訂〕

三二 榎村半九郎ヨリ水本保太郎へ書翰

貴翰拝見仕候、

修理大夫様ヨリ旧寡君江御使者、伊地知壯之丞殿御勤
ニ付、何某御取次可仕哉之旨、承知仕候、住処旁左ニ
申上候、

木屋町三番路地

野村右仲

木屋町三番路地之
南隣り路地

八木隼雄

右兩人間ニテ可然欵ト奉存候、明日之御勤ニモ相成候
ハ、帰寓之上向々江通達仕、御不都合無之様、御引
請為仕可申候、以上、

十二月二日

水本保太郎様

〔正直、長州藩士〕
榎村半九郎

奉復

三三 佐々木寛蔵ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

一輪啓上仕候、向寒之節御座候処、先以御安泰被為入

奉南山候、誠ニ旧冬ハ於馬關得拜眉、其後打絶御不音

罷過候段、多罪御仁恕可被下候、野生ニモ已来山口表

へ罷越、夫ヨリ藝州へ参り、猶又備前岡山ニ暫ク滞在

仕、彼藩之模様等見聞仕候テ、漸頃日上京、早速村山

君御宅へ罷出、得拜眉、其後当地へ罷下り、例之潜匿

仕罷居候、然ル処御藩之御都合少々行違之義有之、甚

以苦心仕候処、此頃尊君様御供ニテ、御上京之趣薄々

奉拝承、大ニ得力候折柄、又々当地へ御下坂之趣雀躍

無限、何卒一応得拜眉、種々御物語奉申上度、乍去白

昼ニハ外見差遣モ有之候間、何卒今晚参上仕候テ、御

面会被成下度、伏テ奉希上候、猶万々拜顔之上申讓、

右御願迄如斯御座候、恐々頓首、

極月初三

佐々木寛蔵

黒田嘉右衛門様

御直披

三三三 安田徹蔵建言（楮幣発行）

楮幣通用之儀、御起居被為遊候上ハ、三札交換運轉之
始末、実ニ不容易儀ニ御座候故謹テ深く勒考仕候処、

天下国家之権ハ、財用権ト刑法之権ト之両条ニ相限り候間、財用之権正整興隆不相成候テハ、不相叶義ト奉存候、抑古来四民之別ハ、士守リ、農耕シ、二民其内ニ居シ国家之用ヲ弁シ候儀ハ、古今之通轍ニ御座候処、方今宇内之形勢致一變、財貨輻湊之位置ヲ變シ、既ニ治乱之経界ニ相成候ニ付テハ、実ニ富国強兵之外無他等奉存候、右ニ付テハ猶更熟考仕候処、士之職分ハ元来君德之光輝ヲ増益シ、三民ヲ御スルニ仁慈ヲ尽シ、勸農勸商ヲ以テ、最大之要務ト奉存候、扱農者勉勵シテ万物ヲ産出シ候得共、凡年々有限之財ニ御座候処、當時天下之形勢ニテハ、財貨散出之費用ハ無限儀ニ御座候、然ハ無限之用ニ有限之財ヲ配の仕候テハ、何レ不都合ヲ生シ可申ハ、自然之道理ト奉存候、依之国家常日之用ニハ、専ラ勸業ヲ主トシテ、有限之財ヲ以出入ヲ三省シ、常日之用ニ的當シ、無限之用ニハ商ヲ興シ、武ヲ助候ヲ宗トシ、勸商ヲ主トシテ、無限之財ヲ的用仕候方宜敷哉ト奉存候、尤商道ヲ盛ニシ候由、四民之別ヲ乱シ、士ヨリ商之業ヲ奪ヒ、邦内上下利ヲ争ヒ可申儀ニ無御座候、

但勸商ト申候ハ他ニ無御座候、勸善懲惡ヲ主トシ、

偏ニ無究之仁慈ヲ給ヒ、専ラ商之天命ニ報スルノ任ヲ、全ナサシメ給フヲ要ト仕候儀ニ御座候、其儀何レヲ以商之任ト申候哉、私於愚考ハ、四民之内士ハ君ニ奉仕シ、農ハ野ニ耕シ、工ハ万物ヲ造起シ、商ハ万物交換之媒ヲナシ、有余之品物ヲ以、欠乏之品物ニ交換シ、其間ニ利益ヲ得テ、家ヲ富シ国恩ヲ報シ、祖先之祭事ヲ厚シ、其尤勉勵仕候者ニ至リ候テハ、郷里ヲ出、骨肉ヲ離レ、千里之外ニ至リ、売買交換之内ニ利益ヲ得テ、他邦ノ財貨ヲ持シ、吾邦内ニ滿藏シ候ヲ、商之任ト奉存候、然ハ勸商之要ハ、右ヲ宗トシ、是ニ反スル事無之様、懈ヲ懲シ勞ヲ賞シ、頻ニ売買ヲ盛シ候儀ト奉存候、其商則・法律之儀ハ、密々可申上奉存候、以上、

寅十二月三日

安田徹藏

三三四 奈良原幸五郎ヨリ小松帯刀へ書翰

(京都風説)

尚々乍毎ノ乱筆御推察被遊可被下候、

昨夜御飛脚着ノ由ニテ、御尊翰頂キ、難有拜見仕候処、
已ニ一橋へ將軍

宣下相成御都合ノ由、然所々ノ風評モ御座候由、当地
ニテモ、誰イフトナク同様ノ説所々ニ御座候、イマタ
天運ノ地ニ不落訳カト奉窺候、兎角此末一層ノ御尽力
ニ不立致候テハ、日本再興ノ機益相後レ可申、出立前
愚存申上置候趣、尚又可然御合置被下度、當時天下ノ
機ハ、

御一身ノ上ニ関係仕候儀不少、尤国論モ広無親疎御聞
込被下、其上御賢考御取捨クレ々モ為

皇国奉拜願候、下坂大久保氏へモ、何トナシニ一体ノ
存慮相窺候処、格別小生推量ニ相反シ候義モ有之間敷
愚考仕候、其所ハ、尊公様御一身ノ御賢慮次第ニテ、
往年重大ノ興廢ニモ相拘リ申義ト奉存候間、幾重ニモ
暗昧ノ微志御汲取被下候テ、御取捨奉希上候、翔鳳丸
出帆モ漸ク今日日限等モ相決、明日仕舞次第ノ賦ニ御
座候、此内ヨリ風波アラク、兵庫へ相廻候由ニテ、私
共着ノ前日川口へ参居候由、然処又過日ノ風雨ニ兵庫
へ迦シ、今日川口沖へ相見得候トノ注進、唯今且越前
荷モ過分ニ有之候由、甚混雑出立之由、直ニハ噂モ不

承候得共、五藩一所ニ上京仕候トカ、如何ノ御都合ニ
相運候哉、乍恐後便ヨリ奉拜承度候、大久保氏モ最早
寸切ト全快程ノ事ニテ、今日共ハ風呂ナトニモイルト
申程ノ様子ニテ御座候、〔武家、小吉〕海江田・谷村へ其段御聞セ置
可被下候、先ハ尊書ノ御礼、且出帆ノ形行為可申上、
以乱筆アラ々如此御座候、時分柄酷寒御イトヒ被遊
御勤度伏テ奉拜願候、恐惶敬白、

十二月四日

〔整〕
奈良原幸五郎

〔小松清庵〕
小 帶刀様

二白、末筆乍恐滞京中乍每奉御懇意、別テ難有拜謝
奉絶言語候、〔志〕〔新助〕〔平助〕愛甲・鎌田へ別段礼モ不申遣候間、乍
恐宜敷御申伝置可被下候、頓首、

三三五 梅澤孫太郎小松帶刀へ面談セムトス

三三五ノ一〔榮、水戸藩士〕
梅澤孫太郎殿ヨリ別紙之通到来候付、相添此段申上候、

以上、

寅十二月四日

〔政風〕
内田仲之助

帶刀様

三二五ノ二

御旅館

松平修理大夫殿 梅澤孫太郎

留守居

小松帯刀

右ハ面談致シ度儀有之候間、明後六日夕七時、拙者旅宿西組与力熊倉市大夫方迄罷越候様、可被達候、以上、

十二月四日

梅澤孫太郎

松平修理大夫殿

留守居

三二六 世良修藏ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

大坂薩州御邸ニ

黒田嘉右衛門様

世良修藏(砥礎 長州藩士)

要用

拝啓、過日ハ遠路御苦勞被成下、忝奉万謝候、然ハ其砌御家米様へ、小生之荷物一ツ、伏見御藩邸迄御届被成下候様、御願仕置候処、未着之様子ニ御座候間、甚失敬之至ニ奉存候得共、急ニ伏見尊邸迄ニ御送り被下候様、御尊被成下度、伏テ奉願候、右ハ為御願呈寸楮

候、早々頓首、

十二月五日

黒田様

世良生拝

侍史

三二七 伊地知壯之丞ヨリ大久保一藏へ書翰

卷封

大久保一藏様

伊地知壯之丞

梧下

慶應二年十二月五日

昨日承知仕候銀地金取束、平山方江申遣候処、早御座相分り居、今朝面高真七郎江頼入候処、式拾匁位ハ御在合有之候間、明日門前ニ取ニ御遣し被成候様承り候、尤申請代匁匁ニ付六百四拾八文ツ、ノ由御座候、以上、

(慶應三年カ)

十二月五日

(大久保利謙氏所蔵本にて校訂)

三二八 〔伊地知壯之丞ヨリ大久保利通へ書翰〕

卷封

慶應二年七月廿日

一藏様

壯之丞

今日開生所江參候様御掛合被下候処、折柄郡奉行出会
申合置、以形行御報申上、伊地知正治江も引合候処、
明廿一日ハ全ク故障無之段承り申候、御差支之有無為
御知被下度、昨日最速御尋申上合ニテ候処、多忙ニ取
紛居、不本意罷過申候、右奉得貴意度、早々、以上、

七月廿日

追啓、先夜御話申上候彦助シヤンパンニ瓶差上候間、
御試味可被下候、

〔天久保利謙氏所藏本にて校訂〕

三二九 〔天久保利通ヨリ伊地知壯之丞へ書翰〕

一翰拜呈、嚴寒之砌弥以御安祥被成御精務、恐悦奉存
候、随テ僕ニモ滞坂無事相勤候間、乍憚御降慮可被成
下候、尔后長崎江亦々御出懸、初終御奔走御大儀奉存
候、扱御調文申上候品々、今度御差送り被下、別テ難
有慥ニ落手、万々御礼申上候、度々御投翰ニモ預リ難
有拜誦仕候、小大夫等御立後之模様ハ、奈幸士等被差
下候間、御直聞可被下候、僕ニモ腫物ニテ暫時ハ難儀
イタシ候へ共、最早ヨロシク御座候、京地之事ハ委曲
マ、情実カ夫モ達不申、即今之姿ニテハ何モ見留付不申候、

異船攝海來港之事モ、何レ來春共ニ相成可申模様歎ト
被察申候、華城モ修補等有之、城代邸へ異人休息所之
タメ、段々普請モ有之由ニ被聞申候、各国呼寄之事ハ
深意モ可有之候、別テ盛大ニヤリ立候向ニ御座候、幕
モ内輪改革、海陸軍手当等ハ非常ニ手ヲ付候次第ニテ、
兵庫開港甘ク幕ヨリヤリ付、各夷結合候日ニハ、詮方
ハ有御座間敷ト、管見イタシ候事ニ御座候、先ハ來翰
之御礼旁午龜毫如此御座候、頓首百拜、

十二月四日

大久保一藏

伊地知壯之丞様

侍史

追テ、御礼トシテ何カ差上度奉存候得共、此節得不
差下、追テ差上可申候、

三三〇 道島家記抄（廢寺ノ變動概略）

寅十二月八日

海老原宗之丞・相良助大夫・市來正右衛門御役御免、
永吉ノ島津主殿殿久壽・關山金生・大脇彌五右衛門廢寺方御
免ノ由、相良・市來・大脇等ハ廢寺一件ニ付、決テ不

勤弁ノ儀モ可有之候得共、海老原カ不思議也、是ハ定テ加久藤酒ヤ一件ナラント、人々ゾンシ居候処、千眼寺住持ハ海老原カ嫡家筋ノモノニテ、此大和尚奸智ノ者ニテ、此節廃寺ニテ還俗ヲ相願ヒ、此五日跡ノ評判ニハ還俗被仰付、高三十石御用人ニテ、御広敷御用人ヲ被仰付ト、慥成評判モ有之候、ケ様ノ事ヲ海老原書面杯モ、手ツカラ書ツ、リ候事ナラン、此住持モ退院隠居被仰付候ヨシ、是モ一珍事ニテ候間、書記置者也、

三三一 道嶋家記抄 (道路ノ説)

先達テ上京イタシ候小松・西郷、江戸ノ様ニ差越候、子細ハ不承候得共、察スル所市橋トハ当分不合体ノ由ニテ、又彼ニヲモネリ江戸ヘ周旋イタシ、一橋ヲ江戸ニ居付ル術策ナラン、十二月九日承候間記置也、

三三二 別府壯右衛門奥掛書役へ照会 (長州戦況)

当十月四日小倉滞陣之長州勢は勿論、下之關よりも尚又人数押渡、川原筋金部峠江押寄、同九日比迄之間及

戦争、小倉方敗軍ニテ既ニ金部峠防戦も危キ相成候向ニ相聞得、其段は先達テ申上置候通ニテ、同十日比倉藩茂呂三郎平外耆兩人位同道ニテ、小倉長州陣屋は勿論、下之關江も差越、小倉領之内企救郡文は長州江引渡候筋を以、和睦之及引合候処、段々難題ケ間敷儀共、長州より申掛候趣ニ相聞得、併右は如何返答相成候哉、尤長州よりも小倉方川原陣屋江差越、為及応接由候得共、巨細之儀は暁と不相分、夫形当分迄も戦争文は相止居候由、右ニ付金部峠相固メ居候小倉方島村志津磨之人数は勿論、小笠原〔真正、小倉新田藩主〕近江守其外之人数は、同十四五日比都て引取、島村之一隊は、当分川原より四里位相隔南之方、彦山最寄曾井田と申処江屯いたし、近江守は川原より西之方、弁城と申処江宿陣相成、其余之人数は、川原は勿論近辺在々諸所江同断、左候て金部峠江は関門并番所相建、日々川原より五六拾人位ツ、差越、交代ニテ相詰、長州方之儀も呼野辺江同断ニテ相固居、然処去ル三日比、長藩小笠原巳之助・南小四郎・森清蔵と申者共隊頭と相見得、都合三百人位前条関門踏通り、川原江差越、彦山参詣いたし候付、差通シ可異及引合候処、右参詣之儀は倉藩より相断候由ニ

て、夫形同所町家老軒・寺院老ケ所借受滞留いたし、其後式拾人位ツ、追々差越、右所江差分り同断之由、尤小統は勿論野戰砲三挺位持越居、何ぞ乱妨等いたし候程之儀は無之、昼は市中にて調練等いたし居、左候て右次第敵中滞在之儀にて、不意之變有之候も難計、夜分は両三人位ツ、列立始終行廻り、余程用心之体ニ相見得居候由、尤小倉之儀は、是迄度々之戦争も、敗軍而已にて、当分ニ相成頓と人氣も弱り、逆も手差等いたし候勢も無之、稍致恐怖居候形ニ相聞得、就ては右次第故、自然川原迄も長州より被奪取候儀にては有之間敷哉、何分長州之勢ヒ強大ニ相見得、右通致取沙汰候由、且又小倉之儀、奥州白川江国替被仰付、唐津侯・會津侯ニは攝州有馬ニおゐて切腹之由、其外段々風聞之趣、先達て申上置候得共、右は全虚説之由、乍去唐津侯ニは当八月比京都出立にて、江戸江被差越、着之上逼塞被仰付候旨、取沙汰有之由、然共是以実否之程は難計向ニ相聞得申候、

右通承得候間、此段申上候、以上、

筑前蘆屋滞在

唐物締横目

寅十二月十二日

別府仕右衛門

御国許

奥掛井

御家老座

書役衆

〔島津忠承氏所藏本にて校訂〕

三三三 岩下佐次右衛門ヨリ大久保一蔵へ書翰

(天龍和尚書籍進呈)

京都

大久保一蔵様

岩下佐次右衛門

寒威甚敷候得共、弥以御堅勝被成御座、珍重奉存候、随て私にも去月廿二日上京滞在仕居申候、此内より常野浮浪士共上京之段は、追々御聞相成候半、当分越前へ罷在候由に御座候、此節松前侯（藩主）・立花雲州等上京、長州発向と申事に御座候得共、何欵内存有之事には無之欵と評も御座候、

一 蒸気船云々、別紙通御届相成居申候ハ、奥州辺へ掛交易之手段も可有之、於江戸申談、小松家へ相伺候処、何も差支有之間敷との事に御座候間、御届申出候様可

申遣候、尤も御届に相成居候得は、被遣ても不被遣ても
差支無之故、何も手数に相拘事には有之間敷候間、御
返事不相待、御届相成候様可仕候、尤御届相済候上は、
表通御届可申上、奥州辺之交易取結ひ候節は、成行御
伺可申上候間、其内御聞取置可被下候、

一 天龍寺義堂和尚より書物三部

夢中問答 一冊

即心經 一冊

詠歌集 一冊

右

中将様へ献上仕度候へとも、御縁も無之事故、私迄差
出候間、御披露可然取計くれ候様申出候間、小松家へ
申上候処、何も差支有之間敷旨承候間、此節便より差
上申候間、可然御取計被下度奉願上候、尤右和尚は私
先年よりの知人に御座候、夫故被頼候事に御座候、外
に何ぞ存意有之事に付、献上仕候訳にも有之間敷被存
候、

一 当御屋敷無事、議論之沸騰も差て無之模様、鎗・劍稽
古之声等繁、皆々出精と見得仕合之至御座候、江戸表
は何分有志相少込入候次第、(本「刑部」)新納氏等より細々御聞被

下筈、書生半分之下働之処、今両人位も不被遣候ては
込入申候、正道にて相談致安人ならば、人物は大抵に
て宜敷御座候、傑出之人は望不申、爰許詰合之内より
にても見出し候ハ、差遣候様可仕候得共、当人望之
向等御座候ハ、御差遣し被下度、尤全く書生にては
外宿等にて、御屋敷之用には余り相成不申候間、糺合
(本「江戸老節ニアリ」)方詰等にて被遣候方仕合に御座候、先は右公私取交、
寒中御同等申上度、如此御座候、猶後音細事可申上候、
恐惶謹言、

十二月十三日

岩下佐次右衛門

大久保一藏様

人々御中

三三四 蒸気船及ヒ軍艦乗廻リ云々ノ届書案

御召手船蒸気船并軍艦、方今之時勢熟練不仕候ては、海
闕第一之要具に御座候間、運用為稽古、日本海時々乗
様為仕度御座候、就ては空船にては弁利不宜候付、為
船足国産積入、依時宜於津々浦々右品物雑用為償売払、
又々其所之品物買入、弁用仕候義も可有御座候間、御

聞置可被下候、此段御届申上候、以上、

月 日

御名内

誰

大山格之助

三三五 五藩連署五卿ノ帰洛請願書

去春以来筑前太宰府へ謫居相成居候五卿方、是迄五藩ヨリ警衛被仰付置候ニ付、一向動静相窺居候処、至極謹慎之次第有之、從來之処少々意味違ヨリ、闕下ヲ離レ罪ヲ犯サレ候得共、全

勅意違背之心底ニハ更ニ無之の訊ニテ、最早兩年遠隔、何モ違變之事モ無之而已ナラス、長州ニ於テハ解兵迄モ被 仰出候ニ付テハ、何卒寛典之御所置ヲ以、帰洛之処御宥免相成候様、兼テ警衛之事故、嘆願仕候様各藩主人共熟議之上、私共ヨリ奉願候様申付候ニ付、此段奉願候、以上、

十二月十四日

(慶頼、久留米藩主)
有馬中務大輔内

梶村俊八

(鍋島直大、佐賀藩主)
松平肥前守内

(黒田清隆之)
愛野忠四郎
松平筑前守内

(慶頼、熊本藩主)
森 三右衛門
細川右京大夫内

(茂久、薩州藩主)
秋吉休左衛門
松平修理大夫内

大山格之助

三三六 道嶋家記抄

一橋公十二月五日、二條ノ城ニヲヒテ、將軍宣下為有之由、會津肥後殿大老職被任候ヨシ、(朱)「慮惑」是ハ其筋ナラン、但一橋ハ始終狩杯ニ被差越、幕府寄兵隊鉄砲余程打ナラヒ、殊ノ外勢ヒ強ク、此方調練杯ヨリハハルカ宜、中々手表モナラヌ程ニ有之由、

十二月廿五日記ス、廿三日ニ三邦丸着船ニテ候、

三三七 木場傳内ヨリ西郷・大久保へ書翰

(大坂幕兵引取風説)

別紙之通承得申候間、相添此段申上候、以上、

〔慶応三年〕
卯十二月廿七日

西郷吉之助殿

木場傳内

石川宗十郎

人数

大久保一蔵殿

三百人程

別紙

一京橋口

一伏見

大垣人数

新撰組

一堺 住吉 天王寺

一大隊

不残

一八幡関門

紀州人数

若州小濱

八大隊

人数

一西宮

員不知

歩兵一大隊

一山崎

歩兵半大隊

遊撃隊三小隊

遊撃隊一小隊

大砲四挺

一素々海道川樋口

姫路人数

撤兵二小隊

凡五百人

一二條城

張紙〔現存せず〕

三大隊

本文何方ノ事ニ候哉、相分不申旨承候事、

〔徳川茂承〕
一紀伊中納言殿、十二月廿五日国元江被罷下候事、

一守口

但表向引取ニ相成候、内分は先日天王寺江陣屋替相

成候節、国元江御帰り相成候と申説、
右之通承得候段、比田二兵衛より承申候事、

十二月廿六日

〔大久保利謙氏所藏本にて校訂〕

三三八 小松帯刀同僚中へ照會書

〔猩々緋内献ノ次第〕

去ル二十五日夜、

主上御内実被遊 崩御候段ハ、別紙申越通ニテ、御両
殿様御残念可被為 思召、何共奉絶言語次第二候、右

ニ付先々ヨリ御庖瘡御煩付相成候得ハ、

玉座江猩々緋被為敷候御先例ニテ、幕府ハ勿論御所司
代等ヨリ献上仕来之由、然処 御当家之儀、勤

王第一之御家柄ノ事候付、右品御献上相成候ハ、一廉
之御都合可相成、柳原大納言様御存付ヲ以テ、去ル十
七日御庖瘡ニ相決候ト、直ニ御内々為御知有之、就テ
ハ不容易御煩之儀、殊更深

朝恩モ被為蒙候御事ニテ、イツレ御内輪御献上ノ物不
〔被脱之〕
為在候テハ、相濟間敷奉存候付、右様之節ハ兼テ被仰
付置候趣ヲ以、猩々緋壹本、翌十八日近衛様御取伝ヲ

以テ、御内輪御献上相成候様取計仕候、尤前以柳原様
ヨリ師典侍殿江御打合被成置候付、直ニ

観覧ニ被為及、兼テ御志之程深

観感被為 思食候段、御沙汰有之、別テ 御満足被

為在候由、尤第一番之献上候ニテ、直ニ

玉座江被為敷、然処其後竜眼モ御開被遊兼候御様体被

為成、其外之献上物等ハ、

観覧モ不被遊位ニテ、於此御方ハ別テ御都合相成候段、

承知仕候、仍テ師典侍殿ヨリヲイマノ局迄御奉書御到

来ニ付、差越候条可被備御覧候、右ニ付テハ為差過儀

ニ御座候得共、乍恐平生之御趣意不取失様ニト奉存、

殊更及遅引候テハ、

玉座御敷用ニモ相成兼、不詮立事候付不及奉窺、直ニ

右通取計仕候、左候テ將軍家其外ヨリモ、同様献上為

相成由候得共、跡達テノ儀ニテ、御次ノ間等江被為敷

候位之由、乍然何分別紙通之御形行ニ被為立至、何共

残念奉恐入次第二候、此段申越候条御両殿様可被達

貴聞候、以上、

但

御奉書御到来ニ付テハ、御内輪之儀、殊ニ

崩御ニ付テハ、別段御礼沙汰ニモ及間敷奉存候、
此段ハ為御心得候、

寅十二月二十九日

小松帯刀

島津(久世)圖書殿

桂(久世)右衛門殿

島津(伊勢)伊勢殿

川上(久世)但馬殿

新納(久世)刑部殿

岩下(分正)佐次右衛門殿

三三九 村山下総報告(主上崩御ノ詳報)

十二月二十八日申刻比、柳原大納言殿江拜謁窺取候次

第、左ニ申上候、

一 御容体書八通御写取、御差廻シ相成候処、御内実ハ去
ル二十五日夜亥ノ刻比、

崩御ノ由御座候得共、今日御発表ニ付テ、日次順贈リ

ニ相成、別紙之通ニ相認候事ト相見得申候、乍併御発

病十二日ヨリト申儀ハ、相違無御座候、

一 親王様御儀、御立坊ニ不被為及、直様御踐祚被為在候

筈、右ハ 光格天皇様閑院宮ヨリ、直様御踐祚被為在
候御近例ノ由ニ御座候、

一 御踐祚ハ、御発表ヨリ十日位ノ後ニ被為在候次第之由

承候事、

一 御踐祚被遊候テ、直ニ倚盧之御所江御移リ、夫ヨリ十

三日目ニ、常之御座江還幸被遊候御例ノ由、右ハ年ヲ

以テ月ニ代ヘ、月ヲ以テ日ニ代フルト申漢王ノ例ヲ以

テ、一暮之御喪服ヲ縮ラレ候ノ由御座候、

一 関(卷二)白様(三条殿)へ撰政之御沙汰被為在候由、尤モ 御冠礼迄ニ

テ被為濟候歟ノ由御座候、

一 来卯歳中ハ諒闇ニ付、来々辰春

御即位之礼被為行、夫ヨリ 御冠礼被為行候ヨシ御座

候、

一 御入棺ハ早速被為在、

御内葬ハ不被為在、直ニ

御本葬之由、大抵毎之通ニ御座候、而モ三十日位ハ御

日被為在候、然処此節戸田(忠孝、高徳藩志)大和守建白之訳モ有之、泉

涌寺後山江

山陵被召建候御内評モ被為在候故、自然其通ニ候得ハ、

余程御間可被為在哉ト奉存候事、

右之通同取候尽書取申上候、以上、

十二月二十九日

村山下総〔時邊〕

十二月二十九日

右衛門様桂久

帶刀小松清廉

三四〇 小松帶刀ヨリ桂久武へ書翰

三四〇ノ一

尚々蒸氣船ハ、早々廻船相成候様、御取計可被下候、

翔鳳丸モ御差廻シ可被下候、

一筆致啓上候、兎角寒氣之候御座候得共、上々様御揃御機嫌克被為入候御事ト恐悅御儀奉存候、随テ愈御多祥被成御座奉南山候、楮当地之形勢ハ、伊地知正治便ニ申上候通、五卿御帰洛等之儀モ、去ル十五日ニ新將軍參内御願ニ相成候賦ニ、御決定相成居候処、豈計ラシヤ、御大變御到来ニテ、何モカモ運ヒ付不申候、乍然成丈ケ早目ニ御願相成賦之儀、原市原市之邊ヨリ大山格へ咄之由ニ御座候、シカシ先々ソコトコロニモ無之、何モ暗夜ニ御座候、御推計可被下候、是ヨリ弥大難之世態ニ可立到、実ニ苦心此事ニ御座候、以来之事モ奉同度候得共、何分当惑中追々評議之上、誰ソ罷下り可申上ト相心得罷在申候、先ハ此旨早々如此御座候、以上、

追テ時下随分御自愛專一奉祈候、別紙之趣御互ニ絶言語、恐縮之他無御座候、爰許一統之形勢御推察可被下候、筆紙ニ尽シ兼候、乱筆御免可被下候、

三四〇ノ二
右書面ニ添別紙

去ル十一日夜

内侍所

御神楽央より御寒ケニテ、御曳入相成、翌十二日より御発熱、十四日より御種物誤御発シ、御疱瘡御治定、日々御快順之御模様ニ奉窺候処、廿四日昼時分より余程御不快ニ被為入、内実は廿五日夜初夜過崩御之由拜承、誠ニ以驚愕絶言語候次第、何共恐入候外致方無御座候、実ニ暗夜ニ相成候事ニ御座候、右御疱瘡ニ付ては、兼て被仰付置候趣を以、猩々皮皮ハ辨ノ誤等御献上、旁無手拔御模様モ相伺候処、案外之御大變ニテ、実ニ恐縮仕候、此御左右御両股様御承知ニ相成候ハ、嘸々御当惑被遊候半と、深々奉恐入候、今日

御大功之御発ニ付、極々急キ飛脚差立申上越候、明日

崩御之御達ニ相成歎ニ被伺申候、其上は亦飛脚も差立

可申候、爰元御邸中謹之義共は、折角手厚申渡候事ニ御

座候、表向御問合申上候得共、為念此段申上候、以上、

十二月廿九日

(島津忠承氏所蔵本にて校訂)

三四一 主上崩御藩内布告

主上去ル十二日より

御発熱被為

在、則より典薬頭高階安藝守其外江拝診被仰付候処、

同十七日

御抱瘡御治定相成候段、承知仕候付、日々之

御様体無手抜為承繕候処、先

御順痘之御様子ニハ承り、表向は

御軽目之筋ニ被相窺候得共、全体初発より

御難痘之御煩被為在候由にて、終ニ

御養生不被為叶、去ル廿五日夜五ツ半時、御内夷

崩御被遊候段拜承仕、誠以奉絶言語候次第御座候、右

付ては初発より

御煩之儀も、全く不被遊

御承知儀にて、

御両殿様御驚天可被遊、就ては初発より之

御様体、村山下総を以、柳原様江極内為相窺候処、別

紙之通

御医案等拜見被仰付候付、差上申候、左候て表向は今

廿九日

崩御御発相成筈之由候付、其上御動向彼是之儀は可申

上越候得共、先右之形行早々申上越度、極々急飛脚差

立、此段申越候条、

太守様

中将様可被達

貴聞候、何分ニも此節之御一条、御互ニ絶言語候次第、

恐入奉存候、就ては御発之上は、早々急飛脚差立、何

篇可申上越候得共、其内御右筆頭・御使番等江被相達、

先例之振合を以、被取調置候儀は、何分も可被取計候、

以上、

但

本文通今廿九日表向御発之事候付、

御医案等之儀、昨廿八日迄御病氣之筋認有之候、

此段は為御心得候、

寅十二月廿九日

町田内膳

小松帶刀

嶋津圖書殿

桂右衛門殿

嶋津伊勢殿

川上但馬殿

新納刑部殿

岩下佐次右衛門殿

〔島津忠承氏所藏本にて校訂〕

三四二 酒井十之丞ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

〔五卿移転云々〕

一筆拜啓、厥后は御無音而已罷過候、〔朱〕〔安巻〕 借吉井公昨日馬

關へ御渡海之処、御同船罷越候堤五一郎、昨夜八ツ時

比帰舟、昨日御相談申置候儀共、尽く意外ニ相成候運

ひ、唯今にてハ、五卿之面々移転之心更ニ無之様子、

右等之事ニ付、篤と御熟談申候て、速ニ所置致度候間、

乍御苦勞四ツ時頃迄ニ、御本陣迄御来会被下候様、可

得御意旨家老とも申聞候間、右之刻御入来可被下候、
為其如此御座候、已上、

極月廿九日

黒田嘉右衛門様

〔忠風、彌井藩士〕
酒井十之丞

〔黒田文紀氏所藏本にて校訂〕

三四三 准后立后御期年布告

准后御方御立后之事、

親王御方被為有厚

思食候間、明後年春

立太后冊命御治定被

仰出、且戸田大和守殿

禁裏御所頭取被

仰付、別紙之通御達相成筈之段、塚本圖書より為知有

之候旨、御留守居申出候付、別紙相添此段申越候条、

大守様

中将様可被達

貴聞候、以上、

但

御達相成候ハ、向々江申渡、其段申越候様可致候、

慶應2年(1866)

此段は為御心得二候、

寅十二月廿九日

町田内膳

嶋津圖書殿

桂 右衛門殿

嶋津伊勢殿

川上但馬殿

新納刑部殿

岩下佐次右衛門殿

〔島津忠承氏所藏本にて校訂〕

三四四 道嶋家記抄 (桂小五郎来麿)

寅十一月二十三日方、長州蒸気船一艘到来、桂幸五郎小

差越候、是ハ先達テ黒田加右衛門嘉・東郷源四郎使者被

遣候付、其謝礼ナラン、物入無構ノ御取持ニテ、桐野

孫太郎方へ被召出候ヨシ、左候テ二日方国許ヨリ飛脚

差越候テ、何カ事到来候間、早々罷帰候様申来候由ニ

テ、俄ニ出帆イタシ候由、

三四五 寺院廃合掛ヲ命ス

慶應二年丙寅十二月七日

此時寺院古来ヨリ御崇敬ノ弊、爰ニ至リ国家多事ノ折カラ、修覆等不行届興廢ニ傾キ、因之由緒無之寺院ハ、廢合致度議論ヲ生シ、御許容相成候ニ付、左ノ通被仰付候、全ク廢寺ノ基本也、

桂 右衛門

右ハ寺院取調掛被仰付候、

十二月

伊勢島津

此ノ時京都詰仰付御称号ヲ給事、

三四六 言路洞開ノ布達

諸役場奉行頭人職掌之御用筋遂衆評、其筋ヲ經申出候儀ハ、勿論之事情へ共、書面而已ニテハ、情衷委細致貫通兼候儀モ有之候付、御目通江罷出候御役場、夫之御格モ有之事情へ共、依事柄奉行頭人名差ヲ以テ、御両殿様御前へ被 召出、御尋被遊儀モ有之候付、兼テ其心得罷在候様被仰出候条、此旨向々江可致通達候、

慶應二年寅十二月

〔島津〕
圖書〔卷〕

〔表紙〕

忠義公史料

慶應二年

〔扉に、表紙の文字の外に市来四郎編の記載あり〕

三四七

〔岩下方平ヨリ大久保利通へ書翰〕

包封

大久保一藏殿

岩下佐次右衛門

暫時御帰国被成候由、御苦勞千万奉存候、長征も終ニ
猛々決議相成候由、行末如何之見当ニ御座候哉分り不
申候、爰元平和珍事も更ニ無御座候、横濱江も出張申
候へ共、当分嫌疑甚敷、幕吏付添通しニて、異人江は
内話致候事甚六ヶ鋪候故、以来之妨ニも可相成歟と存、

差扣居申候、御国許江廻船一条 御心配被遊候由、爰
元ニてはいまた約定不取究、一左右相待候故、何も子
細無御座候、御安心可被下候、

一、御屋敷中平和、当分ニてハ静成事ニ御座候、上御
屋敷少人数ニて、取締不行届ニハ甚困り入申候、御長
や之雨戸・ねた等引放し、薪ニ致候由故甚荒れ申候、夫
も近頃ハ面向等より定府共引移參候得ハ止居申候、追
々引移相成候て、諸所へ人も居る様ニ相成候ハ、取
締可相成、只今迄ハ御本門より東之方ハ一人も無之、
私一人ニても其位故どこを取締ふ様も無之候、

一、昨年末ハ外方追剝・付火等多候処、市中取締嚴敷、
当分左様之事も無之様子ニても、一体ハ甚淋敷候、
一、横濱ニて前件通六ヶ敷候故、炮器類も存分探索出
来兼申候、尤売人取扱候義近頃六ヶ敷相成、猶以面働
ニ御座候、随分本込め等ニハ能筒も可有之候得共、履
を隔て搔之心地ニて候、

先は、右旁申上度如斯御座候、猶後便可申上候、頓首
拜、

〔慶應元年乙〕

二月八日

岩下佐次右衛門

大久保一藏様

三四八 〔征長処理一件〕

写

此度閣老小笠原壹岐守殿・永井主水正殿其外、追々藝州発向ノ由到来有之候処、旧臘於藝州永井主水正殿其外応接ノ節、御国内ノ情実委曲聞届相成候事ニ付、御寛大ノ御沙汰振モ可有之候処、却テ存外ノ幕令有之哉ニ相聞、素ヨリ請込モ難相成、其期ニ至リ候ヘハ、右軍勢四境ニ迫リ候ハ、必然ノ事ニ候間、兼テ御手組被仰付置候通、諸手規律ヲ相守リ、御指揮ニ随テ不墜御武威候様、孰レモ一致義勇決戦ノ覚悟可有之、此段相達候事、

寅ノ二月

三四九 〔南部彌八郎ヨリ葦田外三名へ書翰〕

御軍船御注文之儀ニ付、一蔵様江御問合申上越候趣御座候処、傳兵衛様より三月廿七日付にて、被仰越候御問合之趣相達、委曲承知仕候、右は三月下旬絵図面并

船製造仕様帳等差出候ニ付、勝安房守殿江内々御相談申上候処、御同人存慮之筋も有之、其折柄緩急之事情、議論之旨も御座候ニ付、最初被仰渡候御趣意之通、私共限何分決断御調文も仕兼候儀ニ付、掘平右衛門御用上京便、帯刀様・佐次右衛門様江申上越、其後書面を以、佐次右衛門様江尚亦申上越趣御座候処、右は其御地江御廻し相成候段、被仰越候付ては、既ニ御一覽被成下候儀と奉存候、右様之儀ニ付、右仕立帳一ト先翻譯為仕候上と之相談にて、英学者福澤諭吉江篤と申談候処、右は船仕立ニ付、夫々之ヶ所ニ寄木品何をもちひ、或は釘は何様ニいたす等、殊之外微細之品迄相認候書面にて、翻譯仕候とも物名等中々相分り不申、去ながら出来之時分現品ニ引合、夫々質問いたし候得共、精粗好悪共相弁し候事ニ付、於御注文は、此書面尤大切ニ有之、幕府にて是迄注文等ニ、右様之書付類差出候事共更ニ無之、余程入念取計候儀と、被察申候旨申聞候間、一ト先請負英人江応接可仕と存候折柄、御趣意之御旨被仰越候ニ付、則右之趣ヲ以、来ル十一二日頃応接之上、巨細申上越候様可仕と奉存候、尤当中急被差立候前ニ、応接仕度奉存候処、先達てより

大樹公上洛等ニ付、品々風聞認物等有之、何分運兼候付、右日限迄延引仕、便宜を以早々申上越候様可仕と奉存候、此段柴山良助江も申談、御請旁申上候条、宜様御取成奉願候、以上、

但本文之趣、攝津様江別段不申上越候間、宜被仰上

被成下候様奉願候、以上、

〔慶應元年〕

丑五月八日

南部彌八郎

蓑田傳兵衛様

大久保一蔵様

西郷吉之助様

市來正之丞様

尚以琉球江異船相越候儀ニ付ては、是亦被仰越候御趣意ヲ以、極密相諭置候様可仕候、外国風聞等之趣申上候儀ニ付、被仰下候趣、恐入難有仕合奉存候、此段も申上候、以上、

〔島津忠承氏所藏本にて校訂〕

三五〇 〔西郷隆盛ヨリ大久保利通へ書翰〕

御両殿様益御機嫌能被遊御座、御互恐悦之御義奉存候、陳ハ小倉辺之事情等ハ、川村より細事御聞取可被下候、

税所ニも上坂いたし候付、何も文略仕候、其御地之形勢日々思ひ出し居申候、今当分ニてハ逆も罷登程合も不相分、貴兄ニは余り強欲と奉存候、稀ニハ交代も仕度御相談申上候、藝国ノ御使者参り候得共、皆因循先生方ニて、是迄藝国ニて之尽力之次第を、為御知ニ相成と之訳ニて、格別訳も無之候、其御地之詰合之者ハ矢張幕論と被相聞、嫌疑説を申送候由ニて、夫故動揺いたす訳も有之由ニ被相聞申候、叱も不相成位ニて尋も不致、論ハ猶以之事ニ御座候、只咄さへ恐ろしかり候て、双方不差障やうニ相咄居候、先生方なれ共、小笠原閣老ニハ少し角ヲ立て被相咄申候、伯州か和議を穴戸江相謀候説頻ニ相唱候由、夫を名といたし、紀州杯ハ引掛候様子ニ御座候、小倉辺も同様之訳ニて、大物議相起候由、可笑な事ニ成行大慶之事ニ御座候、勝先生上坂ニてハ、少し可見所も出来候半欬と相考、一左右御待申上居候事ニ御座候、此旨荒々奉得御意候、恐惶謹言、

西郷吉之助

七月廿八日

大久保一蔵様

〔大久保利謙氏所藏本にて校訂〕

三五一〔廣澤兵助ヨリ黒田・東郷へ書翰〕

今曉来之雨雪ニテ、殊更寒冷相募候得共、弥御清穆被成御滞在奉南山候、然テ木戸事モ未夕帰着不致、只様御待遠奉恐入候、兼テ申上置候通、昨日中ニハ是非罷帰候様申越候事故、何欵ニ差向キ用向出来、無執遅延押移候ニテ可有之哉、孰レ尊台方へ御面会懇願之事ニ付、今明日中ニハ歸リ可申哉相考居候事ニ御座候、其中今昼後於別席御寛話相窺度、乍御足勞御資臨被下度奉願候、折角貫治〔宋戸孝允〕一同御集会仕度心得候処、前件之次第故残念之事ニ御座候、併渡邊へモ乞合置候事故、必々御出之程奉待候、尤右時刻ニハ御同道仕度、御旅寓迄罷出可申候間、御待合被下度奉万禱候、他ハ拜青縷々ト為其計勿略如此御座候、頓首、

〔宋〕
「慶応二年」

十月廿八日

黒田嘉右衛門様 廣澤兵助

東郷源四郎様

侍史

三五二〔新納嘉藤ニヨリ吉井幸輔へ書翰〕

包紙 慶応二年十月十七日

吉井幸輔様 新納嘉藤二

要用

尚々去ル三日定式便より之呈書相届候筈と奉存候、澁谷一昨朝着、御状相達難有拜見仕候、中途無御恙先月廿九日御京着被成、弥御壮栄御勤之由奉恐悦候、二二私無事勤申候間、乍憚御休意可被下候、御滞府中之御挨拶難有奉存候、其御地も其後別段之事も無御座候由、御朝議之諸侯御来会迄之間ハ、御止之方々九條公・一條公・山階宮より御建白ニ相成、其通御治定先動不申由、徳川公御除服之事より考候へは、誠懸念之至ニ御座候、尹宮殿下ハ矢張御引入之由、兎角御国御始早く御上京無御座候ては、機会相迦可申欵と、遙々心痛仕事ニ御座候、春嶽公ハ又御出京無相違御様子、細川良公子は御帰国掛、土州・宇和島江御寄被成筈候由、是ハいよゝ頼もしき事と大慶罷在候、此度こそ黒白是非相分り可申候、大かたハ徳川公つねり可被成候間、十二

八九は打破候方かと考申候、又再討之内儀も有之模様ニ聞得申候由、何分紛之為体ニ御座候、爰許何事も無之、貧窮組も無程弱り静まり、今ハ噂も無之候、田町町并屋敷之御家守と申株より、しんく人共江其折あたへ候入目之割ヲ、間敷ニ掛て申出候間、書取ヲ以てねちり返申候、

一平元良藏儀、早速大久保・伊地知両士江御懇談御座候処、いちゝ氏至極同意にて御座候由、大慶奉存候、御状早速届、先關太郎ヲ遣候て頼置申候、細事ハ後行ニ書載可申上候、諸生衆ちと失望之筈と察候得共、一人ヲ頼て学れ候事故、引払下国被致外有之ましく候、ミナ江戸々々と被申候も、御案内之通よき所有之故と被察申候、先達て来候永山・堀ハ掛て稽古いたし候間、御長屋手入いたし渡具候様申候間渡申候、掛て之修行学僕同前ニはまり候賦之趣意ニハ、ちと難協やと考申候、当分出居候分五拾式人ニ及申候、又四五人近々被差出筈と聞へ申候、是ハとふいふ御吟味ニ御座候哉、爰許之為体御見聞通之事御座候間、追々御建論被下候様御願申上候、又御金仕切り、諸生之書籍取入も代払調不申、就てハ陰にてふせく被申筈ながら、いたし方

無之候、諸職人杯之御払ハ、此内より捨置申候処、十月之何とやらにて歎申出、迷惑仕居候、何分臨事之御入目多ク、松田正藏肝煎之細工人も、近日差下筋ニ定り申候、是も前後三百進入申候、是等ハ尤有詮訳故、取扱も氣すゝみ申候得共、間ニハ胸ニ落不申入費も有之、込入申候、諸生一件之事(寺島宗則)陶藏へ談置申候間、御聞取可被下候、

一野州より之書面、一藏殿ニもしかと御吞込無之由にて、御扣置被成候よし御尤奉存候、かの人太郎江生前之暇乞ニとて、先月末来候由、廿七八日之期ハ延候て、十月四五日勃興之決定と申候由、今ニ為何事も聞へ不申候、しかし平田子より太郎へ之手紙、其俣差上申候、一大炮廻方之事承知仕候、英人江頼入方良助(采山)へ談置申候、右製造方追々催促無油断仕候得共、未成就ニ相成不申候、是ハ事ニよらハ火急之御用ニも立可申、不容易内実之訳と考申候間、其意は伴杯江もよく含せ、セツキ立申事御座候、成就之上ハ打試方なと手廻よく可致、其用意ハとくニ調居申候、太鼓も式挺ハ先便ニ差上賦候処、当日かの方ニ相求候て、職人より不出来合由申出候由、可成ハ寺嶋便ニと催促ハ仕候へ共、職人方別

て込合申由、尤前文之式丁ハ出来候得共、不細工故外
ニ又頼直候由、伴より申出候、野村松手ニて調候十三丁
ハ、よく出来可申と考申候、いづれも心せき候得共、不
如意之次第第二御座候、第一大炮は一日も早め差上度、
山々差含罷在事御座候、英人船便都合能あれかしと祈
申事御座候、打試なといたして、間後ニ可成様之船便
宜も御座候ハ、行程不試でも差上可申候、

一勝氏不平ニて其御地出立ニ相成申候由、柴山へ則示談
仕候処、未帰着無之由、無油断聞繕候様談置申候、明後
日より内分り候ハ、書添ニて可申上候、幕府之中橋ヲ
可打なと申噂も有之由、如仰是ハとめとれ申儀ニハ考
不申候、しかし不伏之者いくらも有之方、可悦訳ニ御
座候、右御返事旁如是御座候、例之乱筆御免可被下候、
以上、

十月十七日認

新納嘉藤二

吉井幸輔様

追啓、御用心金之事、追て御透次第御働見可被下候
段大慶仕候、尚宜敷御頼申上候、御留守居方書役御
心附之儀、御繁務中不捨置、早速御聞繕被下候て、
細々御示被下、難有奉存候、爰許ニも益・暮七両式

分ツ、出立之節ハ拾五両被成下筋々、岩下家御出
府之節伺濟置申候付、後ハ暮計十両、出立之節廿両
被成下候筋ニ定り申候、書役共御人撰、島之儀既ニ
此内内分之願承候得共、余例も如何とそんし扣居申
候、両都合共有之事御座候ハ、当地も願立度念申
候、嘸々別て逼迫之様子、氣之毒ニ御座候、

一、關江御加筆申聞申候、水元江ハ逢次第傳可申候、
一、上品之短冊御恵ミ被下、別て難有奉存候、老婆
江も配戴為仕候様被仰下、且御伝言申聞候処、別て
有難かり、早々たんさく開封仕頂申候て、乍恐御礼
よろしく申上呉候様申出候、御せはしなき央ニ、御
心入之程深奉感謝候得共、翌日直ニ一藏殿と嵐山観
楓御企被成候由、成程よろしく可有之候得共、江戸
ノチャンくといふ声之悪キ俗女御貞鼠之貴君方、
御目ニハさくら山あたり、(借しさの方言)アツタらしさハ霧嶋の山
伏之珍説よりも尚更之様ニ覚申候、あなかしこ、
(大久保利謙氏所藏本にて校訂)

三五三 (勝海舟ヨリ大久保一藏へ書翰)

一輪拝呈、追日寒威進候処、御勇壮被成御在京重々相

賀候、扱小生事モ当時別段見込モ無之二付、海軍局之義申立候処、右ニテ少々抄取江戸江掃着イタシ候、此行不如意ニテ、碌々心緒モ御物語不申、頗ル遺憾不少、此後如何之御出会御座候哉、難計ト存候、

小松殿・西郷氏・岩下氏江御出会モ候ハ、宜敷御伝被下度、小拙近年懶惰ニ相成、再登如何哉相願候所ハ、閑居心事研究ニ有之候得共、是モ亦不任心、扱々世之中ハ不定之モノニ御座候、御一笑可被下候、唯々難通ハ黄泉之客欵、悉皆造物者之意匠ニ応候而已、出立之期不定鳥渡前件御内々申進候、不備、

十月二日

安房守

一蔵様

三五四

〔近衛忠房ヨリ島津久光・茂久へ書翰〕

外封

嶋津三郎ドノへ

忠房

内用

内封

嶋津中将殿

忠房

薩摩少将殿

内々

十月七日認

口述

弥御勇健珍重ニ存候、抑今度外夷攝海江来舶候処、誠ニ不容易次第、幕より遮て言上ニ相成、其上去ル四日二橋(全澤)桑名・會・桑并小笠原等参

内にて、是非開港速ニ御免之儀遮て言上、段々被惱宸襟をも、殿下始ニも厚尽力いたし候へ共、中々強情不聞入、殆痛心之事ニて候、何分列藩輩下へ被召寄候上、厚遂衆評、人心一定之上ハ真之開港ナレハ可被為許、乍去今日ニ 勅許之義ハ難相成、何分積年之思召も一時ニ不相立、

神宮奉始御代々へ被為対、是迄御祈願之御趣意も不相立、其上戊午以来外夷件ニ付、幾万人之人命ニも相拘り居候程之義ニ付、兎角諸藩被召寄候上ならてハ難被許と、段々御沙汰ニ相成候処、左様之御因循にてハ、外夷忽京師へ迫り可申とて、種々と四人共より朝を嘲呟いたし候申方甚絶言語候、何分強て依申願不得止事御許容相成、実ニ以一時之水泡と相成候段、積年之思

召之処、実ニ可恐存候、巨細大和より御聞取可給候、大乱筆免可給候也、

十月七日

実以何共切齒至極、慷慨仕候得共、致方無之残念成次第二候、幕之不遜限なし、国賊現然候、日々不遜増長候、何共無申条候、以上、

緘

薩摩少将殿

忠房

嶋津中将殿

内密

別紙一

今度諸藩召之義、大樹江被 仰出候へ共、大樹より夫々相達申候欵、不達欵不分明ニ付、申入候事ニ候、何分幕之大罪難遁候也、

別紙二

今度列藩被召寄候ニ付、早々応 召御上京之程、折入待入候事、

十月七日

誠ニ不容易拘国体時勢、迅速御上京可然候事、

〔島津中承氏所藏本にて校訂〕

三五五 〔木戸準一郎ヨリ黒田清綱へ書翰〕

慶應二年十一月

乱毫御推覧奉願候、拜眉何モ可申上候、百拜、
采雲奉拜誦候、先以御壮采ニ被為居、恐賀此事ニ奉存候、サテハ五代君ニモ未何タル御様子モ不相分、就テハ三田尻表ニ申越、小艦修復相調居候ハ、十六日・十七日之間ニハ、必揚碇仕候覚悟ニ御座候、実ニ空敷長々御待セ申上、何トモ奉恐懼候、千万申上兼候得共、今暫時之儀ニ付、何卒御供仕度偏御許容奉願候、先ハ為其不取敢御答申上候、奉復、
〔本〕

〔慶應二年〕

十一月十四日

尚々馬關着舶仕候ハ、早速可申上候間、左様御了承奉願候、御多務之御中長々御引ト、メ申上、誠ニ御不自由而已奉懸、何トモ奉恐入候、丸々御容赦奉願候、敬白、

黒田嘉右衛門様

木戸準一郎

扨復急

三五六 〔西郷隆盛ヨリ大久保利通へ書翰〕

巻封

一蔵様

上置

吉之助

明朝六ツ前時分より小室山狩ニ、小松大夫御登之筈ニ
て、貴兄御同伴之思召ニて御座候間、決て為御知参候
事と相考候得共、為念申上候付、必御氣張被成間敷哉、
出立掛御誘引ニ上り可申候、以上、

十二月十一日

〔大久保利謙氏所蔵本にて校訂〕

三五七 〔西郷隆盛ヨリ大久保利通へ書翰〕

巻封

大久保様

要詞

西郷拝

昨日ヨリ例之持病差起、出勤不仕候テ、療治方ニテ御
座候処、先刻 條公御出ニテ、三岡モ此両日中ニハ着
〔由利公正〕
京相成候模様之由、右ニ付テハ東京府知事ニ被仰付筈
ニテ、幸貴兄ニモ御談合相成候処、御違存無之由御沙

汰被為在候、先日ヨリ大蔵省ニ御登用相成度トノ段同

居候処、逆モ不被行候哉、若御用ヒ被成候思召ニ候ハ

、只今欵ト奉存候、今日荒増御究リ之趣ニテ、尚私

ニモ存慮ハ無之哉トノ御事ニ御座候間、違存ハ無御座

段申上置候、如何之御考ニ御座候哉、是非御用ヒ被成

候思召ニ御座候ハ、明朝條公へ御申込被成候テ、可

宜欵ト奉存候間、早々一筆如此御座候、頓首、

明治四年七月十八日

三五八 〔西郷隆盛ヨリ大久保利通へ書翰〕

巻封

一蔵様

〔よりまとまるの方言〕

吉之助

今日嵯峨行とじまり候由ニテ、吉井方より申来候間、

早々御出懸被下度、奉合掌候、頓首、

十一月十一日

〔大久保利謙氏所蔵本にて校訂〕

〔表紙〕

忠義公史料

市來四郎編

慶應三年自一月
至二月

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事執筆史料」
(紙数六五枚)の記載あり〕

目録

- 高崎兵部ヨリ小松帯刀へ書翰
- 公卿方喪服
- 松平民部大輔御出立御供人名
- 主上御瘡瘡ノ報
- 主上御惱ニ就テ謹慎布達
- 篠崎彦十郎ヨリ西郷吉之助へ小銃買入レ照会
- 黒田了助大砲運用伝習云々照会

九條圓真外十一名謹慎解免ノ報

蓑田傳兵衛ヨリ西郷・大久保へ書翰

伊地知正治兵制改革建言

赤松小三郎横死ニ就テ本藩受教者碑文

主上崩御ニ就テ久光公御上京ノ布告

尚齒恩恵ノ令九十歳以上ノ者

海陸軍創設令

水野溪雲齋ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

森寺大和守ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

〔水野溪雲齋ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰〕

京都守衛兵ノ名ヲ以テ久光公へ被附人名

伊地知壯之丞ヨリ大久保一蔵へ書翰

在大坂木場傳内ヨリ大久保一蔵へ書翰

桂右衛門ヨリ小松帯刀へ書翰

蓑田傳兵衛ヨリ大久保一蔵へ書翰

高前困役金取調書

岩倉具視ヨリ大久保一蔵へ書翰

慶應三年丁卯 清曆同治六年
西曆千八百六十七年

神武天皇御即位紀元二千五百三十一年^(マ)

今上天皇^(七) 睦仁^(百) 御即位一年^(三十五)

將軍慶喜公^(五) 襲職一年年^(マ)

忠義公^(九) 知政^(安政五年) 十年^(天保二十六年)

幕祖忠久公^(薩摩日三州及琉球國受封) 八皇八十一代
後鳥羽天皇^(永五年即于文治三年) 八百八十四代^(カ)

関白左大臣二條齊敬公

右大臣 德大寺公純公^(九月) 辭

内大臣 近衛忠房公^(九月) 左大臣^(九月) 辭

老中 板倉伊賀守勝静^(備中松山藩主)

松平周防守康直^(松井川越藩主)

井上河内守正直^(辰松藩主) 影免^(六月)

稻葉美濃守正邦^(徒藩主)

小笠原壹岐守長行^(唐津藩主)

松平伊豫守定昭^(久松伊予松山藩主) 十月

酒井雅楽頭忠惇^(細路藩主) 十月

松平縫殿頭乘謨^(大給田野口藩主)

稻葉兵部大輔正巳^(館山藩主)

松平豊前守正質^(大河内、大多喜藩主) 月

若年寄

遠山信濃守友許^(箭木藩主) 罷免^(八月)

京極主膳正高富^(峰山藩主)

保科弾正忠正^(飯野藩主) 益^(七月)

本多能登守忠紀^(泉藩主) 四月

松平豊前守正質^(大河内、大多喜藩主) 月

大關肥後守增裕^(黒羽藩主)

石川若狭守総管^(下旗藩主)

秋月右京亮種樹^(高鷲藩主)

永井肥前守尚服^(加納藩主)

松平左衛門尉近説^(天鈴、府内藩主)

戸田大和守忠至^(高德藩主)

堀内藏頭直虎^(須坂藩主)

永井玄蕃頭尚志

所司代

松平越中守定敬^(桑名藩主) 月

京都町奉行

大久保主膳正忠恕

遠山隠岐守資尹

高力主計頭忠良

伏見奉行

国老

林 肥後守忠交

川上但馬久運

小松帯刀清廉

桂右衛門久武

町田内膳久憲

岩下佐次右衛門方平

諏訪伊勢武盛一時島津ノ
稱号ヲ許ス

新納刑部久脩

川上龍衛久齡

以上八名前代ヨリ勲統ノモ
ノハ〇印ヲ付ス(〇印なし)

三五九 高崎兵部ヨリ小松帯刀へ書翰(述志)

謹奉祝新春候、尔来益御機嫌能被為遊御越年、芽出度
御事奉恐悅候、随テ私ニモ無異加年仕候間、乍恐尊慮
安思召可被下、先ハ此段年頭ノ御祝義奉申上度、如此
御座候、尚縷々奉期永陽之時候、恐惶謹言、

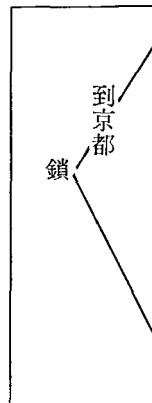
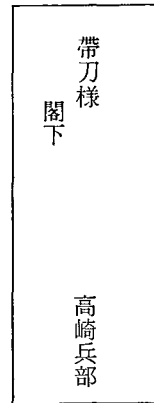
卯正月元旦

高崎兵部

友愛



小松公閣下



乍恐追啓奉申上候、尔後御許ノ形勢、追々御国日々
転変ノ事情、誠ニ浩歎ノ到、殊ノ外新納軍奮發興隆
ノ事ニ取掛候様子、成程進退困配ノ場合、左モ可有
御座事ト想像仕候、天下ノ事再不可救ト落着被仕候
モノ、真ニ新政府大興廢、大非常ノ処置仕候テ、
又一概ニ不可為トモ難申、天下ノ機定体ナシ、時ニ
從ヒ変易ノ道理ニ候得ハ、固執不変ノ思召ニテハ、
後大ニ悔ル事到ルヘシ、願クハ深御勘考、天下古今
ヲ御照考、至理至当ノ御処置被遊度御事ト、窃ニ不
堪懇願ノ至候、尤一體薩府ノ為弊ヤ、一時驕傲暴置

ヲ不免、深御沈潜其短ヲ御増補被遊下候テ、智者ヲシテ不令笑事ヲ願フナリ、

漢高ノ羽ト戦フヤ毎度漢高敗績ストイフトモ、遂ニ垓下ノ一戦項羽亡焉、凡天下ヲ争フモノ、殷鑒ニアラサヤ、

閣下賢明是ヲ洞察スル事于今久シ、敢テ鄙説ヲ述ルニ足ラストイヘトモ、閣下我ヲ見ル事子ノ如シ、其恩天ノ如シ、区々ノ胸懷閣下ニ不得不言、願クハ其鄙誠ヲ御亮察可被下、易曰ク、満招損謙受益、又曰ク、亢龍有悔、宜ク其然ルユエムヲ被 思召被下候様奉伏願候、天下ノ事強弊アリ、弱弊アリ、二ナカラ其至当ヲ得ス、国家強ヲ恃メハ強ニ亡フ、秦皇是ナリ、弱ヲ恃ムノ弊不論ズシテ可ナリ、願クハ道理明白ナラム事ヲ、兵力強ク道理明ニシテ、天下ノ大事担当スヘシト、或人ノ説ヲ聞事ヲ得タリ、実ニ我藩ヲ警策スル薬石可不戒哉、可不謹哉、右拙論雖不足言、虚心平氣ノ人ヲシテ是ヲ聞シメハ、又万一ノ補アラム、方今各賢上京、其処置是ニカフル事ナシ、美書ノ件々不少トイヘトモ、其美書可不論、又閣下是ヲ不可聞、是ヲ聞ハ則チ少シク自負心ヲ不得不生、

三六〇 公卿方喪服

三六〇ノ一

慶應三年正月二日

喪服

自負心ヲ生スレハ必ス事ニ害アリ、閣下ノ尊思如何ン、思召寄モ御座候ハ、拜聞被仰付被下度奉懇願候、事柄ニ依模様テハ、一時御帰国被遊候御都合モ可有御座、折角御待奉申上候、

三白奉申上候、先度御上京前聊尽力仕候訳御座候処、尊命被残置候由ニテ、色々結構ノ御品々拜戴被仰付、何共奉恐入候、御間不堪汗顔ノ至深銘肝、厚奉謝上候、頓首百拜、

- 德大寺〔公純〕右大臣
- 綾小路〔有長〕前大納言
- 一條〔実良〕左大将
- 九條〔道孝〕大納言
- 冷泉〔為理〕中納言
- 町尻〔重輔〕宰相
- 三室〔雄光〕戸三位

慶応3年(1867)

喪服加勢

伏原三位〔寛勲〕
 久我三位〔通久〕中將
 西園寺三位〔公望〕中將
 梅溪侍從
 六條侍從
 綾小路侍從
 豊岡中務〔通賢〕權大輔
 竹屋左衛門佐
 裏松中務大輔
 石野大夫
 清水谷〔公忠〕中納言
 今城宰〔定國〕相中將
 岩倉〔具盛〕三位
 石野〔基安〕三位
 高松〔保英〕三位
 倉橋〔泰隆〕三位
 油小路中將
 武者小路少將
 小倉中將

供奉(御葬礼)

難波少將
 高岡兵部大輔
 清閑寺侍從
 近衛前〔忠興〕関白
 徳大寺右大臣
 近衛内〔忠房〕大臣
 綾小路前大納言
 一條左大將
 日野大〔資宗〕納言
 九條大納言
 柳原大〔光復〕納言
 廣橋大〔胤保〕納言
 鷹司大〔輔政〕納言
 飛鳥井〔雅典〕中納言
 六條中納言〔有容〕
 冷泉中納言〔定功〕
 野宮中納言〔通宣〕
 中院中納言〔重胤〕
 庭田中納言

清水谷中納言
 町尻（通憲）宰相
 梅溪（通憲）宰相中將
 今城宰相中將
 竹屋前（光色）宰相
 六角（能通）三位
 岩倉三位
 三室戸三位
 伏原三位
 久我三位中將
 石野三位
 西園寺三位中將
 高松（胤房）三位
 池尻宮内卿
 倉橋三位
 清閑寺頭弁
 油小路中將
 武者小路少將
 小倉中將
 難波少將

右

高岡兵部大輔
 梅溪侍從
 六條侍從
 豐岡中務權大輔
 坊城右中弁
 葉室左少弁
 竹屋左衛門佐
 萬里小路右少弁
 清閑寺侍從
 花園大夫
 勸修寺大夫
 河野大夫
 裏松中務權少輔
 石野大夫
 北小路權少輔
 細川藏人

大行天皇山陵、今度依旧蹤御再興被宮千泉山候、右
 被仰出候事、

正月三日

慶應3年(1867)

三六〇之二

御葬送并御法事掛

泉涌寺御賄方

般舟院同

泉涌寺并般舟院掃除方

全御普請方

右両寺見廻兼帯何レモ昨夜中被命候、

正月三日

一 踐祚伝奏

一 全奉行職事

一 亮院伝奏

一 全奉行職事

一 御凶事伝奏

一 全奉行職事

右ノ通御座候、以上、

正月四日

一 泉涌寺勤番并火之番

一 般舟院全

一 京都火之番并御葬送御法事中詰切加藤能登守

一 勤番并火消等手代リ

大久保主膳正

石原清一郎

多羅尾主悦

木村宗右衛門

中村保三郎

醍醐大納言(忠順)

甘露頭(甘露寺勝長) 弁

大炊御門右大将(家信)

南閑寺頭(豊勝) 弁

日野大納言(資定)

坊城大弁(俊政)

青山左京大夫(忠敏 篠山藩主)

松平又七郎(信正 丹波亀山藩主)

水口藩主(明実) 藤能登守(康棟 藤所藩主)

本多主膳正

正月四日

御徒目付

河野三郎

水島三四郎

御小人目付

朝倉錠作

戸川直吉

右

崩御ニ付御用取扱被命候、

正月三日

三六〇之三
慶應三年一月

一 御内棺正月七日

一 御踐祚正月九日午刻

一 御入棺正月十日

一 御葬送御日限未相分

一 御道筋丁之方口ヲ被為 明、夫より西江蛤御門ヲ烏丸

南三條、東江伏見街道御順路泉涌寺

右之通御内定之段、塚本圖書より申来候付、おのつ

から仰渡之上は可申上越候得共、御心得旁此段申越

候条、

御内聴被達置候儀は、何分も可被取計候、以上、

卯正月四日

町田内膳憲

會藩

五人

嶋津圖書殿治久

小松帶刀廉清

横山主税

海老名郡司

桂 右衛門殿武久

嶋津伊勢殿謙訪甚六旧名

川上但馬殿運久

新納刑部殿旧名中三

〔島津忠承氏所藏本にて校訂〕

三六一 正月三日松平民部大輔御出立御供人名

公儀大番格

木村宗三

奥医

高松 雲

御勘定

澁澤篤大夫〔卷〕「榮一旧名」

御小姓頭取

兩人

御奥詰

右ノ外御供雜人無之、從兵庫横濱へ被為入、夫ヨリ佛蘭西国へ来月中旬御着船ノ筈、

於佛蘭西国五大州博覧會催有之、此所へ被為入外国重役へ御応接ノ上、外国所々御廻相成候筈、日本ヨリハ綾・縞子・縮緬・羽二重様ノモノ交易、蒔絵物重箱類

從江戸外船ニテ相廻筈、

御金二百万両程御持參、余程ノ御入用ニ相成候ニ付、

於外国御旅館御手賄ノ事、御金不足ノ分ハ於其所ニ取替、合形持參ノ上於横濱相渡候事、

一ヶ年兩三度位ハ、從外国幸便有之候由、外国へ被為入候上ハ、四五年モ御懸リニ相成候ヨシ、佛蘭西国迄海上凡八千里有之候ヨシ、

右卯正月四日聞書〔卷〕〔南部弥八郎報告〕

三六二 主上御瘡瘡ノ報

丁卯正月九日達

主上旧臘十二日ヨリ御発熱、御痘瘡御治定之処、御難痘之段御到来候、依之御一門方并島津左衛門一列、月次御礼罷出候面々明十日登城、 太守様 中将様へ可奉伺御機嫌候、

但着服麻袴

正月九日

刑部新納久倫

三六三 主上御惱ニ就テ謹慎布達

丁卯正月十日達

主上御難痘之段御到来ニ付テハ、御惱慮之御事奉恐入次第二候条、人々其心得ヲ以謹慎罷在候様、向々へ不洩様早々可致通達候、

正月十日

刑部

三六四 篠崎彦十郎ヨリ西郷吉之助へ小銃買入レ

照会

三六四ノ一 追々陸軍方御興張ノ儀ニ付テハ、ミニヘル筒御用御買

入モ可有之、然シ何レ長崎辺ニテ御調弁、又ハ御買入

〔髮力〕

等モ可有之哉、此表横濱辺ハ追々千挺揃、又ハ二三百揃之壳器相見得、已ニ先日モ千挺揃ノミニヘル筒相見

得申候得共、惣テ爰許ニヲイテ相願候儀ハ勿論、一二百挺タリ共御入用ノ有無難弁、無是非買入難整、其假差置候形行ニ有之、以来何様相心得宜候哉、良器価柄宜相見得候品御座候時ハ、百挺又ハ二三百挺ニテモ、能々吟味之上取入候テ、随分御都合相成ル候哉、又ハ不及其儀ニ次第御座候哉、兼テ御都合候処、相心得申度御座候、存付之旨内々御方迄御尋申越候、以上、

正月十六日

篠崎彦十郎〔伴曹〕

西郷吉之助殿

三六四ノ二

小銃一条別紙ニ相認置、山々残念口惜存、相案居中候処、柴山良助・黒田了助頻ニ相勸候儀ニヨリ、終ニ三百挺丈ケ此方へ引取候儀ニ致決心、今日少々手付金入置、近日横濱へ拙者・柴山差向、引結濟セ候合御座候、依テ代金凡三千両ニ相及、御微力ニテ中々難及彼、先達テ御問合ニ及置候於大坂御頂戴ノ五千両ノ内ヨリ、一応立替置申候考ニ御座候、自然別紙ニ認置候通、陸

軍方御用ニモ相成候ハ、右砲器惣テ大坂迄、舟便ヲ以テ差廻候様可致、左モ無之候ハ、於爰許相片付利分ヲ得候儀ニ取計度、若御用相成候時ハ、右ノ三千兩ハ御才覚ヲ以テ、弥縫御取計可給候、此旨以書添申越候、何分早便御返事承度、其内ノ処ハ、先ツ砲器其俵差扣置候様取計申候、以上、

正月十六日

篠崎彦十郎

西郷吉之助殿

三六五 黒田了助大砲運用伝習云々照会

黒田了助事、今般大砲運用伝習方トシテ、爰許へ被差出候処、追々御聞及モ有之候通、当地ノ儀ハ、於府下英式大砲手筋甚微弱ノ体ニテ、秀指師家モ無之段ハ、先便御問合申越通候処、右了助事伝習方不調処ヨリ帰府申出、御国許ノ様差向度願出、今日当地差立申候間、京着ノ上委細ノ形行ハ、同人ヨリ御聞取可給候、猶御家老衆迄ハ、例ノ通御附状差上候へ共、此旨形行申越候、以上、

正月十六日

篠崎彦十郎

西郷吉之助殿

三六六 九條圓真外十一名謹慎解免ノ報

九條圓真尚忠

是迄不束之次第第二付、重慎被仰付有之候処、追々老年及古稀候間、以格別之

御憐愍、今度重慎入洛被免候旨、

撰政殿被命候事、

但參 内并外出他人面会等、追々御沙汰之事、尤住居洛外之事、且月々老度計り帰宅不苦、一宿之外不相成候事、

中務 御宮

正親町大納言實徳

石山 少将

平松甲斐権介時厚

五條少納言

五辻 大夫

右是迄

思召有之、被止參

朝他人面会置、屹度可被為

御沙汰之処、就此度御凶事以格別

御憐愍出仕被仰下候、後后堅固改心可有之、

撰政殿被命候事、

廣幡權大納言

徳大寺中納言

長谷三位

是迄

思食有之、自分遠慮被止他人面会置、屹度可被為

御沙汰之処、就此度御凶事以格別之

御憐愍出仕被仰下候、後后堅固改心可有之旨、

撰政殿被命候事、

東園中將

萬里小路弁

是迄

思召有之、自分遠慮被免差扣他人面会置、屹度可被及

御沙汰之処、就此度御凶事以格別之

御憐愍出仕被仰下候、後后堅固改心可有之旨、

撰政殿被命候事、

石山右兵衛佐

是迄

思召有之、被止參

朝他人面会置、屹度可被及

御沙汰之処、此度就御凶事以格別之

御憐愍出仕被仰下候、後后堅固改心可有之、自今本番

所參勤可申、

撰政殿被命候事、

右之通去ル十五日被

仰出候段、塚本圖書より為知越候段、御留守居申出候

付、此段申越候条、

太守様

中將様可被達

貴聞候、以上、

卯正月廿四日

嶋津圖書殿

桂 右衛門殿

嶋津伊勢殿

川上但馬殿

新納刑部殿

町田内膳

(島津忠承氏所藏本にて校訂)

三六七 蓼田傳兵衛ヨリ西郷、大久保へ書翰

西郷吉之助様

大久保一蔵様

蓼田傳兵衛

平易要詞

京師

自鹿兒島

一輪拜啓仕候、春暖之禰罷成、御両所様弥御清祥被成御奉職、珍重御儀奉存候、於爰許、御両殿様益御機嫌克被遊御座奉恐悅候、然ハ極急飛兩度之便ハ、吉之助様貴輪被成下、忝拜見仕候、御書面ヲ以則達、御聽置候義ニ御座候、

主上崩御ニ付テハ、実以驚駭慟哭之仕合、御互ニ悲歎無際、愈、皇国衰頽ニ陥、難奈何御成行御座候哉、就テハ早速御兩殿様之間、不被遊、御上京候テ不被為叶事ニ御座候、尤下ヨリ頻ニ迫テ建言之輩不少、名分大義者日々多敷、(朱)「(建言者日々多敷)」ニオキテハ勿論ニ御座候得共、何分当世態前後深被遊御賢慮候趣モ有之、無御拋暫時御猶予ニテ、此節御大麥付、天氣御伺之御使者、公子方之内ヨリ被差立、可然

御決議ニテ、(朱)「(島津安宅)」今和泉之方へ相決、明廿七日御出帆ニ御

座候、關山家モ御用間ニ御一緒ニ被差立、其成行ハ大夫方ヨリ委細被仰越候半ト奉存候、其御許ニオキテ段々御熟評モ被為在、西郷様御駈下リ候哉ニ致承知候、不日御着ヲ御待申上候、兎角此末御尽力之御見留有之候ハ、被遊、御上京度義ト、於私式モ山々奉存次第ニ御座候得共、当分之御情態何様之向ニ御座候哉、倍表裏反覆之形勢ニ成行候半ト、奉恐察義ニ御座候、陸軍方追々御手ヲ被附、盛成向ニ成立申候、委細ハ今度罷登候向ヨリ御承達ト、相略申候、先々御答礼且御起居為可奉伺、如此御座候、恐惶謹言、

正月廿六日

蓼田傳兵衛(長胤)

西郷吉之助様

大久保一蔵様

再啓、帶刀様御壯健被為入候半、乍憚宜被仰上可被下候、

三六八 伊地知正治(海軍振興)ノ建白書

兵制ハ其国ノ形勢ニ從テ多寡ノ分アルハ、宇内不拔ノ定議ト奉存候、所謂佛国ハ大地続キノ大國故、自然陸

軍ヲ盛ンニシ、英夷ノ本国ハ日本ニ均シク小島故、其
興ルニ当テ第一海軍ヲ盛ンニスルノ類歟、然処西洋各
國ハ砲艦ノ道日ニ開ケ、且夕近時弥海陸ノ武備鬪争ニ
馴タル故、差当リ之処、万事

皇國ハ英夷ノ模様ニ從テ御手相付度奉存候、扱方今西
洋ハ、所謂春秋ノ末十二國ト相云ル勢ヒニテ、互ニ合
從連衡ノ術ヲ巧クミニ施候故、攻守トモ左迄ノ損得無
之様子ニ候得共、東洋諸國ハ太平ノ余リ、政綱相紊リ、
冗則多端ニテ真法立兼、万事時務ニ疎ク御座候故、此
時ニ当テ於

皇國又海軍ヲ盛ニシ給ハ、乍恐

列聖ノ鴻業ヲ被遊 御振興候儀、日ヲ数テ可奉待御事

ト奉存候、

右ニ付無申迄、海軍ノ御備ハ、當時於

皇國必要ノ事件御座候付、第一弘ク四海ニ言路ヲ御開
キ、其心ノ婦スル処、其策略之出ル処ヲ集テ大成シ給
ヒ、御基本相立候ハ、乍恐

王政御振興ノ御体裁ニ相叶、當時後世共ニ無御遺憾儀
ト奉存候間、先ツ諸侯并ニ百報事輩へ、左之御ケ条ヲ
以テ答書被 仰付、尤モ無位陪臣・浪士・工商ノ族々

リトモ、存寄候儀ハ十分献言可仕、左候テ献言ノ文意
等不分明ノケ条ハ、海軍掛ノ御重役ヨリ御面談モ被仰
付度御座候、

第一箇条

一世界ノ形勢ニ付、方今ノ急務ニ從テ、於
皇國大ニ海軍御振興之

思食候、就テハ

朝廷并列藩之兵賦、如何相定候テ可然哉、

第二箇条

一海軍惣督・船將以下運用器械・大砲・造船・測量等ノ
役人へ御採用相成、可然人材見込之所如何候哉、

第三箇条

一朝廷海軍局ノ御規模如何相立宜敷候哉、

第四箇条

一造船場并木・鉄材・石炭等ノ使用、何方ニ取候テ可然
哉、

第五箇条

一皇國中未馴ノ海軍御取立相成候半ニ、如何御趣法相立
候テ、人氣可令興起哉、

右条々日限ヲ刻シテ、答書御召相成候ハ、諸侯ハ

国論ヲ尽テ申立、有志ハ職分ヲ以テ申出、志アルモノハ良策嘉謀ヲ可奉献言候間、或其人ヲ御用ヒ、或
其詞ヲ御用相成候ハ、

皇国相当ノ海軍相開可申ハ勿論ニ御座候得共、乍恐
第一最初ヨリ、

朝廷上ニテ人ノ意表ニ出候不拔ノ御定論相立居、左
候テ虚懐ニ衆言御採用不相成候テハ、御兵権ハ相立
申間敷欵、仍テ不顧恐懼、右五ヶ条ノ目ニ付テ、私
考左ニ申上候、

第一箇条

海陸ノ兵備ニ常変之ニアリ、但ニ数ノ多カランヨリハ、
数寡シテ精銳成ルソ宜敷欵、夫大乱未鎮ノ間ハ、不得
止国ノ全力ヲ発、大兵ヲ動テ一時ノ勝ヲ決候儀ニ御座
候得共、常備兵ノ法ハ、国勢ニ応シ有用丈ノ人数ヲ立
置、深ク費用ヲ省キ積国力、擬一旦緩急ノ節ハ、十分
ノ御備不欠様相調度、尤海軍ノ儀モ徒ニ軍艦ノ数ノミ
御重ニテ、御国用費候半ヨリハ、先ツ航海術・砲術等
ノ諸吏能々致練磨候様、御趣意相立度奉存候、乍恐先
達テ御定相成候徴兵賦ノ規則ニテハ、
朝廷諸侯共国力疲弊シ、殊更

皇国ノ專要タル海軍ニハ、御手モ延兼候半欵ト、恐入
奉存候間、先ツ左之振合ニテ、常兵相備、国力御蓄へ、
其内海軍局ニテ航海・戦闘ノ術等十分致講習、異日大
業ノ御基本相立度奉存候、

一朝廷諸侯ト兵賦同様ニ難相成訳ニ御座候、子細ハ

朝廷ニハ諸侯ノ力ニ不及ノ大軍艦并海軍局御仕立、嚴
重ノ御備可有之ハ勿論、

皇国中稽古ノ標的所御居へ、有志ノモノハ自俟ニ修行
モ出来候様無之候半テ、不相叶哉、或於陸上是又同断、
騎兵砲台等ノ御備モ不事欠様可有御座候間、幾重ニモ
御吟味ノ上、不拔ノ

大令御発ノ方ト奉存候、

但英夷ニテ海軍ヲ專要ト仕候得共、陸兵又其備ナキ
ニハ無御座、左候得ハ

皇国ニモ甲乙ノ差別ヲ以テ、御手相付度奉存候、

一朝廷御兵賦

〔頭註本〕「海軍常備」
歩兵四千

騎兵四百 砲兵八百

右兩京其外常備陸兵

御軍艦八艘

内大砲二十門据付二艘、厚鉄艦二艘、内四門以上据

付四艦、

運送船十六艘

但蒸氣船・風帆船共不苦敷、内四艘ハ常備艦ニテ御

繫キ、外十二艘ハ平日ノ御用船等ニ御用可相成候、

右同断海軍常備

一諸侯兵賦

毎年一萬石ニ付三百兩ツ、ノ献金ハ、御引取相成度

御座候、

○一萬石ヨリ十萬石迄

一萬石ニ付上番兵士五人宛、

右衣服・兵器等一切自国構、

但其国へ他邦出兵被仰付候節ハ御暇、

右同他邦出軍ノ節ハ五十人宛、

但定法十年ニ付一度ツ、

五十日間ノ人馬・兵食・器械自国構、

○十萬石ヨリ二十萬石迄

一萬石ニ付前条同断、

右之外大砲二挺打手相付上番兵士差出候、

兵器・食糧一切自国構、

他邦出軍之節前条同断、相重ムル不及、尤前条ノ振

合ヲ以万事自国構、

○二十萬石ヨリ以上四十萬石迄

一萬石ニ付前条同断、

陸戰大砲差出候ニ不及候、

大砲二門以上ノ小軍艦一艘、

但一ヶ年ニ付二ヶ月ツ、江戸海・攝海番船上番

中万事自国構、尤大砲ハ四十封度以上、左候テ

他邦出軍被仰付候節ハ、兩京海番船差出ニ不及

候、

外へ他邦出軍ノ節ハ、運送船一船可差出、

但蒸氣船・風帆船勝手次第、

○四十萬石ヨリ以上六十萬石迄

一萬石ニ付前条同断、

陸戰大砲差出候ニ不及候、

大砲六門以上ノ軍艦一艘、一ヶ年ニ付二ヶ月、兩京

海番船其外前条同断、

但大砲二門ニテ三艘、三門艦ニ候へハ二艘ノ割合、

他邦出軍ノ節、運送船二艘、蒸氣船・風帆船勝手次

第、

○六十萬石ヨリ以上百萬石迄

一万石ニ付前条同断、

陸戦大砲差出ニ不及候、

大砲八門以上ノ軍艦一艘、

但大砲二門艦ニテ四艘、四門艦ニ候得ハ二艘、其

外前条同断、

他邦出軍之節運送船二艘、

但蒸氣船、

(二行不明)

第二箇条

其人在ハ其事業可相立ハ、古今ノ同形勢ト存候、然ハ皇国未曾有ニテ、此時ニ当テ專要成ル海軍御振興候ハシニハ、其人撰之必用ナルハ申迄モ無之、先ツ惣督ニテ

親王・堂上ノ内御一人

但御人材ハ勿論ニ候得共、第一御人徳專要ニ奉存候

得共、苟無其人候ハ、肥前・阿州・藝ノ如キ

人望有之諸侯ニ被仰付度御座候、

参与一兩人

右ハ左迄海軍漸々ハ不委敷候共、衆議ヲ無私心

分明ニ致用捨斟酌候モノ、所謂昨年蝦夷御開拓

ニ付、

朝議ノ節木戸準一郎、列侯ノ献議ヲ致折衷、言

上仕候様ノ体裁アル人物、可宜敷ト奉存候、

船將以下運用器械・大砲・造船・測量方等ノ御役

人

肥前・長崎・土州等ヨリ其人柄可有御座、尤旧

幕人・浪士、或不得止ハ夷人ヲモ御頼入相成可

然、右ニ付英式ヲ以テ参考仕候ニ付、海軍ノ諸

吏ハ、陸軍方ヨリ万事上席ノ格ニ被仰付候儀、

当然ト奉存候、

水夫・兵士等

右何レモ役人共ノ云議御採用ノ上、員数等御定

可相成候得共、兵士ノ儀ハ、現在御在合ノ軍艦

ニ、御入用ノ人数外ハ、先ツ御仕立ニハ及間敷

奉存候、

第三箇条

方今西洋各国之海軍局、王都ニアルアリ、都会地ニ有

アリ、海岸便宜ノ地ニ有アリ、今其例ニ從テ勤考仕候

ニ、兵庫・江戸ノ両所ハ

皇国ノ海軍所ニ不可欠ノ御場所ト奉存候得共、今日未

二御役人御国力共御不足ノ事候得ハ、今所ニ御仕立、俱ニ御勢ノ微弱ナルヨリハ、一ヶ所ニテ盛大御手相付候儀、実事外見共可為御当然候間、断然東京一ヶ所ニ御定、所謂本濱御殿ト申辺、如何ニモ其場所宜敷奉存候、扱其海軍局ノ内ニハ、第二ヶ条ノ下ニ申上候通、大小ノ諸吏相備候儀ハ勿論、左ノ振合ヲ以テ御分局向々ニテ、其道致講習候様相定度御座候、

運用局 器械局 測量局

造船局 砲術局

一右各局ニ付、何モ巧者ノ英人兩輩位ツ、御雇入ノ事、一通弁官兩人位宛、翻譯者兩人位宛、画図方・筆者・會計方・勘察方御備方ノ事、

一士官見習并九等諸生入学規則之事、

右ハ當時極々可也ニ御手相付ノ処ニテ、追々諸吏ノ人柄出来次第、広大ニ可成行ハ勿論ニ御座候、將又諸生等ノ員數、入学中規則極メノ次第ハ、早速ヨリ其筋巧者ノ輩へ、細々吟味被仰付候儀可然、何分上下貴賤ニ不拘、其道ニ志アルモノハ、十分ノ修行出来候御趣法相立候儀、專要ト奉存候、

第四箇条

造船所ハ船下シノ便宜有之海辺、銅・鉄・材木・石炭等明ヤスキノ地ヲ撰テ被仕立候儀、各国ノ通法ニ御座候得ハ、第一

皇國ニテ無類ノ上地ハ、箱館松前辺ト奉存候、越後ヨリ出羽・蝦夷地ニ跨テ夥シキ石炭ノ山脈アリ、津輕南部・蝦夷地ニハ船材木ノ上品ナルアリ、盛大ナル銅鉄ノ墾アリ、

一昨年箱館在留ノ英國商人ヨリ本国ヘノ注進状ニ、

数年ノ後終ニハ、英國女王ノ造船場ヲ蝦夷地ニ相開度趣法、并船材木ノ上品彼地ニ生候事共、細々申述

御座候(悉)「此新聞紙ヲ見ルノ有志者大ニ憂懼ス」

況彼地ヘ広大ノ造船場御取立相成候ヘハ、夫ヨリ追々蝦夷地御開拓ノ階梯ニテ、無上ノ御鴻業モ相立可申故、是非十分御手相付度奉存候、乍併只今迄出羽・越後ノ石炭山、未開墾モ無之事御座候ヘハ、先ツ江戸・攝海ノ間ニテ、可然場所吟味被仰付候欵、或先ツ此涯西洋ヨリ御買入船相成候方、却テ御入費モ無之極申唱候輩モ御座候欵、然共最初ヨリ御目的不广大候テハ、御成業モ狭小ニ相成候訳ニテ、殊ニ是迄商買船ノ儀モ、追々西洋風不相開故、風波ノ難ヲ不免候、依テ莫大ノ御

国ノ損ニモ相成来候間、依之先ツ造船モ民心染付候様御趣法相付、愚民モ其便利ヲ伺知候時ハ、不期テ海運ノ術相開、從テ海軍ノ御偉功モ相立候儀ト奉存候、

譬へハ可然土地ハ造船場御開キノ上、一年ニ付風帆ノ買船二十艘ツ、打立候賦ニテ、材木・銅鉄・綱具等相集候半ニ、山切下ノ材木、三年目ヨリハ造船ノ御用相立可申間、海軍所造船局ヨリ御人撰ノ輩へ、夷人御雇入ノ船大工・金匠等ニテ御打立相成、夫ヨリ毎年二十艘ツ、十年ノ後二百艘出来ノ賦ナリ、其出来毎ニ運用方ヨリ、夫々御人撰ノ輩差越、乗試ノ上

朝廷御用船又ハ諸侯以下買入輩ニ至ル迄、勝手ニ売買被差免、各利益ヲ得候落着タル相付候ハ、自然商民共ヨリ商社等ノ仕組ニテ、造船打立候モノモ可有之、其時官府ノ造船局ニテハ、軍艦ヲモ御造立相成候ハ、万々無疑念御成功ト奉存候、乍去民ハ愚夫ナリ、国勢ノ盛衰ニ不相構、故習ニ因修固着スルハ其常ナレバ、追々堅牢ノ御船無滞御出来ノ後ハ、(本志)是迄ノ風帆船ハ、(從來ノ大船ヲ云)一切御制禁相成度御座候、

第五箇条

皇国方今第一ノ御急務ハ、海軍ニ有之ヲ以テ、万事ヲ捨テ、弥盛大御手相付候

朝意ノ程ヲ、衆人ニテ納得仕候へハ、兼テ其道へ有志ノ輩ハ各俛尔相励可申、於茲欽御用立候モノハ、其官位・俸禄ハ勿論タルモ、志処モ一時ニ延候様有之、且ツ前文申上候海軍所五局ノ指南人等、十分御仕立候御趣法行届、諸国産物ノ運送・通商・往来ノ道等、是ガ為ニ弥盛ニ相開ケ、一同得利益候モノ不少トノ人心致安堵候様、御実行相立候ハ、更ニ

皇国中ノ人氣振立儀ハ、少モ無御掛念儀ト奉存候、乍併又大業御興起ノ時ニ当テハ、御国力其專要成ル処々不致充実候テモ、民心ノ方向定兼可申故、第一

朝廷上無用ノ御旧格、衣食ノ奢風ハ猛ニ御省略、屹ト節儉ノ御制度相立、扱御国力ハ其用へキ処ニ御用被成候様無御座候テハ、国非其国之類ニテ、譬海軍御振興之思食候共、億兆ノ人氣一新仕間敷、乍恐方今ノ

皇朝未至太平、況外国覬覦不少ノ砌ニ候へハ、取捨之御廟議、万世御遺憾無之様ト奉存候、九拜敬白、

(明治二年乙)
正月

伊地知正治

三六九 赤松小三郎横死ニ就テ本藩受教者碑文

先生、姓源、諱某、赤松氏称〔反裕〕小三郎、信濃上田人也、
 年甫十八、慨然志〔象山〕於西洋之学、受業同国佐久間修
 理及幕府人勝麟太郎、東自江戸西至長崎遊、方
 有年、多所發明、後益察時勢之緩急、專務英
 学、於其銃隊之法也尤精、嘗訊英国步兵練法、
 以公于世、会我邦兵法採用式且夕講習及、聘致先
 生於京邸、所其書更使校之原本、而肆業焉、
 今歲之春、

中將公在京師也、召是賜物、先生感喜益尽精力、
 而重訂書成十卷、上之公深嘉称、速命刻刷、
 得少有用於天下国家也、蓋先生平素之功、於是乎
 為不朽、可不謂懿哉、不幸終遭綠林之害、而
 死年三十有七、実慶應三年丁卯秋九月三日也、受業
 門人驚慟之余、胥議而建墓於洛、東黒谷之塋、且
 記其梗概、以表追哀意云尔、

薩摩

受業門生謹識

三七〇 主上崩御ニ就テ久光公御上京ノ布告

慶應三年一月

皇国日々不容易形勢成行候処、此節先帝崩御、
 新帝御幼年之事ト相成、実ニ御歎息之次第二候、御当
 家ノ儀、飽迄

天朝之御高恩ヲ被為蒙候上ハ、臣子之御情合御徒居難
 被遊儀ニ付、太守様へ御相談之上、中將様天氣御伺、
 且後年之御策被為建候処、御尽力之思召ヲ以、今般御
 上京被遊候、就テハ依時宜、太守様ニモ御上京可被為
 在筈候、御領内一同其意令体任、各更ニ其職掌ヲ勉励
 候テ、内外之手当向又十分行届候様可取計旨、被仰
 出候、此旨向々へ不洩様可致通達候、

正月

圖書〔本〕「島津」

右衛門「桂」

龍衛「川上」

伊勢「島津」

三七一 尚齒恩恵ノ令〔九十歳以上ノ者〕

御召相成候御衣服、右衆中以上年齢九十歳ノ者へ、御反物、右郷士并与力以下百姓・町人・浦人迄年齢九十歳以上、右ノ通毎年首ニ為御祝儀被下候旨被仰出、誠ニ以難有御仁恵之御事候条、一統謹テ無間違様年輩相記、来ル廿五日限り男女共名前取揃可差出候、此旨向々へ致通達、諸郷・私領へモ不洩様、早々可申渡候、但以来毎年十二月可申出候、

正月十五日

右衛門 刑部

尚齒恩恤ハ從來ノ典ナリシカトモ、年首ニ施行スルニハアラサリキ、以来之ヲ恒例トセラレシハ尤モ美事ナリ、

三七二 海陸軍創設令

方今日々不容易世態、第一武威弘張、別テ急務ノ事候ニツキ、海陸軍被召立盛大可被召成

御趣意ニテ、追々兵士ヲモ被仰付事候条、当分諸役人并書役小役人相勤候モノ、式拾五歳以下ハ都テ陸軍操練所へ別勤ニテ、稽古方被仰付、御役料米等は迄ノ通被下置候間、諸御役場ヨリ右年輩ノ者、当分相勤候モノ無間違様名前取調、来ル十五日限陸軍方へ可申出候、

但奥御小姓ノ儀ハ、非・番両日海陸軍へ罷在候様被仰付置候ニ付、別段取調ニ不及候、

丁卯正月

右衛門

這ノ令ヲ布テ各局壯年ノ者ハ、進ンテ海陸軍ニ従事セント、年齢ヲ不論冀望セリ、是ヨリシテ一層軍制整理振起セリ、

三七三 水野溪雲齋ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

〔番号一八ノ一〇と同文により削除〕

三七四 森寺大和守ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

〔番号二三と同文により削除〕

三七五 〔水野溪雲齋ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰〕

〔番号一八ノ六と同文により削除〕

三七六 京都守衛兵ノ名ヲ以テ久光公へ被附人名

大砲組 一番隊

但

中原猶介預

陸軍兵士 一大隊

但

一番隊ヨリ六番隊迄

右ハ此節 中将様 御上京ニ付、被召列候条可申渡候、

二月八日

三七七 伊地知壮之丞ヨリ大久保一蔵へ書翰

^{三七七ノ一}
慶應三年二月八日

呈左右候、御別後無御痛御奉職之筈、恐賀不斜奉祝候、

劣弟ニも無異罷成、日々翔鳳丸着船相待居申候事ニ御

座候、楮上 京仕候砌は、色々御好意被仰聞別て忝、殊

ニ立前ハ御相別品迄も御贈与深々奉謝候、不相替長蔵

等と囲棋之勝負仕、当分ハ少し勢宜敷成立申候、先は

御礼申上度、匆々奉得貴意候、恐惶謹言、

卯二月八日

伊地知壮之丞

大久保一蔵様

侍史

〔大久保利謙氏所蔵本にて校訂〕

^{三七七ノ一}

先夜深更夢覺蕭寥罷成、一詩ヲ賦候間、御笑之為書記

差上候、

満街車馬日喧煩

東走西奔俗事繁

楼閣影流春水岸

絃歌声湧夕陽村

向人言笑中心戒

世与浮沈暗恨存

報国微衷未全滅

帰来何必賦田園

三七八 在大坂木場傳内ヨリ大久保一蔵へ書翰

大坂

大久保一蔵殿

木場傳内

二通入

兩日は春和罷成候処、御壮栄被成候由、恐悦奉存候、

岩城より之尊書御礼申上候、^{〔朱〕〔幸五郎〕〔藤九郎〕}奈良原・志岐江之御問合

早速相渡申候、当地何ぞ格別承得候事無之候得とも、

濱崎方より仕出いたし候長崎廻上海住吉丸・平治船、^{〔朱〕〔天平次〕}_{〔防州〕}

未滞船之場不相知、兵庫乗戻り之船之外ハ、都て下之

關通船いたし候由御座候間、是迄と安心いたし申候、

一、長州山口江東照宮社有之、右江七郎は御滞宿にて、

追々三田尻辺江御遠馬も被成、其節ハ下居々々ニテ八ヶ間鋪由、三田尻之船頭咄為申由、尤三田尻より山口ハ四里、山口より萩ハ七りと承り申候、且浪人共当分ハ三田尻江ハ、一人も不罷居由御座候、此内より京・攝・大和辺江も散在いたし候半欵、

一、日坂事嶋原大夫仲居召列当所江下候逆、なら原なと探索有之候得共、足跡不相知由御座候、右ハ日坂もさるものニ御座候間、芝居見物などニ下坂為致、おのれハ其御地江ひそまり居候ニテハ無之哉、其地ニテ探索有之候を承付、(朱)〔良雄ヲ云〕彼大石がくらといたしたるニテハ無

之哉、此ものさるものと承り申候間、此節柄夫ほどの馬鹿いたすべく存せられ不申候、日坂下坂の事も、同人なしミの仲居ともより承り候事とか、扱は此女とも彼か為にハはかるとも、此方の為ニはかる事別て無覺束御座候、当方聞合なども、長邸出入之仲仕類江手を付られ候事ニテ、反問ニ落候儀可有之哉ト別て念遣鋪、(朱)〔休斎翁門〕林江も其段ハ先日論談いたし候へとも、何分聞合ニ手柄をいたし度底意有之候間、手のつかぬ所ニ手を付られ、あぶなき事御座候、

一、薩長等之事噂いたし候へハ、公義江呼出糺方いた

すとの事ニテ、此両三日ハ風呂や等ニテ之噂余ほと相静り候由ニテ、雑説承知不申候、

一、防州富海三田尻等之早船ハ、此方江借候儀ハ不成段、申渡有之候由、船頭咄為申由ニテ、入札等いたし不申候、此旨旁申上候、以上、

木場傳内

(元治元年カ)
二月七日
大久保一蔵様

(大久保利謀氏所藏本にて校訂)

三七九 桂右衛門ヨリ小松帯刀へ書翰

(島津圖書上京云々)

尚々、(朱)〔島津圖書〕宮ノ城上京一条、

御書ニテ被仰渡候処、至極御残情甚以込入申候、此度ハ只々上京トノミ候 御沙汰、是亦込入申候、御察可被下候、

一輪呈上仕候、弥御壮栄御勤奉珍重候、然ハ御軍艦龍行丸廻船ノ儀昨二十日相達、最早期限モ相迦レ、其上未タ成熟不相成、甚以残念千万ニ御座候、就テハ本田(朱)〔彦次郎〕ヨリモ申出趣、是迄折角昼夜来月十日迄ニ出来可被成

トノ事ニテ、別テ残念不少、此節ノ如キ御用又再モ無
之筈ニテ、残多御座候得共致方無之、乍然少々御日延
ノ場合モ御座候ハ、一日ニテモ早日出帆為致、一切
ノ仕舞方等ハ折角相仕廻、試乗ニテ宜敷候ハ、其俣
出帆ノ程ニ申達置候付、決テ油断ハ不仕、返ス〜出
来不被成、残念ノ至ニ御座候、新納氏〔前部〕其外着帆相成、
委細致承知、此節八十分ニ尽力仕心得ニ御座候、将又
鮫島元吉儀、此節小倉一条兒玉小介事件御届方トシテ、
小倉引合上京申付候間、御聞取可被下、何モ取込中不
能細事、宜敷御汲取可被下候、敬白、

二月二十一日

桂 右衛門

小松帯刀様

三八〇 蓑田傳兵衛ヨリ大久保一蔵へ書翰

(洋行書生等ノ件)

今般翔鳳丸〔本〕ヨリ守衛人数等被差登、明日出帆ニ付、一
翰拝啓仕候、過日爰許御別袖已来、船中御都合モ宜敷、
諸所御上陸、彼是御尽力ニテ疾御着京、猶御堅栄被成

御勤仕、珍重御儀奉存候、於爰許 御両殿様倍御機嫌
好被遊御座、奉恐悦候、其御地へ御奉 命之御用向モ
則ヨリ御尽力ニテ、万端御都合好相運候半ト奉恐察候、
西郷氏ニモ急速筑藩へ出張相成、夫ヨリ直ニ上京被仰
付候付、疾ニ着京、彼地情実ハ勿論、諸事御直話御承
達ト奉存候付、相略申候、長州辺之儀モ終ニ及内乱、
諸隊激発、却テ勢強盛之模様風聞有之、此末如何相成
可申哉、何分速ニ致鎮撫度事ニ御座候、今度翔鳳丸ヨ
リ村田新八〔本〕・西郷信吾ニモ、為学問稽古被差出、吉井
氏列下之水藩浪士・筑藩浪士兩人共、於出京之儀申立、
西郷等へ同船被仰付、上京被仰付候、尤浪士兩人へ為
路金拾五金ツ、銘々頂戴被仰付、委細ハ西郷等ヨリ御
承達可被下候、爰許相替儀モ無之、至テ静謐之事ニ御
座候、遠航一条ニモ、貴所様長崎ヨリ被仰越候通、期
限少々及遅々、今以串木野滞浦中ニ御座候、此二十三
日比ト申事ニ御座候付、多分遅クテモ廿四五日比迄之
間ニハ、廻船相成可申哉、廿人之都合ニ一人相欠居候
処、今一人無是非大方之向ヨリ被遣度、尤名越平馬ト
ヲ被遣候ハ、猶以仕合之段、町田氏ヨリ被仰越奉伺候
処、其通御許容被 仰出、則御内命有之、速ニ御請之上

被差出、当分滯浦中ニ御座候、然処^{〔卷一〕}民部某也^{〔九〕}田猛彦殿、去十

七日比ヨリ病氣ニテ、逆モ遠航之体無之、被罷帰御断

相成申候、実ニ残多事ニ御座候、病中付テハ不及是非

次第ニ御座候、又一人相欠候得共、モハヤ乗船ニモ差

掛申候間、夫形代ハ不被付賦ニ御座候、一統遣居回船

ヲ只管相待、皆々大元氣之由ニ御座候、筑藩ヨリ御仕

出之一封モ速ニ相達、被仰越趣逐一承知仕、則 御両

殿様達 御聴置迄、早々出帆之段モ被仰聞候間、御返

答モ不行届之儀ニ御座候、五卿御一条モ先好都合ニ相

運、御同慶奉存候、西郷氏モ急速上京被仰付、貴所様

ニモ御同断、実ニ跡少人数込入次第、早目御用向御仕

廻御帰郷可被下候、去ル十八日ヨリ太守様御機嫌好采^{〔卷一〕}

ノ尾御湯治御光越、御滞留中ニ御座候、求馬殿御供御^{〔卷一〕}

座候、当分ハ左中迄二丸へ寄被仰付、野生仕合之事ニ

御座候、西郷氏へ今日之便別啓不仕候間、宜御演述可

被下候、小松家御儀モ御用濟早々御帰郷被為在候半、

多分小蝶丸御同船欵卜、折角御待申上儀ニ御座候、

一御出立前致承知置候通、御名宛之御用封開封之上、達

御聴申候、然処別段小松家御自書卜相見得候一封、相

達申候、不及開封其俣差上候間、御落手可被下候、且

又ソ忽無申訳儀ハ、別封木場氏書状御用封卜心得違^{〔風〕}

間、御寛祐可被下候、右旁任便宜、先々御安否奉伺度、

如此御座候、猶期後鴻候、恐惶謹言、

二月廿四日 葦田傳兵衛

大久保一藏様 人々御中

三八一 高前国役金取調書

薩摩国

大隅国

高前国役金取調申上候書付

日向国之内

諸縣郡

琉球国

御官居家来

赤井直之進

御官居領分

一高前七拾貳万九千五百六十三石六斗三升壹合

内

三拾壹万五千五石余

薩摩国

拾七万八百三拾三石四斗五升壹合

大隅国

拾貳万貳拾四石五斗八升

日向国ノ
内諸県郡

拾貳万三千七百石余

琉球国

此国役金五千四百七十壹兩貳分三朱ト

銀三匁五分五厘六毛

掛高

但百石ニ付

金三分ツ、

右之通御座候、

御官居家来

慶應四辰年二月廿七日

赤井直之進印

上納申金子之事、

金五千四百七拾壹兩貳分三朱ト

銀三匁五分五厘六毛

右ハ今般

准后御殿御造立御入用国役金、高百石ニ付金三分之割

合ヲ以可相納旨、被

仰出候付、領分村々ヨリ取立、書面之通上納申候処、

仍如件、

御官居家来

慶應四辰年二月廿七日

赤井直之進印

金穀御役所

国役金取集掛リ

支配勘定

石川禮之助

御所御用取扱所へ罷出、右禮之助へ面会、

大宮御所御造立ニ付、国役金上納御奉書ニ、御料所万

石以上領分寺社領へト御座候、右ハ御朱印地、又ハ御

高前ヨリ遣シ有之候寺社領ヨリ、上納可致儀ニ御座候

哉ト、相尋申候処、左様ニテハ無御座、万石以上御領

分村々ヨリ御取立ニテ、御納可被成御達ニ御座候、御

料所並寺社領へモ国役割相掛リ候段、為相見候義ニ御

座候旨申聞候、且又御案文之通、村々小分差引不致候

テハ相濟不申候哉、御朱印高頭之割ヲ以相納候テモ、

宜ハ無御座候哉ト相尋申候処、御高頭割ヲ以御納被成

候テ、何モ於当方ハ差支無之段申聞候、且来月中ニ無

相違御納可被成旨、是又申聞候付、御国許へ早々可申

越旨申述置候、承合候成行此段申出候、以上、

但

案文之中ニ、無地高其外云々諸引ト有之、難相分候付、相尋申候処、別紙相渡申候付差上申候、

御留守居付役

卯十一月廿日

赤井直之進

新納嘉藤(立夫)二殿

右之通承合申出候付、御高頭七拾貳万九千五百六拾三石六斗三升、百石ニ付金三分之割ヲ以御上納相成候テ可然、尤御届ニ相成居候荒地等モ御座候ハ、差引御上納相成候テ可然ト吟味仕、此段申上候、以上、

卯十一月廿日

新納嘉藤二

(關山)
糺様

追テ、申達書ニ、来ル廿日迄之内取調申出候様ト御座候付、爰元ニテ取調難相成候間、御国元へ早々往復之上、申出候様可致段、去月廿二日御用取扱所へ為申出置申候、此段モ申上候、以上、

本文申出通可被仰付哉、於其儀ハ御金之儀ハ、御上納前大坂御留守居へ可被仰渡哉ト吟味仕、此段申上候、以上、

御勝手方掛

卯十一月廿四日

御用人

島津忠義家記
(東京大学所蔵本にて校訂)

三八二 岩倉具視ヨリ大久保一藏へ書翰

其後ハ不得止事御不意ニ打過候、弥御安全珍重候、扱旧冬ハ、

主上ニモ不寄存知御事無申条次第、悲歎此事ニ候、右

ニ付幽閉輩可被免御場合候処、何等ノ御沙汰モ無之、

早速(二)齊敷二公并内公等へ申上候得共、二公ニハ如何ノ御事

哉、尚御勤考ト計、終御返答モ無之候、内公ニハ段々

御周旋、

櫻木公ニモ同様御大尽力被為在候得共、無某(一)〃終不被

免御治定ニ相成、実以悲歎無申条次第ニ候、右ニ付、

過日貴所在坂否、内公迄愚息ヨリ中伺候処、御帰京無

之旨御沙汰、不得止心事并上氏申入候処、細答何モ令

承候、貴藩モ段々御周旋、尚又一涯御周旋可有之旨忝

存、過日井上氏へ申入候通り、此俣ニテハ

先帝ノ御不明不朽ニ相伝リ、且

新帝御孝道モ不被為立儀、其上人心モ不穩、治乱ノ堺

トモ被存候次第、実ニ憂苦不少候、尚又乍此上可然御周旋、

朝威相立候様偏ニ所祈候、過日御帰京無之旨ニ付、井

上氏へ申入置候得共、尚又貴所迄申入候間、何卒（不）（常男）（西郷）

国家ノ御為宜ニ御尽力、偏ニ頼入存候、此小松氏・大

島杯（吉之助）へモ宜ク御申伝頼入存候、日夜不堪憂愁次第ニ候、

実ニ言語ニ絶候、諸役人不明所置大歎息ノ外無之候、從

来尹宮ノ奸相唱候狸ノ名、不空事ト呉々歎息候、只今

御一新ノ御場合、何卒早朝儀相立候様致方懇願候、小

子憂愁御憐察、御扶助ノ程偏ニ頼入存候、兼テ申入候

通貴藩

朝廷ノ御柱石ト存候間、何モ打明心事申入候、何分当

殿下ニテハ、迪モ治国無覚束候、櫻木公御還職ニ相

成候様所祈候、面謁委ク申入度候へ共、幽閉中不克其

儀、先ツ荒々以書中申入候、何モ宜ク頼入存候、先早

々、不乙、

正月六日

追過日井上氏へ申入候、今度幽閉不被免 御遺勅ト
相唱候儀ハ、全幕秘策ト存候、何ゾ其辺御承知ノ事
モ無之哉承度存候、會藩ハ口氣ニハ幽閉不好由ニ候

間、全幕秘策ニ公并議奸深承諾ニテ、所置ノ事願ト
被存候、先承度思案申入候事、

一覽後早火中頼入候、

二月 和楽岩倉具視

大久保一藏殿

極秘

〔表紙〕

忠義公史料

市來四郎編

慶應三年 自三月
至四月

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事執筆史料」
(紙数八五枚)の記載あり〕

目録

- 池田次郎兵衛ヨリ黒田嘉右衛門へ對州事件ノ書翰
- 寺島陶蔵外国記事
- 三條實美黒田へ面晤セラレントノ書翰
- 小松帶刀ヨリ伊地知壯之丞へ書翰
- 佛蘭西国人ヨリ告書翰秘写玉里邸所蔵
- 永平寺葛藤事件
- 水野溪雲齋ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

〔水野溪雲齋ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰〕

兵備ニ就テ禄高制限布達

兵庫開港ニ就キ御書取被下

兵庫開港ニ就キ久光公上京御促シ

山階宮其他二十三卿幽閉被免

御滞坂中御警衛之次第

久光公御上京宿割及ヒ附駕人名

久光公御上京從駕兵隊へ布令

大小銃等手当ノ令英式ノ軍制

軍賦改正ニ就テ知行高制限

久光公御上京布告

久光公御上京ニ就キ俗論

〔軍賦改革ニ就キ地頭・郡奉行ニ達書

大小砲隊名簿

新田開發之達書

福井藩青山小三郎ヨリ大久保一蔵へ書翰

大久保一蔵ヨリ西郷吉之助へ書翰

〔福井藩士毛受・青山ヨリ大久保利通へ書翰〕

大久保一蔵ヨリ小松帶刀へ書翰

水野溪雲齋ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

大極丸代価一件

神代勝兵衛ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

五卿取扱向照会

〔全上回答〕

福岡藩神代勝兵衛ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

三條殿ヨリ黒田へ酒肴ヲ贈ラル

久光公泉涌寺御参拜

武部諫尾ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

〔東久世通禧ヨリ薩長へ達示〕

兵庫開港ニ就テ御達書写

三八三 池田次郎兵衛ヨリ黒田嘉右衛門へ對州

事件ノ書翰

〔番号七〇と同文により削除〕

三八四 寺島陶蔵外国記事

洋曆千八百六十七年第四月四日我丁卯三
月四日

英議院ニテ所問、(Laurence Oliphant)オリハント問曰、(Clarendon)外国事務密記簿ニ

申ス、江戸在任ノ佛ミニストルナル、(Lorenson)ロセ名ト、日本

政府ト議シテ、一ノ商法条約ヲ立テ、其ヶ条ニ、將軍ノ兵ニハ、軍用ノ衣服類・兵器類ヲ給スルコトヲ載ス、

又國中ノ商人ニハ、黒キ羅紗及軍用ノ為ニ備フヘキ諸品ヲ買フヲ禁シ、之ヲ背ク者ハ嚴刑ニ所スヘク、就ヒテ若シ佛政府ヨリ望ム所ノモノアラバ、皆之ヲ給スベシトナリ、此事実ニ在リヤ、

又本条約ニ云、日本政府ハ其國ニ産スル所ノ銅余分アラハ、時々公ケケノ入札ニテ売ルベシト、然レトモ日本政府ハ、外国政府ニ銅ヲ輸出シテ条約ヲ破ル、此事実ニ在リヤ、

〔右ハ議院ニテ論セントスル所ノヶ条ニテ、未ダ論ハ見ヘス、左ニ掲ル所ハオリハントカ説ナリ〕

外国政府日本ニ於テ、ミカトノ權ヲ無上モノトセシ也、何トナレバ、加印アルヲ以テ本条約トシテ、互ニ取リ替シタレハ也、故ニ総テ全權ノ事ハミカドノ可否ニ從フベシ、若シミカドヨリ政柄ヲ將軍ニ仮セサレハ、外國人ハミカドノ意ニ從フベシ、然レトモミカド無キ間ハ、摂政ヲ日本ノ無上ノ有權トス、今此摂政ノ權ヲ強フセンニハ、大諸侯會議スヘシ、之ヲ摂政所議衆ト名

クベシ、摂政ト会議衆ト合シテ、外国ノ諸事ヲ議スベシ、將軍ノ命ト雖モ、右摂政ト会議衆トノ可否ヲ經サレバ、行ハル可カラサルコトヲ、外国ノミニストルニ達シラクヘシ、又条約ニナキ港ニ住セル外国商人ハ、總テ開キタル港ニ帰ルベキコトヲ、將軍ヨリ外国人ニ命セヨト、摂政ト会議衆ヨリ達スベシ、若シ外国人婦ラザレバ、其居ル所ノ領主ニ、其外国人ヲ返シ遣ルベシト、摂政ヨリ命スベシ、之レ甚ダ緊要ナル一事ナリ、諸摂政ハ常ニ外国事務ニ就テハ、条約ノ細目ニ注意シテ、書翰ヲ直クニ外国ニ從ハサレバ、直チニ外国ミニストルニ

勅使ヲ遣ルヘシ、然レトモ摂政ト雖モ、摂政所・會議衆ノ議ヲ經スシテ、政ヲ発スルヲ得ス、就テハ摂政所・會議衆ノ班ニ加ハリタル大諸侯ノ臣、相合シテ一大兵勢ヲ編ミ、一指揮者ニ属シテ、之ヲミカトノ兵ト名ツクベシ、

然リト雖トモ大諸侯互ヒニ私怨ヲ忘ル、コト能ハス、且ツ各其父母ノ本国ノ善事ノ為メニ、協和スルコト能ハサレバ、右ノ如ク設ケ立ル政体、決シテ行ハレザルノミナラズ、近歳ノ内日本全国ハ外国人ノ有トナルコ

ト疑ナシ、

朱書ニテ

謹按、ヨリハントニ代テ此事実ニ在リヤト問フタルキ、密簿実ナリト答フル寸難スル所ハ左ノ如クナランカ、佛ノミニストル私意ヲ以テ、將軍ニノミ軍器ヲ給シ、反テ全国ヲ防キ、無上ノ主タルミカトノ干城タルベキ諸侯ニ、武器ヲ備ヘシメストイヘハ、從來ノ条約ハ將軍ト結フノミニシテ、日本全国ト結ヒタルモノニ非ラズ、黒羅紗ヲ國人ニ禁スルハ可笑ナリ、阿片ハ毒藥ナレハ、國人喫シ恒業ヲ怠ランヲ恐レテ、入ル、ヲ禁スルナリ、黒羅紗何ノ害アルヤ、國人之ヲ買フテ軍装ノ用トナシ、我綿服ヨリ温且堅ナラハ、則チ我國ヲ守ルニ宜シカルベシ、而ルニ自守ヲ専ラニシテ、其手足ハ將ニ全身ト同時墜斃スルヲ悟ラズ、故ニ佛(ママ)ナラス將軍ハ仁ナキニ似タリ、

次条ニ、銅ヲ日本政府ヨリ外国ニ売ルハ、条約ニ違フ也、条約中ノ事、皆貿易ヲ盛ニスル事ヲ助クルカ為メニ、取替シタルモノナルニ、入札ナクシテ、政府ヨリ政府ニ直チニ輸出セハ、商賈ノ利ナク、貿易ノ盛ンニナルヲ妨ルノミナラズ、自ラ条約ヲ破リ、非法ヲ兩國

ノ臣民ニ示スナリ、又オリハントノ説中ニ、開カザル港ニ外國人ヲ置クヘカラサルヲ、大切ノ事ナリト云ハ、江戸近海ノ横須賀ニ、仏人ヲシテ造兵所ヲ建シム、本〔朱〕〔造船所ヲ云〕仏人此局ヲ勸メテ建ラシムルニ遠謀アリ、名ハ諸侯ノ暴ヲ挫クト云テ、実ハ朝鮮〔解カ〕ノ後ニハ造兵所ヲ我モノトナシ、先ツ將軍ヨリ倒シ、次ニハ先ニ謀テ兵器ヲ持タセシメサリシ諸侯ヲ、擒セントスルニ在リ、故ニ之ヲ放逐セスンハアルヘカラズト云也、故ニ本文結尾ニ、
國人和合セサレバ國危シト也、

寺島陶藏〔宗則〕

三八五 三條實美黒田へ面晤セラレントノ書翰

〔番号一八ノ八と同文により削除〕

三八六 小松帯刀ヨリ伊地知壯之丞へ書翰

愈御多样被成御滞坂、奉珍重候、然ハ大和商法御問合之趣、早速御答可申上之処、四五日大和辺江参宮共イタシ居、御答延曳相成申候、大和方ハ兎角被仰越候通、

御手被召付事トモ相考申候、清水壹条ハ此節

御上京ニモ相成候得ハ、別段差越ニ不及事欵ト相考申候、其上彼之銀札為替等之事、御決定之上ニ無之テハ、トフモ不都合ト相考申候、廿二三日方ニハ下坂之心組御座候間、其節御直話可致候得共、先々御報迄如斯御座候、以上、

三月十九日

再白、時下随分御自愛可被成候、松岡氏江モ宜敷御伝言御頼申上候、別紙江張紙御返シ申上候間、何分ニモ宜敷御取計ニイタシ度候、

壯之丞様

帯刀

御報

三八七 卯年三月仏人ヨリ告書翰秘写

〔玉里邸所藏〕

佛蘭西國人外國局ニ贈來ル書〔朱〕〔博覽会ニ就テ〕

普漏生之政府飽クコトナキノ欲心ヲ逞シテ、戦争ヲ起セシニ依リテ、政体ノ平穩ヲ害セシハ、痛歎スベキ事ナルベシ、若シ此戦争ナクハ、宇内專一ノ博覽会モ、

一時歐羅巴ノ盛昌ヲ開クトモ、其勝盛秀美ナルヲ以テ、世人ノ望ヲ失フ事ナカルヘシ、日本ノ博覽物モ次第二（本）輸送シテ、此事ヲ助成アリシカハ、人皆其功アルコトヲ称セリ、又日本ノ交易及ヒ工作ノコトニ於テハ、大ニ益アル所ニシテ、実ニ亞細亞州中ニ卓絶ストイフベシ、然ルニ此事ト反シテ国内政務ノ事ニ就テハ、大君政府統御ノ權ヲ失フ恐レアリ、歐羅巴ニテ未タ曾テ聞カサル大名ノ政事、將ニ与テ其威ヲ振ハントス、是レ向後ノ憂ナキニシモアラズ、此六ヶ月以來ヨリ薩摩侯琉球王国ノ名、世体ニ関ル事トナレリ、其以前ハ我等素ヨリ之ヲ知ラス、況哉宇内政務ノ上ニ其名ヲ称スヘケンヤ、然ルニ今日ニ至リテハ、皆之ヲ称セリ、既ニ博覽會ノ名籍ニモ、松平修理大夫源茂久琉球統轄ノ公殿下ト記セリ、然ルニ

帝國日本ノ名其產物ノ事ヲ記スルヲ見ス、予之ヲ知ル、大君殿下ノ使節ト、薩摩侯ノ使者ト会合アリ、此ノ会合ノコトハ、親睦ヲ旨トシテ、巴里ニテ日本ノ事務ニ係ルレスセプト云ヘル人ノ家ニテ催セリ、其時双方ヨリ決定アリシハ、琉球ハ其俣ニ置キテ、薩摩侯ハ博覽會ノ事ヲ別ニシテ其旗章ヲ用ヒ、大君ノ博覽會ト俱ニ

之ヲ行ハスト、此会合ノ故ヲ以テ、予今日薩摩ノ博覽物ノ飾ヲ見ルニ、佛朗察語ヲ以テ日本薩摩ノ政府ト書セリ、右ノ事件ニ就テ、今巴里ニアル大君殿下ノ使節ニ、予カ意見ヲ述ヘ、其形勢ヲ説シハ、予ニ於テ大事ト思フコトアレハ、篤ト熟考アルヲ信スル故ニ、既ニ外国局ニモ此事ノ告知アリシト見ユ、予又巴里ニアル大君ノ使節ニ、其望ニ応シテ、薩摩侯ノ製セシ褒賞金ノ図ヲ写シテ出セリ、是ハ博覽會ノ初日ニ、薩摩ノ使者ノ頭ヨリ、我

薩摩琉球国王之褒賞金（薩摩勳章）



国帝ノ眼前ニ呈セルモノトイフ、此書ニ添ヘル其図ヲ
製シテ之ヲ贈ルナリ、右巨細ノ事ニ就テハ、其政府ノ
使節ヨリ告知アルヘシ、今日飛脚船ノ出帆ニ望ムヲ以
テ、委曲ヲ尽クスニ違アラス、

千八百六十七年第四月二十四日我卯三月二十日

チャルレ・デ・ラパルト記

ローニ
羅 尼 閣

日本外国局へ呈

三八八 永平寺葛藤事件

過日ハ愚息参上仕候て御馳走頂戴、難有奉存候、其後
参上可仕と存候へ共、兎角持病氣にて因循罷過申候、
○空印寺参候て兼て願立候永平一条、寺院寮ノ方ハ一
決にて政府へ申遣候処、政府にて決兼候故、誰か政府
ノ御方御尽力不被下候てハ、寺院寮ノ力計ニ届兼候趣、
内々洩聞致候由故、是非御一言御発被下度、願上く
れとの事ニ御座候、以参申上筈候へ共、今日も八田(悉)
翁(知也)と近辺へ参候筈故、兼て御承知之事ニも候間、乍自
由以書中申上候、已上、

三月廿一日

(天久保利通)
甲東盟台

(本)「卷下方平旧名」
左二一

(天久保利謙氏所蔵本にて校訂)

三八九 水野溪雲齋ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

(番号一八ノ五と同文により削除)

三九〇〔水野溪雲齋ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰〕

(番号一八ノ四と同文により削除)

三九一 兵備ニ就テ禄高制限布達

兵備之費用ハ其国之全力ヲ以致整調候儀、古今之通例
ニ候、既ニ世態變遷イタシ、乱階相開候へハ、御軍政
之儀眼前之急務故、海陸軍被召建、英式御採用ニ付、
大砲ハ勿論絶条銃御備相成候へ共、未十分御備付致不
足候付、今般別紙之通御軍賦ヲ以、
御領内一統高割被相定、急速兵備相整候様有之度
思召ニ候、元来武家知行高之儀ハ、各分限ニ応シ、大
小之兵賦有之事候条、一統此旨ヲ存シ不致忘却、関係

之諸局ハ猶又兵器之備不備、精微遂吟味申出候様御沙汰ニ候事、

(川上久齡)
龍衛
(新納久徳)
刑部

卯三月廿四日

一高百石限 寄合並以上

一高六拾石 諸士

一自作高拾貳石限、高貳拾五石限 衆中

右ハ此節応分限被為定候過上高ヲ以、二男以下夫々御奉公相動候年輩被成候者、此節分限別立ニ付、附属高相片付迄之間、高相求候儀被差留候、付テハ寄合並以上之儀モ可為同断候、

一過上高相求候者ハ、一統此涯百石限、諸郷之儀ハ三拾石限、

一過上高弘ニ付テハ、当六月十五日限精々致引結届可被申出候、右ハ此節御軍賦ヲ以給地高之割被相定候付、分限外過上高附属等之儀、右之通被仰付候条、聊心得違之事共有之間敷候、此旨向々江可致通達、諸郷江モ不洩様可申渡候、

三九二 兵庫開港ニ就キ御書取

一御書取 一通

但今度開港之儀、別紙之通從

大樹公建言有之、不容易重大之儀ニ付、早々

中将様御上京

御見込之趣、可被

仰上旨之儀ニ付、

一右江相添建言書式通

伝奏

飛鳥井中納言様

雑掌

本多左京

右より御達被成候儀有之候間、只今罷出候様雑掌中より之切紙到来、罷出候処、

御書取等右雑掌を以被成御渡候間、早速

御国元江可申上越管御座候得共、既ニ近々

三月

(島津久徳)
圖書
(桂久武)
右衛門
(島津広善)
伊勢

御上京之善候間、中途行違ニ相成候ては、大切之御用日延ニ罷成、恐入候儀ニ付、如何致し可然哉と申述候処、近々

御上京之御儀ニ候得は、四月中迄ニ御答可被

仰上と之事候ニ付、御間ニ御合可被成候間、

御着迄御扣置御宜く可有之哉ニ被存候旨申聞候間、宜

く御聞置給度旨申述置候、

御書取写三通差上申候、

右之通私差支、御留守居附役寄東條慶ニ相勤申候間、

此段申上候、以上、

卯三月廿四日

内田仲之助政風

糺様関山

〔島津家氏所蔵本にて校訂〕

三九三 兵庫開港ニ就キ久光公上京御促シ

卯三月廿九日

口裏張紙

島津大隅守

今度開港之儀、別紙之趣從〔朱印〔前記参照〕〕大樹建言候、然処一昨年

十月三港

勅許之節、於彼地ハ被止候

御沙汰之次第モ有之、不容易重大之儀ニ付、猶早々上

京見込之趣、無腹藏言上可有之事、

但所勞等候ハ、彼是隙取候ハ、見込之趣先以書

取、来四月中可有言上事、

三九四 山階宮其他二十三卿幽閉被免

〔免親王〕

〔実愛〕

山階宮并正親町三條卿、其外二十二卿御一同、今日八

ツ後御幽閉被免候由、尤何等之御書付等も無之、只被

免候との御事之由、大原卿御内立花右近入来、態々し

三月廿九日

内田仲之助

大久保一蔵様

〔島津家氏所蔵本にて校訂〕

三九五 御滞坂中御警衛之次第〔久光公〕

三九五ノ一

一昼夜当番三小隊、内一分隊御式台、其余ハ在宿、

一御式台番左之通、

監軍 壱人

小頭 兩人

但新番御取次番兼、

兵士 貳拾人

内伍長四人 御時計番兼、

一六角砲打手四人(卷)「英商ガラバ贈ル」

当番内兩人ツ、御式台番

但相凶砲打役兼、

一守旗隊・太鼓役等、右ニ準シ隔日当日タルヘシ、(番カ)

一昼夜空砲式声相聞候ハ、当番之分ハ御屋敷内、其

余ハ本陣門ヘ馳集、

但六角砲打手之儀ハ御式台集、

一毎日曉六ツ時并暮六ツ時ニ、諸隊点檢可有之事、

但非番之隊タリトモ、夜分外出不相成候事、

一御供目付御軍賦役之間式人ツ、当番之事、

一一封度六角砲二挺打手六人、

右中原猶介御預被仰付被差越候、左候テ伏見ヨリ陸軍

隊之先へ被相備、御行列之内へ被召入候様可申渡候、

三月

伊勢(卷)「島津」

三九五ノ二
卯三月

一一封度六角砲二挺

右伏見ヨリ陸軍隊之先へ被相備候旨、申渡置候得共、

陸軍兵士左右二隊之部へ被相備候条可申渡事、

右之通御達替相成候付、向々へ申渡候事、

三九六 久光公御上京宿割及ヒ附駕人名

三月十六日

午刻御途出、

同 十九日

午刻御発駕、

鹿兒島前之濱

御乗船、

雨天ニ候ハ、磯御茶屋江被為入、同所ヨリ 御乗船、

十三里

(筑前) 山川

三十七里

(宮崎) 外之浦

三拾六里

(同上) 細島

三拾六里

(大分) 佐ヶ關

四拾五里

(広島) 御手洗

三拾六里

(香川) 志戸ヶ浦

式拾七里 兵庫

拾三里 大坂

御上陸 御滞在中三日

大坂 御立

川登 拾里

伏見藤之森 御小休 三里

京都御屋敷

右ハ此節 〔采〕〔久光公〕 中將様就

御上京、右之通被遊御通行候旨、

被仰出候段申来候、向々へ可致通達候、

遊撃軍一隊海軍兵士

取締役

〔采〕 西千嘉〔寛一郎旧名〕

兵士

久保 武七

谷山 平八

佐野半之丞

大山新五左衛門

伊東嘉惣次

美代嘉左衛門

松方彦次郎

神田橋嘉左衛門

家村清藏

澁谷吉十郎

取締役

勝部謙助

川上嘉内

種子島篁一郎

澁谷平藏

兵士

石原嘉四郎

岩城源次郎

伊東傳七郎

肝付伊右衛門

牧野清右衛門

木村鞆次郎

川上彦八郎

取締

大山雄助

上村六郎次

野村正八

河野直助
兵士

園田佐八郎

伊地知剛八

永田新兵衛

平野六郎次

本村彦二

松田直五郎

佐藤矢兵衛

取締役

八木直之丞

山之内才助

時任新左衛門

河野彦四郎

兵士

岩元彦十郎

武雄助

平瀬治兵衛

湊川甚之丞

坂元岩吉

山内平八
田中正之助

取締役

豎山半次郎

桑畑金之進

岩元喜之助

新納矢五左衛門

兵士

谷山彦兵衛

加世田直助

園田仲太郎

否笠猪之助

若松若次郎

鮫島龍太郎

知識直之丞

取締役

川上龍助

永吉幸之丞

野崎岩太郎

河野彌七郎

慶応3年(1867)

兵士

津留半之丞

竹之内清一郎

大原伸左衛門

田中喜右衛門

野津休右衛門

里村万次郎

肥後六郎太

取締役

神宮司仙之助

山口孫右衛門

有川庄八

河野十右衛門

兵士

野村十兵衛

中村正太郎

川邊與左衛門

河野仲大夫

吉井彦左衛門

仁禮喜次郎

篠原佐太郎

取締役

榎本新十郎

安藤清之進

長崎八郎右衛門

大窪孫左衛門

兵士

寺師喜一郎

前谷善兵衛

石原源五右衛門

谷山次兵衛

河野佐八郎

吉井平太郎

安田太郎右衛門

昇預取締役

神宮司半助

玉薬方取締

町田武輔

御鉄砲掛

栗川孫右衛門

人馬方普請方

肥田喜平次

讚良休次郎

兵糧方兼宿割方

兒玉嘉兵衛

太鼓役

丸田助四郎

喇叭役

伊地知四郎

三九七 久光公御上京從駕兵隊へ布令

条々

此度

中将様御上京ニ付テハ、先達テ被

仰出候御趣意ノ次第ニ候間、申迄モナク候得共、御供

ノ諸隊法律厳正ニ相励ミ、聊タリトモ御国威ヲ不失様

可申談事、

一諸隊一同英式〔朱〕〔此時ヨリス〕ニ任セ四列シ、小組合被仰付候条、各隊

中申談組合可有之候、右ハ心得モ有之筈候得共、平日

組中信和、起居飲食ヲ俱ニシ、事変ノ時ハ如一体可相
励候、勿論四人ハ賞罪賞罰ヲ同スルノ御定候間、其心
得可罷在候、

但

譬ハ平常・変時共一人可賞ノ事アレハ、四人ヲ共

ニ賞シ、一人法ヲ犯セハ四人準シ、或ハ万一外方

へ取引等ノ儀付、

御名目ニ可相拘事モ候ハ、御物御払ニテ、四人

へ同断引付可相渡也、

一四列ノ内老人伍長、或ハ伍長助ノ者内定可致置事、

一大砲隊ノ儀モ、四人ノ組合ハ小銃隊同様可相心得事、

一陪卒ハ一小隊付、拾巻ヨリ以下可成可致減少候、

但

大砲隊ノ儀モ同断、左候テ現陪卒人数御軍賦役へ

申出置、増減ノ節モ同断可申出候、

一直触〔朱〕〔名御家老組〕以下老人ニテ卒召列候儀不相成候、

但

医師ノ儀ハ可為別段、

一自分荷物ノ儀、出立前々日隊付ノ小荷駄役人ニテ取束、

蒸気船方ト立会可相渡候、

但

直触以上皮庫壹ツ、其以下ハ兩人ノ間ニ壹ツ、陪卒ノ儀ハ主人荷物ヘ付込、足輕・夫丸ノ儀ハ四人

間ニ同断、

一船中ノ規則ハ乗頭ヘ御委任ノ事候間、相定候法則ハ御軍令同様可相心得事、

一休泊ノ場所并陣営割渡ノ節、私ノ好悪申出間敷事、

一着陣迄ノ間、小荷駄役人ノ外自分荷物ニ致関係間敷事、

一行軍中陪卒ハ小荷駄ノ跡ニ相纏リ、小荷駄役人惣裁ニ

テ、付足輕致見締可罷通候、尤押買或ハ不作法ノ儀共

無之様、主人等ヨリ嚴敷可申付事、

一行軍中用便ノ節ハ四列ノ組合ニ相断、用濟次第元ノ押

場ニ可走付事、

一海陸軍行軍并陣営中酒会停止ノ事、

一陣中互ニ律議相嗜、勉勵一和勿論ノ事候得ハ、心付候

儀再三異見ヲ加ヘ可申事候、万一行跡不相改懸念ノ者

モ候ハ、不差置可申出事、

一人氣ノ向背勝敗ノ事機、考付ノ事件ハ同断可申出事、

一落文・張紙或ハ如何ノ流言承得候節ハ、同断可申出事、

一行軍陣営中臨時ノ法令嚴敷可相守事、

右条々被相定候条、為御受ノ証書毎隊四列ノ組合相記候一冊取仕立、各姓名ニ花押相居ヘ可差出候、

但

小頭以上諸役者儀ハ不及組合候得共、御受ノ姓

名花押ノ儀ハ、可為同断候、

右之通嚴肅相守、聊違背有間敷モノ也、

三月

右慶應三年丁卯三月廿五日、中将様御上京御供ヘ申

渡条書也、

三九八 大小銃等手当ノ令(英式ノ軍制)

大小銃等手当之儀ハ、持高ノ等級ヲ以テ被相定候ニ付、

西洋製施条銃ノ儀ハ、御物ヨリ御取入可被相渡候間、

御軍賦役ヘ相付、早々挺數可願出候、左候テ代金之儀

ハ、早速致手当置候様候、此旨御軍賦役ヘ申渡、向々

ヘモ不洩様可致通達候、

慶應三年丁卯三月

伊勢島津

這ノ令ヨリシテ、國中一般施条銃ヲ以テ軍銃ト一定シ、

大小錯雜ノ患ナク、彈藥製造ニ煩雜ナキニ至レリ、施

条銃トハ即チミニーヘル銃ノ訳名ナリ、長崎ニテ数万
丁一時ニ英國人へ調文セラレ、各分限ヲ以テ買入レン
ムルノ方法ナリ、○當時官カ買入ノ施条銃漸ク巷万挺
内外ナリキ、此令ヲ以テ島津家兵制ノ一大沿革ニテ、
稍其緒ニ就クト云フベシ、

三九九 軍賦改正ニ就テ知行高制限

御軍役定

諸郷

一 自作高五拾石限〔^{〔本}土着土所有地〕〕

一 高百石限

御城下

一 小番・新番・御小姓与持高貳百石限

一 大河平孫八郎儀〔^{〔本}土着土所有地〕〕、藩鎮之任被仰付置候付、持高五百石

限

一 寄合并無高之面々持高五百石限

但持切在之儀ハ、不構多少是迄通、

一 御一門方并一所持之儀ハ、持高是迄之通

但以采給地高嵩求候儀不相成候、

右過上之高壳払ニ就テハ、高場所善悪モ有之筈候得共、
壹石貳百貫文限リ

但御城下百石以上、諸郷三拾石以上持高有之者、此

節過上高相片付迄之間、相求候儀差留候、

高割付御軍役定、諸郷左之通

一 自作高貳拾石以上ニ付西洋製施条銃〔^{〔本}土着土所有地〕〕一挺

但要具相添、

一 右同高三拾石以上ニ付大砲挽馬一疋

一 右同四拾石以上ニ付軍馬 一疋

一 持高五拾石ニ付西洋製施条銃 一挺

但要具相添、

一 右同七拾石以上ニ付大砲挽馬 一疋

一 右同八拾石以上ニ付軍馬 一疋

御城下左之通

一 持高五拾石以上ニ付一人分自筒

但貳拾石以上御切米御扶持米被下置候面々同断、

一 持高百石以上ニ付三人分自筒

但御役料同断、

一 持高百石以上ニ付貳人分自筒・大砲挽馬壹疋

但御役料高同断、

一持高貳百石以上付自筒三人分・軍馬壹疋

但貳百石以上之面々ハ諸士同様之賦、

一持高貳百石以上付三人分自筒・軍馬壹疋

但軍馬立候ハ、大砲挽馬ニ不及候得共、三百石以上

ハ大砲挽馬貳疋、尤持馬御役料高之差別無之、

右準シ五拾石嵩候節ハ、自筒一挺嵩、百五拾石嵩之節

ハ、挽馬壹疋相嵩、貳百石嵩之節ハ軍馬壹疋相嵩候儀、

前条之賦タルヘシ、

但自筒之儀ハ、都テ西洋製施条銃一所持并持切在有

之面々迄、

一高百石ニ付三人分持筒

但領地高買入高御役料高ニ不拘同断、

右賦之

一高五百石ニ付軍馬壹疋宛右同

一高貳千石ニ付大砲 一挺宛

但四斤半以上之加農又ハ拾式拇之忽砲以上、

一高壹万六千石以上ニ付大砲一座

但八挺一座之賦、

右大砲挽馬之儀ハ、家中馬之内ニテ主人ヨリ可申付事、

但銃砲共一挺ニ付彈藥貳百發分ツ、用意候事、

兵備ノ費用ハ其分国ノ力ヲ以致整調候儀、古今之通例

ニ候、既ニ世態變遷イタシ乱階相開候得ハ、御軍役之

儀眼前之急務故、海軍所被召建英式御採用ニテ、大砲

ハ勿論施条銃追々御備相成候得共、未十分之御備付致

不足候付、今般別紙之通御軍賦ヲ以、御領内一統高割

被召建、急速兵備相整候様有之度 思召ニ候、元來武

家知行高之儀、分限ニ応シ大小之兵賦有之事候条、一

統此旨ヲ存シ、根元ヲ不致忘却、關係之役局ハ、猶又

兵器之備精微ニ遂吟味申出候様、御沙汰破為 在候

条、不洩様可致通達候、

〔本〕
「三月」
圖 書〔島津〕

右衛門〔桂〕

伊 勢〔島津〕

龍 衛〔川上〕

刑 部〔新納〕

四〇〇 久光公御上京布告

右御首途 御名代

三月廿五日午刻

右御發駕、

右来ル十九日 中將様 御發駕被仰出置候得共、右之
通被召替候旨被仰出候条、可承向へ可申渡候、

三月

伊勢

四〇一 久光公御上京ニ就キ俗論

卯三月二十五日晴、今日四ツ半過ニ丸公御發駕、陸軍
兵士十六隊被召列候、四ツ前陸軍方ヨリ南泉院下 照國
宮江參詣、四ツ打切比ニノ丸下ニ立居被在候、我々共
モ石燈爐迄差越拜見、
但

窃ニ噂承ルニハ、誠ニ珍敷出立、兵士凡七百人位行
散成出立ニテ、是カ役ニ立候へハ、ツマラン役ニ立
スルモツマランモノニ付、今様ニ出立ニナラン、イ
タシ様モ可有之モノ也トイフ人アリ、音語ニシタリ
トイヘリ、

一右ニ付舟中一七日ニテ大坂江着帆、十日迄御滞在ト申
モ、土州候杯被待合ヨシ、十一日大坂出立、十二日御
京着候由、胡服杯俄ニ相替候儀杯、段々評判有之候へ

トモ、未髓ニ追テ承候旨可記事、
(付腕力)

四〇二 軍賦改革ニ就キ地頭・郡奉行ニ達書

諸地頭 郡奉行

右ハ今般御軍賦高割ヲ以被相定・夫々応高頭銃砲共軍
馬之賦被相究候ニ付、取調掛被仰付候条、郡奉行ニハ
受持郷々之儀ハ地頭へ引合、一統此節 御趣意ノ通、
精々行届候様、受持ノ御役局ニ於テ吟味致シ、申出候
儀ハ其通ニテ、諸事精微ニ可致取扱旨可申渡候、

慶應三年丁卯三月

右衛門

四〇三 大小砲隊名簿

大砲組一隊

小隊長

平 吉左衛門

半隊長

松永強左衛門

分隊長

慶応3年(1867)

川上四郎太

有馬東之丞

岩元平八郎

大河平武輔

小頭

石神万右衛門

飯牟禮喜之助

義岡善之丞

大迫新左衛門

土橋次郎助

汾陽尚次郎

伍長

讚良清右衛門

入江直次郎

有川藤七郎

福島四郎次

八木新平

村田與右衛門

岩城彦四郎

桂宗右衛門

戦兵

柴山四郎兵衛

國分覺兵衛

川上孫七

龜澤源右衛門

松田佐五助

東郷八次郎

國分才次

兒玉覺之丞

中江喜之助

餅原正之進

大迫新次郎

重久七之助

平田尚之助

松元尚之丞

園田新左衛門

竹内十蔵

税所佐一郎

猿渡清右衛門

肥後助左衛門

伊佐敷金之進
諏訪次郎右衛門
三原藤太郎
有馬八郎太
深柄彦五郎
伊地知彌兵衛
福崎喜十郎
木村吉之助
梅北伊八郎
益満新七郎
肥後平八
和田正之丞
山之内幸次郎
津留八之進
木場休之丞
有馬藤七
仁禮孝左衛門
山口彦八
川上直太郎
柴山矢八

諸役者

山口彌次郎
東郷己之助
新納左平太
平田喜之助
篠崎彦二
篠崎七郎兵衛
萩原彌次郎
上村彦之丞
重久道榮
田中十之進
木藤吉左衛門
淵邊八郎次
面高源之丞
有馬彦一郎
大山源右衛門
能勢源左衛門
竹内正助
喇叭
肝付彌四郎

慶応3年(1867)

旗隊

鮫島芳徳

田中藤五郎

鮫島龍蔵

讚良休蔵

貴島卯太郎

竹内宗之丞

鞘手喇叭兼役

知識源助

篠原諸一郎

越山休蔵

榊山長蔵

楽隊小頭

川上直助

松崎壮八

大太鼓

山鹿四郎

笛手

山田猪右衛門

深江彦左衛門

川北助之丞

川田源四郎

玉薬方支配

伊勢仲左衛門

伊地知十郎

土橋藤五兵衛

大砲隊玉薬方

篠原庄左衛門

兵糧方

竹内喜右衛門

普請方

伊地知彌八郎

人馬方

家村猪之助

醫師

付足輕式人
寺原雄弘

一番隊玉薬方

石原清次郎

兵糧方

竹内十郎太

普請方

山本猪之助

人馬方

伊地知壮八

付足輕式人

医師

石神良策

二番隊玉葉方

加治木清之丞

兵糧方

西之原彦助

普請方

中村勇吉

付足輕式人

医師

河野元康

三番隊玉葉方

藤井直次郎

若松金十郎

普請方

西郷半兵衛

人馬方

竹迫彌七郎

付足輕式人

医師

茅島恕齊

四番隊玉葉方

藤井才太郎

兵糧方

園田勇吉

普請方

川上嘉左衛門

人馬方

山口彦左衛門

付足輕式人

医師

末野嘉仙

五番隊玉葉方

本田休左衛門

兵糧方

染川源七郎

普請方

吉留與一左衛門

人馬方

中島仲兵衛

付足輕式人

医師

神田元淳

六番隊玉藥方

濱田祐一

兵糧方

土持平左衛門

普請方

吉留直之進

人馬方

谷元作之助

付足輕式人

医師

濱田瑞庵

主取夫

右ハ此節

式拾八人町方手当

中将様就 御上京、右之通被仰付、被召列候条申渡、
可承向へモ可申渡候、

三月

伊勢「島津」
(米)

四〇四 新田開発之達書 (本藩達書)

方今天下之形勢変遷シ、諸国一統米価諸色日々高直、
就中長防御征討已来益人心紛乱、物価騰貴、近年ニイ
タリテハ未聞之貴賤共甚困苦ニ迫リ、御領内之儀ハ、
元来米穀闕ヘカラザル要品出産相少ク、中ニモ米穀ハ
年々他邦ヨリ輸入シ、夏分ニイタリ末々ノ者共、分テ
令難渋、是迄多々御配慮被為在候末ニテ、実ニ当世態
今形難相濟ハ此事ニテ、片時モ難差置、急務ハ足食之
法ニ有之、他邦之産ヲ輸入シテ、不足ヲ補ヒ候事ニテ
ハ、不相濟時勢ニ候ヘハ、兼テ勸農方関係之御役場ヲ
ハシメ、郡奉行ニモ精々思慮ニ涉リ候儀ハ勿論之事候
得共、只今ニイタリ候テハ、尚又尽吟味、米価増行之
良法モ可有之候ヘ共、差テ諸郷之田畠致開拓、御国力

相増候外有之間敷、然ハ新地開闢之儀ハ、古来ヨリ夫々御規モ有之儀ニハ候得共、兎角時勢之變遷ニ随ヒ、人情ニ基キ、利害得失致勘弁、旧格モ不致一新候テ、実地難施儀モ有之賦ニ付、非常之吟味ニ不相涉候テハ難行事候間、其根元ヲ改メ、仮令古田相潰新田相開、却テ米穀出来増、僅之古田ヲ吝ミ、數畦之新田ヲ害候類モ可有之候間、能々吟味第一之事候半、且亦地面多人戸不足シ、亦ハ人口稠密ニテ、地面相少キ場所モ有之、往々人配移等不被仰付候テ不相叶儀ハ、眼前數多有之筈ナガラ、是等之儀ハ不容易訳ニテ、急々御取付モ出来兼候ヘ共、彼是次第順序ヲ以被仰付賦ニ候処、兎角米穀一粒タリトモ出来増、尺寸之地モ不空様、諸郷々水利便利之場所ハ、此節無残屹ト取シラベ、其郷内ニテ相開度場所ハ、望之モノヘ申付、名前迄相記シ為差出、人少ニテ手ニ難及場所ハ、一郷一村限畦反取シラベ、一帳取仕立、無抜目可申出、左候テ当分村居之場所タリトモ、田地ニイタシ、格別可然地所ハ、山手へ人家引直シ候様ノ儀モ有之筈候間、右等之所迄巨細ニ致見賦置、是又可申出候、尤飯野本陣原・小林之内南西方村・高崎霞ヶ原、又ハ二ハラヶ原抔手広之山

野有之由、右様之広所諸人自力ニ及兼候場所ハ、右溝筋等御物ヨリ水利丈ニテモ御取建被下候ヘハ、直二田地ト相成候場所モ有之筈候ニ付、右様之所ハ、暫ラク望之者へ為任置、自然開立候様有之度、右ニ付テハ御年貢等之儀モ、是迄之仕向ニテハ、譬ヘバ三ヶ年作取ニテ、其上段々作法相立居候ヘ共、九ヶ年又ハ十ヶ年軟、輕緩之取扱相成候ハ、開所之功モ連々相立候訳モ可有之、地面サヘ相開候ハ、御国益相成候儀ハ勿論ニテ、隣領脱走之者モ數多有之哉ニ相聞得候間、歸郷之者モ、漸ク相聞ク御仁恵之一筋モ相立、旁可然哉、右通ニテハ、故障付候儀モ難計、得ト致吟味可申出候、將又是迄所ニ依テハ、仮令相成之地所有之候テモ、相聞候ヘハ、却テ其郷村役目等、面働ケ間敷存、不申出モ有之、又ハ都合ヲ以テ、自分開イタシ度内存ニテ押ヘ置、或ハ古田用水障抔、總計之儀ヲ急々申立候哉ニモ相聞ヘ、看々後年御国益差見得居候モ不顧、自己勝手而已相計候テハ、以之外成次第ニテ、右辺之処郡奉行初、郷内役々々致探索、無残所踏込精密可申出候、聊緩セ之儀ハ有之間敷、若役々等閑ニ打過候ハ、可為曲事候、末々能々御趣意之程、委細申論候様可取計、將

又抱地之儀、遠近ヲ以テ場所柄被定置候へ共、以來郷内人戸ニ応シ尽吟味ヲ、無差別後害不相生様、吟味第一之事ニ候、扱農ハ国ノ根元ニテ、可相開地面ハ折角相開キ、勸農之趣意屹ト相立、御国力相増候様トノ儀ニテ、更ニ御物之御勝手筋ノミニ無之、前文通米穀不足ニテハ、毎々諸人致難渋、殊更世形勢モ漸々危殆ニ趣^趣、万々一モ米穀不通融ニテ、一同困苦至候テハ不^不濟、偏ニ御領内万民生活之御仁恤ヲモ被相施度、兼テ御趣意之事候付、以來ハ尚又諸郷之苦情相成候ハ申迄モ無之、万端氣ヲツケ可申出候、尤新田相開人戸不足之郷々へ、押々開拓之地面為請持候儀更ニ無之、夫等之儀ハ能々相含、聊趣意違之儀共無之様、諸郷役々へ叮嚀反復申論、巨細ニ致吟味取調申出候様、郡奉行へ可申渡事、

右慶應三卯四月六日被相下候事、

四〇五 福井藩青山小三郎ヨリ大久保一蔵へ書翰

貴翰被成下拝読仕候、時下清和ノ節ニ御座候処、先以テ愈御安泰被成御奉職奉恭賀候、過日於浪花表ハ、御

繁務ノ御中へ罷出、御懇話トモ種々拜承仕、万々難有奉伏謝候、陳ハ大蔵大輔様御国表御発駕ノ御治定、御問合ノ趣委曲拜承仕候、何分ニモ今明日之内ニハ、是非一左右可有之筈ト、邸中相待居候得共、于今何ノ沙汰モ無御座、唯今ニモ着便次第可申上ト奉存候、左様御承知可被成下候、御追書ノ件々其后ノ御模様、如何ノ御運ニ御座候哉、一切承知不仕候得共、窃ニ港開ノ義ニ付テハ、兎角彼是紛紜ノ説モ、有之候哉ノ趣ニ御座候得共、屹ト申上候程ノ儀ニテモ無御座由、何レ両三日ノ内參堂仕、万緒御伺申上度奉存候、先ハ不取敢拜酬マテ如此ニ御座候、頓首拜、

四月七日

青山小三郎

大久保一蔵様

侍史拜復

四〇六 大久保一蔵ヨリ西郷吉之助へ書翰

中将様益御機嫌克被為遊御滞坂、恐悅御同慶奉存候、於爰元從

大久保報告〔采〕
〔西郷吉之助へ〕

朝廷再度就

御沙汰、幕府御請相成候后、別段相交候義無御座候、別紙御請書写等差上申候、右之趣にてハ御達之御趣意とハ相反シ、表通布告之義ヲ御請申上候筋ニ相見得、弥愚弄を極候次第御座候、当分之処にてハ黙として、各藩登京之上ノ動静ヲ願視いたし候賦ニ可有御座候、越江引合候処、別紙〔采〕(前記青山書翰参照)之通返書にて未相分不申候、兩日之内ニハ御日限等御模様相可知申候付、早々申上候様可仕候、此段一先形行申上置候、已上、

四月八日

大久保一藏

西郷吉之助様

追て阿州ハ隠居、家督之御礼も有之、十二三日比上坂相成候由ニ御座候、
〔島津忠承氏所蔵本にて校訂〕

四〇七 〔福井藩士毛受・青山ヨリ大久保利通へ

書翰〕

〔巻封〕

大久保一藏様

毛受鹿之介

青山小三郎

一書拜呈仕候、一兩日は漸時節之氣候ニ相運候処、愈

御安泰被成御専務、鴻賀之至ニ奉存候、陳は過斎国便着にて、大蔵大輔様ニも来ル十日御国許御発駕にて、十五日御京着之段申參候、兼て御沙汰も御座候ニ付、不取敢以書中為御知申上候、余事拜鳳之上江讓、草々如此ニ御座候、頓首拜、

四月八日

〔島津忠承氏所蔵本にて校訂〕

四〇八 大久保一藏ヨリ小松帯刀へ書翰

大久保報告〔采〕〔小松帯刀へ〕

尊翰只今相達難有拜見仕候、於其元

中将公益御機嫌克被為遊御滞坂、恐悦御同慶奉存候、尔后

尊公様ニも御安祥被為成御在勤奉大慶候、爰元模様ハ今朝大略西郷方へ申越候通にて、別段相替候事件も無御座候、越老〔松平慶永〕公御発駕御日限ハ、別紙之通懸合御座候付、早々差上申候、此上ハ御治定通御登京之上、形勢御熟視被遊候外有御座ましく欵と奉愚考候、扱英ミニストル御伺申上候模様ニ御座候由、幸之御事ニ御座候間、尚亦十分之御応接相成、心ヲ攬置度ものニ御座候、

風説ニ御座候得共、於幕勝房州ニ英之説得ヲ任シ候処、容易ク御請利ヲ以説候得ハ、訳なしと申居候由、迪も其任之事ニ動ハ致ましく候得共、油断相成ましく奉存候、先尊答旁草々如此御座候、謹言、

四月八日

大久保一藏通利

帯刀様小松藩

侍史

追て、御書物方ヲ林光院へ一応引移シ、跡ヲ病院ニ決シ申候、一廓之場所ニて病院ニ相当歟と奉存候、

大久保利謙氏所藏本にて校訂

四〇九 水野溪雲齋ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

(三條公ヨリ御召)

[番号一八ノ九と同文により削除]

四一〇 大極丸代価一件

奉願口上ノ覚

大極丸船価ノ外、於長崎表金子貳千両御用達仕候、御返納ノ儀ハ兵庫表へ着船致候上、船価高ノ三步ノ一ト

共ニ、御返納ノ御約定ニ御座候処、今以相滞、異人共ヨリハ毎々私へ向ケ催促仕候故、是迄色々申延置候処、最早此節ニ至リ、是迄金子御不納、且昨冬年中長崎表へ出帆可仕筈ノ処、月限等モ御存ノ通唯々延引ニ相成、就テハ昨日則異人船長ナイント申者、天保山沖へ神戸船借請来渡仕、早速小野氏へ論判イタシ度旨、陸奥氏・白峰氏へ談判致、御両所御返答ニハ、小野氏上京ノ儀ニ付、一先神戸表へ帰舟致候様、御談判ニ相成申候得共、異人聞入不申、亜米利加軍艦へ昨夜一宿仕候、尤至極ノ儀ト奉存候、就テハ今夕刻迄ニ、私儀へ右軍艦迄参リ呉候様、御両人ヨリ被仰聞候へトモ、是迄色々申延シ、貳千両モ今以不相納、何分異人へ面会難相成、最早船価ハ其尽、当月十七日ニ、是非出帆仕候儀ニ御座候間、貳千両ノ分、御上様ヨリ御出銀被仰付候儀ニ御座候哉、此段奉向上候、出帆仕候ニモ、御存ノ通船中へ別段用意金等モ無御座、甚困入仕合ニ御座候、恐多御願事ニ候得共、船中要用金トシテ、五百両文ケ御下金被仰付候様奉願上候、尤今明中ニハ不拘、慥ニ御下金御上聞濟被仰付候ハ、夫ヲ以唯今ヨリ天保山沖へ罷越談判仕、一先神戸表へ帰船為致申

候、何レ同所ニテ出帆相定メ可申候、

一此度大極丸長崎表着船仕候上ハ、必御船印引替仕候哉
ニ奉察、乍恐左様成行候テハ、於私儀ニ御上様へ難
相濟奉存、若哉其儀ニヲヨヒ候ハ、外ニ風帆船モ今
一二艘商会へ居合在申候間、其内一艘借請運送仕候心
得ニ御座候、御船印ノ儀ハ、其俣乍恐二三ヶ年ノ処、
私へ被仰付候ハ、難有仕合ニ奉存候、左候得ハ此度
帰陽仕候上、商会異人共ニ談判仕、相成丈ケ大極丸一
条格別面倒不相掛候様、執計可申上心得ニ御座候、此
段以書面奉伺上候、以上、

於長崎ウイルス商会内

慶應三卯四月十日

松尾豊作印

愛甲新助殿〔悉〕「小松カ用連」

四二一 神代勝兵衛ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

〔番号一〇七と同文により削除〕

四二二 五卿取扱向照会

任好便一書拜呈仕候、先日は御旅宿へ參上御妨ニ相成

申候、其後又々博多表之様御越之由、度々御往返御氣
削可被成奉存候、扱日外同藩島田辨左衛門より御引合
申候節、五卿取扱一件之儀ニ付てハ、万事当藩江御打
懸御頼被置候段、御申聞之由、其儀ハ弊藩も御同様之
事ニ御座候、然処此後猶又何方よりの御使者、且御文
通他所人御応接等之儀差起り候節、当藩より御相談ニ
相成候儀御座候ハ、如何之思召ニ御座候哉、善悪共
一切御打懸御存寄無御座候段、可被及御返答候哉、且又
筋合丈ケハ御申入被成候儀ニ御座候哉、段々心組ニも
相成候事ニ御座候間、右之趣そと奉伺候、尤弊藩江は
総督府より御沙汰之趣有之候間、右辺之儀差起り、当
藩より相談ニ有之、其筋御沙汰之趣と、齟齬いたし候
筋ニも有之候得は、成敗ニ相拘り、存寄不申候ては、

第一

〔マ〕公義総督府ヲ奉輕蔑候筋合にも相成、第二ニハ五卿之
御身為ニも宜敷有之間敷、第三にハ当藩且弊藩にも差
障り可申、彼是愚考仕、先時〔悉〕も關山先生奉初、肥・米
両藩へも、其趣を以御談合ニ及、福岡江も引合申候儀
ニ御座候、必しも当藩江は依頼之儀御同様ニ付、難題
をかけ申候心得ニテハ決して無御座、必竟先時之件々

当藩之見切り共、何とも相分不申、因て不得止引合、
件々安心之場ニ至リ申候事ニ御座候、辨左衛門罷出候
節、不束ニて尊慮伺落し申候哉も難計、乍御面御返
書被成下候様奉希候、以上、

四月十四日

和田権五郎

和田・大里・横井藩名問合
之事、肥後熊本之人也

大里隼之助

横井中右衛門

黒田嘉右衛門様

尚々総督府より御沙汰之趣ハ、当藩且肥・米共ニ同
様之由ニ御座候間、定し尊藩江も御同様と奉存候得
共、為念是又奉伺候、以上、

四一三 全上回答

御細翰忝致拜見候、陳は、五卿方取扱一件ニ付、被示
聞趣逐一了承、弊藩存慮之次第は、過日御同藩島田君
へ申上置候通ニて、万事福岡藩へ委任致し置候事ニ有
之、殊ニ御使者往来、且御文通他所人御応接等御差支
有無之儀ニ付、弊藩ニ於テハ、別段総督府より承知仕
居候儀も無之候条、此末右等之儀、当藩より御相談ニ

相成候節ハ、聊不相拒何も異存無之趣を以、返答可申
入覚悟ニ罷在候、尚委細ハ期拜眉可申上、先は此旨御
報而已、早々、以上、

四月十四日

黒田

横井様

大里様

和田様

(番号四二二四一三黒田文紀氏所蔵本にて校訂)

四一四 福岡藩神代勝兵衛ヨリ黒田嘉右衛門へ

書翰

(番号一一三と同文により削除)

四一五 三條殿ヨリ黒田嘉右衛門へ酒肴ヲ贈ラル

(番号一一四と同文により削除)

四一六 久光公泉涌寺御参拜

丁卯四月十九日

四時泉涌寺坊中法安寺へ被為入、御装束 御召替ニ

テ孝明天皇山陵并 御位牌殿へ御拝礼、又ハ法安寺へ
被為入御半袴御召替ニテ、伊達伊豫守様御旅館へ 御
見舞、夫ヨリ松平大蔵大輔様へ御同断ニテ、七ツ半時
御帰館、

四一七 武部諫尾ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

〔番号二〇と同文により削除〕

四一八 〔東久世通禧ヨリ薩・長へ達示〕

親ク外国ニ交ルハ緊要ナリ、而シテ信ヲ尽スハ百事ノ基
ナリ、是レ

帝ノ素心ナリ、故ニ汝ノ輩深ク心ヲ用テ、以テ此地往來
ノ外国人ニ向テ、非礼無法ノ行アラシムルナカレ、

千八百六十八年二月八日

東久世少将
〔通禧〕

長州・薩摩ニ示ス

四一九 兵庫開港ニ就テ御達書写（本藩へ直達）

過日再考建言文中、且一旦取結候条約變更ノ儀ハ、所
詮難相叶事勢ニ御座候間、各国ヨリ申立候儀有之候節
ハ、過日建言ノ趣意ヲ以、夫々申達置候事ニ御座候云
々、文面如何ニ候、何分

御沙汰候迄必々開港差許候儀有之間鋪、其段心得可有
之旨、摂政殿被命候事、尤請書差出可有之事、

右三月廿九日所司代ニ達シ、早々可達大樹、武伝ヨリ
申渡候事、

右四月朔日朝、本藩へ被達云々、